

# 冬木に綴る超越の謳

tonton

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

過去、十年前の街に一つの災禍が吹荒れた。

建物は塵に、草木も灰へとかえり、多くの人が亡くなった大災害。

物語は件の街、冬木で大災害の生き残りである学生が、*“*聖杯戦争*”*という非日常に巻き込まれていくお話。

※Dies iraeとFate/stay nightのクロスです。前作よりFate成分薄目かもしれません。

序

目次

| Footsteps creeping | 1

| Studies scenery | 10

| Phantom raider | 19

| Long long night | 30

| Long long night 2 | 42

嚙矢

| Beginning nightmare | 49

| Argument school | 58

| Strange sorcerer | 68

| Evil companions | 78

| Twoserbants | 86

| Savage beast | 99

縁已生

| After engagement | 114

| Foreign visitor | 120

| Black armor | 131

| Deus ex machina | 141

| Facelless noname | 151

境界

| Break of day | 167

| Border out | 178

| Poetry of dusk | 185

| Afterlight | 197

| B  
o  
i  
s  
d  
e  
J  
u  
s  
t  
i  
c  
e  
|

218

| T  
u  
r  
n  
i  
n  
g  
p  
o  
i  
n  
t  
|

205

## 序

### —Footsteps creeping—

懐かしい夢を見た気がした。

夢が過去からの体験より構築し、そこから願望なり心象なりを具現化させるものだとして、それは自分の記憶をなぞるもの、所謂「記憶夢」だった。

目の前で壊れていく景色。

街が焼かれ、草木は灰に散り、人々は骨から塵へと浄化される。

悪夢のようであるが、これは紛う事なく過去に起きた「災害」の光景。その地獄の只中で、ただ一人生還した子供が幼い心に傷を負った記憶だ。

「……またかよ、くそっ」

掛けていた布団はうなされていた為か、蹴飛ばされて畳の上で小山と化していた。

季節が冬に差し掛かり肌寒くなるこの頃、いまだに引きずるかのように夢に現れた「光景」に頭痛がする思いだ。というのも、この夢を見たその日は決まって一日気分が悪い。いや、誰であれ、人の死を思い出せば気も滅入る筈。それも地域単位の記憶となれば不貞寝もしたくなるだろう。

などと自己弁護しつつ二度寝の誘惑に体を横にしかけたが、

「あ……そうか、今日、だっけか」

頭痛を抑えるために額へ手を当て、横を仰いだ先で職務怠慢にも引つ繰り返っていたデジタル時計を確認した。決して騒音を物理的に黙らせたのではなく、悪夢を払拭する役にも立たなかった報いだ。そう、これはその怠慢に対する報復であって正当な筈だ——などと思いつつも、脳裏に今手持ちの懐事情と記憶にある家系簿を計算していると。

「失礼します」

襖を小さく叩く音から間を置く事に三秒。昔からその間が狂う事無く開かれた先から顔を出したのは、この家に自分が小さい頃から家政婦として通つてくれている久宇 舞弥だ。

「もうじき桜が来る時間です。登校まで時間はありますが、お早く」  
「あ、うん。ありがとう」

要件も短く襖は閉じられてしまったが、彼女が口数が少ないのは今に始まった事ではない。もともと、単に無愛想なだけではないし、あれで結構愛嬌があるのだと、そこは昔から付き合いがある為に少しだけ優越感がした。

だがしかし、見た目はショートボブにキツチリとスーツを着こなした麗人。なのだが、その上からエプロンをかける着合わせはどうにからないものか常々思う。スーツ姿が似合いすぎているだけに、はつきり言つてエプロンが異様に浮くのだ。まあ、ともあれ、数年間口を出れずにいる事案に唸りつつも、取りあえず着替える事にした。

彼女は親父——実親ではない——の知人だ。親父、衛宮 切嗣と二人で暮らし始めてこのかた家事、特に料理が壊滅的だった彼との暮らしを見かねたのか、朝と夜に手伝いに来てくれる。今となつては頭の上がない女性だ。

切嗣も切嗣で定期的に家を留守にする人間であつたので、恐らくその時何処かで知り合つたのだろうが、仕事の話をしたがらない性格だったので実際は詳しくない。舞弥に一度だけ聞いた事があつたが、表情の変わらない彼女が珍しく言いづらそうに顔を歪めたのが印象的だった。その時はなんやかんやと話を逸らされてしまつたのだが。

「おはよう。なにか手伝う事は——？」

思考に耽りながらも進んでいた廊下の先、敷居に掛けられている暖簾をくぐればそこが我が家の居間である。

鼻孔と空腹を訴えだした胃を刺激する匂いから、どうやら彼女は今朝も早い時間から支度をはじめていたらしい。家政婦という立場とはいえ、朝早くから食事を用意してくれるというのは得難く非常に助かっている。親父がよく家を空ける人間であり、早い段階から自炊を

始めた自分としても、こういう事もあつて頭が上がらない。

故に、起こしてもらつた礼、にもならないがこれでも家事スキルはそれなりのものだど自負している。遅くなつたがここからでも挽回せねばと申し出てみたが――

「それは助かりますが――寝癖、立ってますよ」

「うお!？」

振り返つた舞弥は努めて冷静に、こちらの不恰好を指摘してきてくれた。

これでも最低限の身だしなみには気を使う方だと思つていたが、どうやら、今朝は思考に没頭しすぎて若干抜けていたらしい。腕をまくりながらやるぞつと意気込んだ姿勢がまるで決まつていない。端的に言えば外している、恰好が決まらない事この上ないだろう。

バツが悪いと頬に血が集まるのを自覚しながら指摘された頭部を抑えていると、

「ごめんくださいーい」

どうやら今日という日はとことん容赦がないらしい。

「え、あちよつ」

「私が応対してきますから、貴方は身だしなみを整えてきてください」

舞弥が折角早めに起こしてくれたというのに、件の客人が既に玄関先な事態。舞夜に劣らず規則正しく折り目正しい彼女は、今日も時間に忠実と15分前行動だった。

慌てるこちらに対し、平常運転だと言わんばかりに玄関へと向かう舞夜へ片手で礼の形をとりつつ、急ぎで洗面台へと向かった。

「あ、おはようございませす先輩」

「お、おう。おはよう桜」

舞弥の機転により、後輩の前でだらしがない姿を晒すという事態を回避して居間に戻つた後、台所から淡い桃色のエプロンを学生服の上に着けた後輩、間桐 桜と鉢合わせをした。

同じ学園に通う一つ下の女の子。藍色の髪に片側に結つた桜色のリボンが印象的な子で、知り合つたのは中学の頃ぐらいだったか。

彼女の兄とは昔からの腐れ縁で、昔から無茶というかやんちゃというか、問題を起こすその馬鹿兄の不始末に二人して奔走していた記憶が脳裏を駆け巡る……まあ、おかげというのか、彼女からは好印象を持たれているという感触はあった。でなければ、いくら付き合いの長い知り合いとはいえ、態々早朝から手伝いに来ることなどないだろう。

「これで朝食を並べ終わるところですから、先輩は座っていてください」

ニコリと、手伝おうと伸ばした手にかまう事無くスラリと躲した桜は、慣れた手つきでお盆に乗っていた小鉢を並べていく。

テーブルの上には白米に香の物、焼き魚に味噌汁、栄養価からか煮物や薄味の刻み野菜等々。内容は純和風な献立であるが、朝食にしたら十二分に豪華な部類だろう。一人でこの量を準備するのなら、自分なら匙を投げる自信がある。

ともあれ、献立に文句がある筈もなく、有難い事にはかわりないと、ここは厚意に甘えて座布団に座る。

それを見て、ようやくキッチンから姿を現した舞弥とともに、桜が対面になる形でテーブルに着いた。

切嗣が家を空ける間は舞弥と二人きりで食事をする事が多かった。気まずいとか、間が持たないという訳ではないが、それでも桜という一人が増えただけで食卓は格段に華やかなになっている。本当に、なんで彼女が週の殆どを手伝いに来てくれるのかは分からないが、ともあれ。

「じゃあ、いただきますか」

感謝をこめて、と手を合わせると、正面にいた桜がその横、おかず一式に伏せられた茶碗の前、空いている席を指さしている。

「先輩、藤村先生は？」

「ああ、藤ねえなら問題ないさ。どうせ——」

「おっはよー諸君!!」

並べられた四人分の食器。その最後の一人、藤村 大河は遅れながらも、食事時には必ず現れる。不思議な事——いや、認めたくはな



いが、これは我が家では日常茶飯事の光景だ。

本当に、食事時くらい静かに食べられないのかと時々思ったりする。

「ほらな」

「……時間通りみたいですわね」

「おー！ 味噌汁！ 漬物！ そしてごはん！ まさに日本の朝食！」

この通り、ご飯一つでなぜそこまでテンションが上がるのかと議題に上がりそうなものだ。いや、頼むからその前にまず席についてほしい。もつと言うなら今入ってきたばかりなのだから手ぐらい洗ってきたらどうなのかと。コレで教職者などという聖職に就いているんだから、日本の教育事情に頭を抱えなくなる。主に雇用と国家試験の制度について。

「はあー……あ、うまい」

溜息をつきながらも箸を進めようとまず手に取った御椀の味噌汁は、落ちかけていた気分を持ち直すほど爽やかだった。

食事を賑やか——というより喧しくも済ませ、片付けに名乗りを上げる。そうであるのが当然だと後輩の桜も進んで台所に入ろうとしたのだが、大河曰く、彼女の所属している部活の朝練に間に合うギリギリだった。クラスを受け持つ教師であり、顧問として部活を受け持っている身であれば、ここで呑気に朝食を食べている暇があるのならさっさと出た方がいいと思うのだが、もしくはもつと早く起きればいい話だろう。

ともあれ、大河が受け持つ部活に所属している桜と二人に身支度を促す。流石にそんな時にまで手伝わさせるわけにはいかない。手に付けていた片付けもそこそこにして中断し、とりあえず玄関へ向かわせた。

「じゃあ先輩、私は朝練があるのでコレで、お夕飯の買い出しは——」  
「さーくーらーちゃん！ 早くしないと置いて行っちゃうぞー！」

後ろからかかる声にすまなそうな顔をされるが、こちらに引き留める権利などないし、ここで難癖をつけて部活に遅らせるなど先輩とし

て有るまじきことだろう。

「という事なので、またあとで連絡しますね」

細かいことはいいいからとようやく彼女を送り出し、さて後片付けだと腕まくりなどしていると、後ろから声を掛けられた。

よくよく今日は背後を取られる日である。

「桜は、もう行ってしまったみたいですね」

「ああ、さつき藤ねえとって、それは？」

今二人が出たばかりの玄関を指さしながら振り返ると、そこには二つの包みを持った舞弥がいた。

「大河と桜の分を含めて三つお弁当を包んでいたのですが、渡しそびれたようです」

「ああ、そういう事なら俺が届けとくよ。弓道部とは知らない仲じゃないし、顧問だから藤ねえも練習場か職員室だろうし」

どうやら丁寧に三人分の弁当まで用意してくれていたらしい。

桜もアレでいて料理が上手で、初めは自分でも作れるからと断っていたのだが、一緒に作った方が効率的だと言われ、ものは試しにと一度渡されたお弁当を食べて崩れ落ちていた姿は今でも印象的だ。

そこにどんな葛藤があったのか、男の自分には窺い知れないが。

「では、お願いします」

その後しばらくして、彼女は舞弥に師事する様になり、衛宮家の食卓が華やかな事この上ない。が、未だお菓子作り、特に洋菓子に関しては遠く及ばないというのが本人談だ。どの程度かというと、一度「暴れだした藤ねえも舞弥の菓子には勝てない」という鉄則ができる程。それを踏まえて、彼女には本当に助かっている。ほんと、切嗣がどういふ伝手で彼女と知り合ったのか激しく疑問だ。

今度家に帰ってくるのがあれば問い詰めるのもありかもしれない。などと思しながらも片付けを済ませ、自分も登校する準備をせねばと居間に置いておいたカバンを取りにもどろうとしていると、舞弥に引き留められた。

「実は、今日の夕飯なんです私の方で用が入りまして、都合上2・3日ほど空けてしまうのですが」

それは確かに舞弥にしては珍しい急な申し出だが、家政婦で来てくれているとはいえ、もともと日数的にも時間的にも規定以上に様子を見に来てくれているのだ。多少間が空いたところでそんなものはわがままの内にも入らない。

「確かに珍しいけど、舞弥さんは働き過ぎなくらいなんだから。全然問題ないですよ」

話しながらキッチンより居間へ出るとカバンを掴み、肩にかけて弁当の入った包みを手提げに入れる。

今年で高校に上がって二年目、昔の家事の一つも碌にできなかったころに比べて、家事スキルは格段に上がったと自負している。無論、舞弥と桜の二人には勝てる気が微塵もしないのだが。ともあれ、たかが三日程度なら問題にもならない。

何の用事だと無粋な問いかけをするでもなく、申し訳なさそうにする舞弥に大丈夫だからと手を振り、自身も学校へ向かう為に家を後にする。

時刻はまだ早く、朝練の無い一般の生徒が登校するにはもう少し後。人ごみも少なく、かと言って人通りがないわけでもない通学路を、一人悠々と歩き出した。

事は第四次聖杯戦争が終了して7年が過ぎた頃、今より少し前の話。

一人の老人が冬木の外れにある廃墟を歩いていた。

齢は八十、は軽く超えているだろうか。杖を突きながら進む姿は酷く緩慢としたものだが、その足運びに危なげというものは無縁であった。

住宅街から外れている事もあり、人の姿は他に影もない。冒険心から子供が紛れ込む事はあるだろうが、早朝のまだ薄暗いこの時間、それも季節がら朝霧も出ているこんな時に物見遊山に訪れる場所ではない。

であれば、つまりこの老人は明確な目的をもってここに訪れたとい

う事になる。

幾らか歩いたか。老人が立ち止まった場所には変わらず瓦礫の山が鎮座しているのみであったが、彼は瓦礫の一部を杖で指し、軽く横へ一振りすると、ひとりでに瓦礫の山が崩れる。それもただ崩壊するのではなく、まるで翁が指示したように、大きな瓦礫は真横へ滑るようにして退いた。

「——おお、おお。はやりあつたか」

そしてその隙間を覗きこみ、目的のものが彼の予想通りそこにあつたのか皺の寄つた顔を喜色に歪め、細長い物体を瓦礫の間から浮かび上がらせた。

土に汚れているためか、土気色に変色していたそれはしかし、老人がその枯れ木の様な腕で手に持った布で一擦りすると、埃の下から艶のある肌を輝かせた。

その状態に満足がいったのか、彼はカンラカラカラと笑いあげ、懐から取り出したもう一枚の大きな布で丁寧に包んだ。

「いや、重畳重畳。期待はさしてしておらなんだが。彼奴め、出来の悪いなりに中々引きがよいと見える」

布に包んだそれを撫でさすり、それを羽織の隙間から内へさしていくと、不思議な事に、老人の身体と同程度の長さを誇つたソレが影もなく袖の向こうへ消えていく。姿も目的も不気味なら、この老人がただの人間ではない事の証明だろうか。細められていた目は周囲の霧も相まって宵に潜む獣の瞳のように妖しい輝きを放っている。枯れ木の、それこそ生気の感じられない四肢と合わさって、見る者に幽鬼さながらの負の印象を植え付ける、そんな化物。

「おお、口惜しかろう憎かろう悔しかろう。おおとも、お前の無念、此度の戦で存分に振るうといい」

まるでこの場に老人以外の誰かがいるかのように、杖を突きながらカラカラと笑いながら廃墟を後にする。

聖杯戦争。

本来五十年周期に始まるソレは、第四次に『聖杯降誕』間際に器が破壊されるという珍事により瓦解した。

そして地下より胎動を始めた聖杯は、僅か数年で次回の戦争の幕開けを促し始める。

後に起こる第五次聖杯戦争。その三年前、渦中を知る者達の思惑は加速していく。

つかの間の平和。

大きく蹂躪された傷跡の癒えぬまま、冬木の地で新たな戦火の火種が産声を上げていた。

家より出て学校へ向かう。

ここ、冬木市には旧家、昔から中心街であった「深山町」と、新たに開発が進み、うって変りビル群が立ち並んでいる「新都」とがある。観光招致、利便性が上がった為に、この街は中心に流れている未遠川を境に西と東で趣きががらりと変わる。といっても、この手の話は地方都市を見ればいくらでもある話だろう。

かくいう自分の家は深山町の、比較的外れの方に位置している。利便性を考えるなら少々かけるのだろうか、自分にはこののどかな風景の方が好みで、日のめぐりと共に忙しく変わっていく街よりこちらの方が性に合っている。

なにより、自分が通う学校、「穂群原学園」は見山町に位置するのでそこまで不便を感じた事はない。流石に大学に進学するか、就職してからは解らないが。

「失礼しました」

職員室から出る際に退室の旨を告げ、扉を閉める。朝から弓道場と職員室に弁当配達という労働を終えた頃には、登校しだした生徒の姿がチラホラと。

このまま教室に向かえばいくらゆっくりしていたとしても、一息つくくらいの時間は取れる按排。なので「駆け足厳禁」という廊下に張り出された規則に従い、自分はゆっくりと階段を上っていく。

既に教室に入っている生徒の声が廊下まで響いている。喧騒、というには静かであり、静寂というにはお世辞にも言えない喧しき。学生時代独特というのだろうか、社会人になつたらこの煩さとも無縁なのだろうなど無為な事を考えつつ、到着した教室の扉を開けようと手を伸ばすと――

「ム、そこにいるのは衛宮か」

横から掛けられた声に振り替えれば、そこにいたのはクラスメイト

である柳洞 一成の姿があつた。

朝の比較的早い時間に登校している姿を見て、結構結構と一人頷いている生徒。それも生徒会長という役職についている事を思えば納得というもので、その役職に違わず、出会った頃から真面目が服を着て歩いているような男だ。

「おお一成。流石生徒会長、今日は遅いのな。あ、お勤めご苦労様？」  
茶化すなと眉間に皺を寄せて一言小言をもらった。が、一成はこの程度で本当に腹を立てる程器量の狭い男ではない。口調や仕草、癖とでも表現できるのだろうか、代々「柳洞寺」という寺の住職を務めている家の次男である為か、少々固いところは確かにある。だが、融通が利かないという訳ではないし、筋の通った事ならこれで鷹揚さも持っている。まあ、勘違いされやすい性質なのは認めよう。

実際、一成は友人以外にはかなり口調も硬い。事務的とでもいえばいいのか、そういう所も勘違いされる要因なのかもしれない。ともあれ、互いに知らぬ仲ではないので雑談を交えつつそのまま教室に入る。

軽く見渡せばすでに数人の生徒がやれ昨日のドラマがどうだ、昨日の何々の試合が——などと青春らしい会話をしている。自分と一成の姿が入ったためか一瞬視線が集まるが、軽くいつものように挨拶で流しながら席に着く。

別段コミュニケーションに難があるという訳ではないが、積極的に会話の輪に入る必要も感じないという話。勿論話を振られれば応えるし聞く、冗談も言おう。だが今日はイロイロと一日のスケジュールが濃い日だ。できれば予定まで平穩無事に過ごしたいというのが自分の希望で、常日頃から切に願っている事だ。

ごく有り触れた願いだと思うが、コレでいて実践するのはなかなか難しい。というのも。

「ム、間桐の奴め。また無断欠席する腹積もりかつ」

カバンを下ろし、席について人心地、と思いきや。右後方よりピリピリとした空気が伝播してくるのだ。

またかと思つて視線を向けると、自身の後ろの席、件の悪友の席を

敵のように睨みつけている一成の姿があった。

非常に遠慮したいのだが、チラリと視線を前に戻して時計を確認すると、時刻はホームルームが始まる10分前。ならば遅刻も何もまだ来ないだけだろうと思うかもしれないが、コイツは遅刻するか早く来るかが両極端な人間であり、小学生から知っている腐れ縁だ。

よくよくサボりの常習犯であるのに進級は必ずする。成績は悪いわけではなく、腐れ縁の同級生という事から、アイツが落第した事が無いのは証言できるが——不良が頭いいとか世の中間違っている気がする。それがアイツの頭の中がおかしい。というより、アレがもう少し真面なら自分も一成も、妹である桜ももう少し平穏な生活ができる筈だ。

「一成、まだ一限も始まってないんだし、決めつけるのはよした方がいいと思うぞ。ていうより、一日の初めからこんなところで眉間にしわよせてたら持たないだろ」

故に長年の付き合いからお約束の対応がある。

それはある種の諦めなのかもしれないが、実際、刑務所に放り込まれる様な馬鹿はしていないので間違っではない、だろう。さすがに、旧友があまりにも道を踏み外すなら全力で止める所存だ。主に自身の平穩の為だが。

「——ふう、確かにな。彼奴の悪行今に始まった事ではないが、あまり素行に荒が目立つようなら——その時は頼むぞ保護者」

「誰が保護者だ誰が」

やはり、一成の根は中々にイイ性格をしていると思う。

根っからの善人であるため、口から出た言葉がそのままの意味ではないとは思われる。その手の事を目の前にすれば進んで矢面に立つのが柳洞 一成という男だ。なので馬鹿な事を言うなどお約束のように小さく小突——こうとして払われる。一成とこの手のやり取りも長いモノで、一種のコミュニケーションの一つ、所謂じゃれ合いだ。

そうこうしているとホームルームを知らせるチャイムがスピーカーより流れ、廊下に響いていた喧騒が徐々におさまっていく。自分も一成もそれに倣うように居住まいを気持ち正す。が、不思議とこの



クラスの喧騒は周囲の収束とは無縁だった。いや、正確には不思議でもなんでもない。

なぜなら、

「……はあ、またかよ」

「そう言つてやるな衛宮。藤村先生も何かとご多忙なのだろう」

フオローでもなく、本当にそう思っているのだから人がいい、一言ですませてもいいのだろうかコレは。

などと現実逃避していると、教室の扉が壊れるのではないかという程の音と衝撃を響かせて開け放たれ、その向こうから「藤村<sup>しり</sup>、大河<sup>あひ</sup>」が飛び込んできた。それはもう見事に、比喻でなく本当に飛び込んできたのだ。

そして――

「おはよう諸く――ガハア!?!」

教壇の段差に足をとられて側頭部を豪快に、教卓へとヘッドバットをかましてくれていた。

激突というにふさわしい騒音を響かせているが、クラスメイトに動揺が走るようなことはない。なぜなら、大河が「騒がしい」、「忙しい」のは今に始まった事ではないのだから。

本当に、知り合いを止めたいと思つたのはこれで何回目だろうか。

倒れたまま起き上がらない我がクラスの「担任」に心配しだす女子や、面白がつてからかおうとする男子その他と中々の順応具合であり、昨今の学生は本当に逞しい。いや、自分も積極的には関わりたくない派の人間だ。

そしてそろそろ誰も突込みが無い事に耐えかねてきたのか、大河の身体が震えだしている。大方リアクションにでるタイミングを逸して出るに出れないという所だろうが――このままだとホームルームが進むどころかいつものドタバタで有耶無耶になるのは目見えていた。

なので、

「日直、は俺か――起立!」

「無視はちよつとないんじゃないかな!?!」

勢いよく起き上がった異議申し立てる虎（大河）をさらに無視し、礼、着席を促す。依然として抗議の声と視線が突き刺さるが、一応あれで彼女も社会人であり、教職者である。恨みがましい目つきでしぶしぶと連絡事項を告げる大河の声で、本日の学生生活が幕を開けた。

一日の授業をそつなく終える。

文武両道と、生徒会長然とした一成程ではないが、勉学に不便した事はいない。運動に関しても音痴という程ではない。が、突出しているという訳でもなく、平均より上を低空飛行しているというのが自分の成績だ。

生徒会があると職務に誠実な一成はホームルーム終了と共に生徒会室へ。悪友である間桐の問題児は結局学校に姿を現す事無く、今日は例の如く無断欠席だ。いつかその内出席日数が足らなくなればいいのに、など思いつつも、そんな蹟くような事はないのだろうと達観にも似た変わった信頼、というより確信があった。

そして、そんな自分はどういうと、

「ん？ メール……桜か」

荷物をカバンに詰め直していると、後輩から携帯へと連絡が入っていた。基本的に校内で携帯電話の使用は厳禁だが、それを律儀に守ろうとするのは一成くらいか、それと似た気質の人間だろう。進んで弄り回すような性分ではないが、便利な事は間違いなく、今は放課後と気にせず着信表示が点灯している二つ折りの携帯を開き、件の中身を確認する。

それによると、どうやら弓道部の顧問である大河が、急な会議で本日の活動が中止になったそうだ。急という単語に引つ掛かり、何かあったかと思えば、その会議の内容とはホームルームで大河が注意を促していた怪事件の事だろう。

最近、冬木の街で原因不明の失踪事件が相次いで発生している。が、連続して発生している割に生徒間で危機感が薄いのはその内容の所為だ。

確かに人は失踪するが、行方が分からなくなった人間は必ず3日で

フラつと姿を現す。

三日程度なら無断外泊、家出など何でもない事のように思えるかもしれない。事実、事件発生当初の警察、世間の認識がまさにそれだった。だが、事件が重なるにつれ、失踪する人間の年齢に大人、それも青年中年を問わず幾人の人間が行方をくramsすとすれば、いくら無事に戻ってくると言えど首を傾げるだろう。加えて、失踪した人間はその間の記憶を例外なく無くしている。

身体に不調をうったえる者もない。

金銭や所有物を要求されたり紛失した訳でもない。

ただ一つだけ、性別年齢を問わず姿をくramsすこの怪事件は、今ではこの街で知らない人がいない程巷を騒がせていた。

そこでようやくこの学校も何か対策を取らねばと教師達に召集をかけた、と。恐らくそんな内容だろうとあたりを付ける。

実際、桜が所属している弓道部だけでなく、他の部活動も軒並み活動中止になっているらしい。については部活で帰りが遅くなることもなくなったので、このまま夕食の買い物に行かないかという誘いのメールだった。

「まあ、その方が効率いいか」

桜は料理上手だけでなく、商店街の店主に顔が利くほど買い物上手でもある。自分一人で買い出しするよりかは何かと助かるのだ。加えて、先程連絡されたばかりの怪事件の話もある。まだ昼間ではあるが、一人帰らせるというのは先輩としてどうかと思ってしまう事案だ。なので脳内会議で結論の決まっている議案を強行採決し、簡単に返事を桜に返した後、俺は待ち合わせの為に目的地である商店街の方へと向かった。

穂群原学園より家に向かう途中、昔ながらの態を残す商店街、  
「マウント深山」の一角で、後輩である間桐 桜が店主の男がすすめる商品とにらめっこをしていた。

「どうだいお嬢ちゃん。これなんか立派だろう」

提示された野菜を前に、桜の目は真剣そのもので、普段は儂い、もしくはお淑やかな印象が強いだけに別人のようにも映る。だが、たかが一食と侮るなかれ。今朝の襲撃のように、我が家の食卓には「虎」が奇襲さながらに食事をさらいに来る。それはもう人一人の許容を軽く超える勢いで、ある意味感心するが、もちろん痛手を喰うのは我が家の家計事情である。

「ん……確かに、この艶といい太さは中々——」

とはいえ、大河の家には昔からお世話になっているので全力で拒むという程ではない。アレでいて小さい頃から面倒を見てくれた事もあり、舞弥と同じくある意味で頭の上がらない女性ではある。ただ、口にすると目に見えて調子に乗ってしまうので口が裂けても言う予定はない。

なのでせめてもと桜と二人、食材を買い足す時は出来るだけ安く、調理には妥協せず美味しくをモットーに取り組んできた。そしてだからこそ、

「馴染みのよしみだ！ 端数切捨て大盤振る舞い、これとコレをつけて1000円でどうだっ」

自分からしたら十分安い金額だが、こと買い物に関しては主婦顔負けの強かさを見せる桜にとっては、まだ財布の紐を緩める段階ではなかったようだ。

「ん……ごめんなさい。もう一声っ」

すまなそうに両の手を合掌し、はにかんで小首を傾げる桜。一瞬ぐらりと後退した店主の姿を見るに心が揺らいたのだろう。それでも一歩踏み止まった辺り中々商魂たくましい御仁であるようだ。

そして再開される交渉。

今日のレパートリーは桜に任せているため、買い物物の選定は彼女の仕事だ。自分は無難に荷物運び。そもそも料理の腕を大きく離されているのであまり口を出せないというのもあるが——どうやらもうしばらくかかりそうだと、手に持った買い物用の手提げを持ち直す。安く済む事に越した事はないし、夕食にはまだ時間があるのでそのまま彼女と店主の戦いを眺めていた。

すると――

「やつと会えたね “お兄ちゃん”」

何気ない単語。

ともすれば己を指してすらいないだろう声。しかし、後ろ髪を掴まれたかのように引つかかったソレへ、反射で顔を向けた。

「え？」

あの “災害” の生き残りである自分に親類などいない。そもそも救出された当時にはばらく名乗りすらなかったのだからこそ、衛宮家へと養子として迎えられたのだから。

だが、そんな当たり前の結論を前に、体はその声に誘われる様に首に続いて振り返る。

振り返った先には――いつもの人ごみ。変わらない商店街の一風景で、一瞬視界に移った銀色のナニかは影も形もなかった。

本当に一瞬、自分の腰より少し高いくらいに、銀髪の少女の影を見た気がした。そもそも先程の声がその少女の物であるという確証はどこにもないが、それでも、この時何故か、その少女を見逃してはならないというある種の強迫観念に似たものを感じたのだ。

だから今の状況を忘れたまま、体が声のした方へと無意識に足が踏み出そうとして、

「先輩、見てください。今日の戦果です！」

誇らしげに、戦利品の詰まった買い物袋とレシートを提示してくれた桜によって意識が戻った。

「あの、どうかしたんですか？」

「いや、なんでもないよ。俺の勘違い、というか聞き違いだったと思うから気にしないでくれ」

呆けていたままの自分を心配するように覗き込んでくる桜に、失敗したと思いつつも即座に笑顔で返す。ただの空耳だと言うこちらに、腑に落ちないという態度で頭上にクエスチョンマークでも浮かびそうな顔をしている桜に微笑してしまう。時たま見せるその小動物のような仕草はとても微笑ましく、ついからかい過ぎてしまいそうになるのが難ではある。

対する彼女も自身が笑われた事に頬を赤くして小さく抗議してくる。そんな桜をやりわりとなだめ、改めて戦果らしい食材達を確認しつつ話題を逸らし、我が家へと向かう。

その途中、桜は先程の店主との言葉のラリーや、部活でのこと、最近の悪友が起こした事件等、色々な事を話してくれていた。だがその時自分の思考の半分を占めていたのは、先程聞こえた謎の声の主についてであり、帰宅して取りあえずと思考を放棄した事を後悔することになるとは終ぞ思わなかった。

帰宅後、私服に着替えた自分と、朝と同じ学生服に桃色のエプロンをかけた桜と共にキッチンで夕食の準備に取り掛かった。

料理に臨む桜の表情は真剣でありながら、どこか楽しそうに笑みが絶えない。料理のできる女性は魅力的というのは少々古典的な考え方なのかもしれない。だが、いざこざして目の前になると悪いモノではない、というよりかなりストライクゾーンに入っている気がした。「よし、いい感じですよー」

と、さりげなく脇見をしていると、桜が余熱で仕上げていたフライパンの中身を手際よく小皿に盛りつけていく。今夜は大河も遅くなるという事だったので大皿を使用する程品を用意しなくてもいい。なら、もう少し手を抜いてもいいと思うのだが、桜的にはそのような怠惰はありえないと自分の提案は両断されてしまった。

「桜ーこっちもやきあがったぞ」

野菜を盛り付けるかたわら、傍のオーブンが告げるタイマーの音で作業を中断して中身を取り出す。オーブンを開けた際、空腹へ直接働きかけるような匂いにつまみ食いという選択肢が脳裏を掠めたが、せっかく桜が用意してくれた夕飯だとせっせと食卓へ運び、プレートの上にそれぞれ並べていく。

二、三回も往復すれば、彩り豊かな食卓の完成である。

二人での食事の為、対面になる形で互いに手を合わせた。

「いただきます」

挨拶は同時に、だが最初の一口を自分が食べるまで窺うようにこちらをジッと見ている桜の視線は何故だかこちらまで緊張してしまう。まあといっても、彼女の料理に不手際があるうはずもなく、

「うん、やっぱり桜の料理はおいしいな」

簡単な感想であるのに、安堵した後満足げな笑みを浮かべてようやく箸を動かす後輩の姿に和みつつ、自分も二品目に箸を伸ばした。

「え？ 帰りですか？」

「ああ、もうこんな時間だしな、送っていくよ」

夕食の後、ごく自然に片付けを始めようとする桜を止め、時計を指さして提案する。予想していた通り、桜はそこまでされると悪いと断ろうとしてきたが、今朝のホームルームで話題に出た事件を盾に封じ込める。最悪、先輩としての体裁を守らせてくれなど、交渉のカードは用意していたが、悩む仕草をすること数分、小さく了承の返事もらえた。

流石に片づけなままというのもだらしがない、と申し出た桜の言葉に、シンクへ大きめの鍋に水を溜めて、洗い物を全て投下する。仕上げに洗剤を少々——所謂漬け洗いであり、雑多で無駄の多い手段に桜は一言言いたそうだったが、背中を押して無理矢理玄関へ。自分も財布と懐のお守りを確認し、玄関先で待つてくれている桜と合流して外へ出る。

冬に差し掛かった冬木はようやく肌寒くなってきていた。地域柄、冬といってもほかの地方と比べても暖かいらしいが、生まれも育ちも冬木の自分としては十二分に寒い。そろそろ押し入れにしまつてあるコートを引っ張り出すかどうか思案していると、いつも通学時にさしかかる交差点にぶつかると。衛宮邸から学園や新都へ向かうのにしても目印となる分岐点であり、直進すれば桜の家がある坂の方へと続いている。

「そういえばアイツは元気なのか？ また今日も学校に来なかったけど」

道すがら今日の料理等を話している中、話題が学園の事にシフトしたところでふと思ひ出した。『アイツ』とは不明慮極まりない呼称だが、桜と二人きりの時で指す対象とは絞られる。

「え、あ。兄さんは夜には帰ってくるんですけど……最近は何かおもしろいことを見つけたのか、更に帰りが遅くなることが多くて」

つまり、俺の悪友で、桜の馬鹿兄である。

昔からのめり込むと周りを、というより自身に及ぶデメリットすら



省みない性質ではあったが、どうもここ最近その傾向が強い気がしてならない。個人的にはアイツがどうなろうと知った事ではないが、可愛い後輩に心配をかけさせるといいうのも考え物だ。

「やっぱりか。アイツも昔から変わらなからな……よし、あまり過ぎるようなら俺からも言っておくよ」

そんな、と両手を大きく胸の前で力の限り振って否定の意を示してくるが、確かにここ最近学校で見ない事も多かったので、個人的に、少しだけ心配だったというのもある。桜には普段からお世話になってるので、偶には先輩らしいことでもしないと面目が立たない。所詮男の小さなプライドなのかもしれないが。

しばらく歩いたところ、和風な趣きが強かった街並みが洋風のそれに代わった坂道で、桜がこちらを窺い断りを入れてきた。

「あ、先輩ここまでで大丈夫です」

道の先を見れば彼女の家まで100メートルもない。交差点からここまで徐々に勾配が急になってきていたが、悪友の武勇伝を語り合いうのに夢中で実際はかなり歩いてきたようだ。本当に話題の種類には事欠かないやつである。

「ん。まあここまでなら大丈夫だろ」

周囲を確認しても不審者の影はなく、もしもの事態にならなくて内心ほっと一息をつく。後輩の手前、なんでもない風を装ってはいるが、自分だって怖いものはあるし、嫌なものだってある。

「ハイ！ 先輩、今日は——」

律儀に礼を言おうとする桜に大したことはないと身振り返そうとして、その背後より見慣れない老人が暗闇から現れた。

一瞬何処から現れたと、まるで気配の無い出現に息を飲んだが、皺の深い輪郭の奥、暗闇の所為か一際黒く見える目を細め、老人はおそらく笑みを浮かべてこちらに話しかけてきた。

「おお、桜今帰ったか」

心配しておったぞと坂の上から現れたのは、一目見て齢八十は超えているだろう老人だった。

「お、おじい様っ」

いつも聞く桜の声とはまた違った焦りの色を感じたが、両者の呼称通り、どうやらこの老人は間桐の家のものらしい。桜の家は中々に大きな家であり、〃坂の上の間桐〃と言えばこのあたりでは色々な意味で有名だ。そう思うと、この御仁も昔はその方面で腕利きの人間だったのかもしれないが、杖を突いて背も曲がったその姿からは少し想像できなかった。加え、その見た目と今の時間帯と相まって、失礼とは思いつつも忌諱してしまったこともあり、少々負い目を感じて頭を下げつつ挨拶をした。

「ふむ——おおっ、そうかそうか。お主が孫たちがよく口になっている「衛宮」か。これはこれは、日ごろ孫たちが世話になって」

自分が告げた名前に利き覚えがあるぞと、かんらんらと笑いながら桜がどういう風に話しているのだとかを言って聞かせてくれる。初めの印象が強烈過ぎて気後れしてしまったが、これはこれで孫思いのいい祖父なのかもしれない。そう思う程に、彼は桜たちの事をよく聞かせてくれた。

そして幾らか話した頃、横で畏縮煤様になっていた桜を小さく杖で小突く。

「ほれ、何をポケットしてる。お前から礼を言わんか」

「あ、今日は、ありがとうございます……」

普段おとなしい桜も、祖父の前では殊更気が小さくなってしまふのか、単に家人の前では大人しいだけなのか小さく礼を告げる桜に、今度こそこの程度は何でもないと手を振って笑顔で答える。

「うむうむ。普段ならいつもの礼に茶の一つでも出してもてなしたい所だが、生憎とこの時間ではなあ」

目を改めてもう一度来てくれと誘ってくれる老人に社交辞令程度に言葉を返し、腕時計を確認する。確かにもう時刻は8時を過ぎる。逆を言えばこんな時間までまだ学生の孫を連れていた事に一言小言をもらってもおかしくはない。こちらこそと深く頭を下げ、桜にも朝の件も含めて改めて礼をする。

「それじゃ、また明日学園で」

踵を返して手を振るこちらに、桜は頭を下げたまま、彼女の祖父と二人に見送られて帰路に着いた。

桜を送り届けてから家に着いたころには既に9時を回っていた。

大河からの連絡もない為、板戸を引出し縁側周りと簡単に戸締りをすませる。一通り確認した後は、出かける前に漬けておいた洗い物との格闘だ。もともと洗剤を浸したものに漬けていた為に油等の汚れは落ちていない。とはいえ、自分一人の物であるなら兎も角、大河に桜、舞弥も入れて他の人間も扱うものであり、もう一度洗剤を付けたスポンジで一つ一つ丁寧に洗っていく。

二人分の食器である為、時間的に然程手間はかからない。明日の朝食用に研いだ米を電子ジャーに入れてタイマーを合わせる。と、ここまでくれば普通に就寝準備に入るだけだが、生憎と自分にはこなさなくてはならない日課がまだ残っていた。

居間の電気を消し、一か所だけ空けておいた縁側からサンダルを履いて、庭の一角に作られた土蔵に入る。

この家は土堀から木製に瓦屋根の門。硝子板のはめ込まれた引き戸に板張りの廊下、暖簾や襖で仕切られた居間など、純和風の造りとなっている。親父が伝手で大河の実家、その親である藤村 雷画から買い取った物で、当時は廃墟同然に荒れていたらしい。

養子である自分がこの家に来たころはまだ見れる外観であったが、罎の入った壁や傷んだ畳が見られ、大改修に参加したのはいい記憶だ。

それはさておき、そんな我が家には家屋以外に何故か道場と、昔から土蔵がある。切嗣の職業というのによく知らないが、その割にこんな家をかまえるあたり、それなりに収益があるらしい。そして家主のいない今、この土蔵は自分の鍛練場となっている。

だが、鍛練をするなら折角道場という似合いの場所がある。なのになぜこのように閉鎖的で灯りに乏しい場所を鍛練場とするのか、当然それには理由がある。

「ふう——じゃ、始めますか」

土蔵の中で敷いたマットの上に座り、土蔵の床、自分の前に液体を入れたフラスコ、アルコールランプに三脚台をセットする。小学校で行なう理科の実験でおなじみの品だ。そこに摩訶不思議な特別な物、ということはない。

そして鍛練といった通り、これは己を練磨する為のモノであり、単なる実験を行うのではない。

取り出したマッチでアルコールランプに火をつける。フラスコが熱せられ、中の液体の温度が上がっていき、フラスコ内部が気体化した蒸気で徐々に曇り出す。

そうして、鍛練の準備が整った。

息を整え、瞳を閉じ、自己の内へと沈んでいくイメージ。

小さい頃から繰り返し返してきたことだとはいえ、この時ばかりは緊張する。

なぜなら、「魔術」とは死と隣り合わせなのだから。

時よ 止まれ

『arrest hour』

己の親にして師である切嗣から教わった魔術。幼いながらに憧れて付けた自分だけの始動キー。「魔術師」が「魔術」を行使する際、己の中に眠っている「魔術回路」を起動する為の家電製品で言うオンオフの為のスイッチだ。

「魔術」とは一般にイメージされる様な「魔法」とは違う。

魔術師が魔術を行使する為には魔力が必要不可欠であり、その魔力を生成するのが魔術回路であり、それは起動させる術式に魔力を通すパイプだ。そして、魔術回路とは潜在的に人に備わっている。つまりは普通に生活する上では必要ないとされるパーツ。そもそも魔力を生成するのに回路が消費するのが生命力だというのだから、不要、というのはいうまでもない。

そして同時に、生まれながらに備わっている回路の本数が決まっており、通常はその本数を増やす事は出来ない、困難とされている。

故にそれが魔術は才能がモノをいうと言われる所以でもある。そ

の為、魔術師達は代を重ねるごとに回路を増やそうと躍起になる。だからこそ、魔術師の界限では血管が重要視されるのだ。

言い換えれば、切嗣の実際の息子でもない自分は血管としては下の下であるの言うまでもなく、才能といっても中の下程。回路を増やせないという事は自分だけで至れる魔術というのは程度が知れている。ならなぜそんな自分が魔道を志したのか。そういわれれば、過去に見た光景。魔術を教えてくださいと言いつ出した自分に、切嗣が困り顔で一度だけ見せてくれた魔術が原因だと思う。その可能性に、どうしようもなく心惹かれたからだ。

厳密に言えば憧れても方向性が違った。自分の願いは時を引き延ばして遅らせたり加速するだけでは届かない。その願いを告げた時、それが出来たら魔法使いになれるよなど、当時は笑われたものだ。

しかし、自分は当時と変わらず、今も本気だった。だからこそ、それほど興味の持てなかった魔術を続けられている。もし、衛宮 切嗣と出会っていないけば、あの時彼の魔術を見せてもらっていないければ、自身と魔道は交わることはなかったかもしれない。

「構成分子——把握終了」

ともあれ、身体の内にある「魔術回路」の起動を確認した俺はゆっくりと身体に魔力を流し、目の前にある熱せられたフラスコに注力する。正確にはその中身、無色透明の「水」にだ。

水は熱せば気体に、冷やせば固体になる三つの姿を持つ流体。この鍛錬では常態である流体を熱し続けた状態から、その存在を「押し止め」、気体になろうとする分子の結合が離れるのを阻害しようとする試みだ。

「原子振動——抑制」

理屈で言えば小学生の理科程度のレベルでも解る範囲。だが、何事も言うは易し。理屈では理解していても、自然の変化、条理を捻じ曲げるといのは決して簡単ではない。今行っている事象は規模としては小さいものだが、魔術師として半端ものである自分には難題である。これが師である切嗣や、知り合いの魔術師の娘なら難なくできるのかもしれない。しかも、それで同い年というのだから世の中は不平

等極まりないだろう。

などと、いるかもわからない神などに恨み言を連ねていた為に罰が下ったのか、単に集中が乱れたためなのか、

「——っ」

突如右腕に走った痛みを流していた魔力を急停止させる。無論、一度流していた魔力の流れをせき止めれば回路に過負荷がかかるので、努めてゆつくりと、ではあったが。

抑制していた魔術を解いてしまったため、押し止めていたピーカーの中身である水は留めていたエネルギーに一気にさらされ、もの見事に沸騰してしまった。

「くっそ、何なんだよいった、い？」

失敗にイラつくよりも、それが外的要因によって引き起こされた事がより憤りを蓄積してしまう。そうしてその原因とやらを確認すれば、そこには赤い痣、三画の模様が浮かび上がっていた。

腕に見た痣は何かをかたどっている様も見え、一見するとタトウウーの様に見えなくもない。光に晒してみるとその形が明確に何かの形を持つている事、そして魔術的な魔力を感じる事に困惑した。

切嗣が持っていた魔術の本にこんな印は見た事ないし、初め以外に痛みや何か呪術的な重さを感じない事から、呪いの類ではないだろうが。

だがこいつの所為でケチがついたのは事実。また時刻も遅い事、体に害がなさそうな事を簡単に調べたこともあつて今日の鍛練はここまでと片付けを始める事にする。と、痣の影響が流れていた血を拭きとり、棚の上に置いていた救急箱を引っ張り出して包帯を取出し、適当に腕に巻いて止血をしていると——深夜に差し掛かる前という夜遅くに、母屋に連動させていた機器からチャイムの音が鳴り響いた。

「あーくそ、こんな時間につ」

加えて、余程せっかちな客なのか、インターホンを連打してくる始末。

そういえばまだ門は閉めてなかったかと後悔の念が顔を出す。

「ああ！ ハイハイ今行きますっつて」

「広げていた道具を簡単に一纏めにし、巻きかけていた包帯を乱雑に  
とめて不届きな客の顔を拝んでやると気持ち足音も荒く玄関へと向  
かった。」

「ハイ、どちらさまですか」

乱暴気味に、ぶっきらぼうで不機嫌な態を隠す事無く扉を開け放  
ち、件の訪問者の顔を拝もうと木戸を開けると——そこには丘があっ  
た。

「夜分にすみません。こちら、衛宮 切嗣さんの自宅ですか？」

正確には女性特有の膨らみだ。つまり当然不躰な訪問者は不審な  
男、という予想に外れて、長身でスーツに身を包んだ妙齡の女性だっ  
た。

「あ、切——親父は今留守にしていますけど」

艶のある黒の長髪を後ろに一つに編み上げ、その先を大きめの髪留  
めでとめている。黒のフォーマルスーツをゆったりと着こなし、その  
上に着た紅いコートの前を止めず下にきている。コートもスーツも  
前を止めていない為に覗くブラウスまで大きく胸元を見せていて、  
少々目のやり場に困る格好だ。しかし、冬木が比較的暖かな気候だと  
はいえ今は冬だ。コートの意味があるのかという居出立ちに疑問を  
持ちつつ、やはり不審者かと警戒心を保ったまま応対する為に気を引  
き締める。

「そうですか……あ、いつごろ帰られるか分かりますか？」

なので彼女の質問に一言わからないと突き放すように答え、何の用  
でここに来たのかとこれまた無遠慮に聞き返す。そもそも知人だと  
してもこんな時間に訪れるのは少々常識外れだろう。言い換えれば  
いい迷惑だ。実際、訪問されている側の自分が言うのだから間違いな  
い。

「ああ、私彼とは昔の仕事仲間だったんですけど、この度こちらに飛ば  
されました、夜遅くになってしまったんですけど挨拶を——」

なら電話なりなんなり前もって確認すればいいだろうと思うが、目

の前の彼女にはそんな選択肢もなかったらしい。傍迷惑だと思いつつも、努めて笑みを絶やさず話しかけてくるトークの弾幕に怯まないようにそつけない返事で続くだろう言葉を躲し、さっさとお帰り願おうとすると、

「あれ、その手怪我されたんですか？」

先程変な痣が浮かんだ右腕を見て無遠慮にも手をつかまれた。

いきなりの事に無理矢理引きはがす。突発的な事でかなり力を入れてしまった為、女性相手に何をとこちらは委縮しかけたが、対する女は災難でしたねというなんでもない風に笑って返す。

少し拍子抜けしたが、調子を狂わされたのも事実。深夜突然の訪問に加えての事態に、内心の苛立ちは既に隠せないレベルだ。だが、ここで顔に出したとしても、あまり態度に出すのはみつともないと思いとどまり、コレで終わりだと断りを入れて引き戸を閉めようと木戸に手を掛ける。

「ほら、もういいだろ。親父は今日明日じゃ帰ってこないし、言伝くらいはしておくから——」

「あー実はそうもいかなかったんだよねー」

途端に崩れて帰ってきた口調に疑問に思うよりも早く、身体に走った衝撃と共に浮遊感を味わい、刹那、背中に激痛が走った。

「があ——はっ」

あまりの痛みに一瞬呼吸を忘れ、痛みをうったえる腹を抑え込むように丸まる。嘔吐こうにも口からは血が混じった胃液と吐しゃ物、そこにきて自分がようやく玄関から廊下の突き切りまで、殴り飛ばされた”のだと理解した。

「いやーごめんね少年。疑わしきは打ち首っていうじゃない？ 悪いんだけど、君けっこう灰色なんだよね」

いつの間にか女性の衣装はスーツ姿から今ではあまり見ないような和服に身を包んでいる。肩を露出し、その両腕に深紅の手甲をはめて土足で玄関を上がる姿は、先程の攻撃を踏まえ、こちらを殺す対象としてみていた。

「だから悪いけど、大人しく死んでくれるかな」



法治国家であるこの国で、斬った張ったの殺し合いなど馬鹿げている。いつかクラスメイトの一人がそんなものはファンタジーにすぎないと小馬鹿にしていたのをふと思い出した。

だが、痛む体は無理やり起こしながら目のあたりにしたものは、生涯で二度目となるそのファンタジー。絶体絶命という命を懸けた綱渡りだった。

身体がバラバラになりそうとはよく聞く表現だが、実際に目の当たりにすると、その激痛は遅れてやってくるのだと、まるで他人事のようを感じていた。なぜなら、こちらに一步一步歩いてくる女の姿から古典的な武装、足運び、どれも日常とは無縁である筈の殺意に満ち溢れていたからだ。

「——っ、あぐ」

殺される。

脳裏に浮かんだ本能的恐怖と、死んでたまるかという突然の理不尽に対する怒りが思考を埋め尽くし、知らず身体は逃走を選んでいった。

だがそれも当然の話。ただでさえ得体の知れない襲撃者、それも一人をほとんど無拍子で数メートルも吹き飛ばす膂力は、人間離れの言葉で片付けるには少々雑にすぎる。本当に咄嗟に、直前に魔術回路を回していたままにしていたことが幸いした。もし訪問者に応対する為、律儀にも回路をオフにしていたとしたら、今頃この体は吹き飛ばされるどころか内臓ごと吹き飛んでいる。

「ありや、あー……やっぱり黒っぽいか。衛宮の息子は養子、つて聞いてたけど。今ので無事つてことは、少なくとも無関係じゃないよね」  
ゆつくりとこちらに近づいてきた女は、こちらの負傷カ所、腹部を見て得心が言ったのかどこか残念そうな顔をしていた。腹部といつても、正確には来ているTシャツだ。来客とはいえ、深夜に訪れるような不審人物、加えて最近のニュースから予め“強化”の魔術で簡易の鎧としていたのだが、

「っ——カ、ア」

口が上がってきた血の塊を横に吐き出す。

服は魔術のお陰でズタズタではあるが、辛うじて原形を留めていた。問題は、その鎧を貫通してきた衝撃。痛みを訴える痛覚を無理矢理押しこめ、体内に素早く走らせた“解析”によつて肉体の損傷具合を把握する。すると腹部の筋繊維はもとより、内臓が見事にひしゃげ

ていた。本来それらを保護する役割の肋骨にいたっては、直撃していない筈が下の何本かが砕けている。

恐ろしい事に、たった一撃、それもおそらく大して力を込めていないだろう拳の一撃で、この身体はもう死に体へ変えられていたという衝撃。

「ああ、ああ。いったそう。でもまあ、あんた個人に恨みはないし。衛宮 切嗣について知ってる事を教えてくれるっていうなら、これ以上は可哀相だから痛みを感じる事無く一瞬で楽にしてあげるよ」

つまりは、Yesと答えようがNoと言おうが結果は変わらないという事。

言い方を変えれば、お前は今日ここで死ね。

唐突に訪れた死の宣告はこちらの都合を酌んでくれるわけもなく、目の前に来た女は膝に手を置いて屈み、ただ答えろと無言の笑みで脅迫してくる。

だが、

「ふざけるなよ、誰がお前みたいな得体の知れない怪力女なんかにつ」  
魔術を初めて習った時に覚悟を決めろと言われた事がある。

『魔術ってというのはね、常に死と隣り合わせなんだ』

自分の知らない都合で死ぬことも、予期せぬことで命を落とすのも当たり前。死を受け入れ、呑込み凌駕する事、魔術師が最初に教わる心構えの一つだ。故に悪足掻きにもならないと知っていながら、そんな脅しには屈しないと女を睨み上げ、体内の魔術回路を暴走覚悟でフル稼働させた。

「あつそう」

瞬間、そんなものに興味はないと、交渉決裂を告げる審判の鉄槌が蹴り上げられた。

軋む体、罅を通り越して砕けた骨が内臓に突き刺さる。胃に溜まった血が押し上げられた衝撃に空気とともに吐き出される——が、この体は死に体になろうと、まだ魂は死んでいない。

「——へえ」

間一髪、身体の損傷個所にかけた“停滞”で血の流出と神経からく

る痛みの伝達を止め、体中が悲鳴を上げるのを無視して横に飛んだ。転げるように真横の居間に飛び込んだ姿は無様その物だが、背後で足首から先を壁にめり込ませてこちらを興味深げに振り返った人の姿をした化物を思えば、手段を選んでいる場合でないのは犬でもわかる。

「ボウヤ、なかなかいい勘してるよ。正直、そのくらいの歳の子供を手で掛けるのは気が進まなかったんだけど、ちよつと興味でてきたかな」

今のを避けられるとは毛ほども思っていなかったのだろう。

埋まっていた足先を難なく抜き、その背後で一部が砕け墜ちた壁を気にすることなく、彼女は居間と廊下を仕切る暖簾をくぐって追ってくる。

その姿は端的にいつて舐めている。興味があると言いながら、その目はこちらを取るに足らない存在だと切り捨てたかのように冷めている。いや、その奥にまだ何かできるだろうと試すような、ともすればいまだ値踏みするような目でこちらに無理難題を要求し続けた。

「ほら、ボウヤの健闘に敬意を表して、ッギーびす」だ。一撃、今からあたしはアンタの顔面を力の限り打ちぬくよ」

構えも単調なら、言葉でも示したとおり、それは単なるテレホンパンチだ。だが、最初の一撃、腹部にもらった拳は認識すらできなかった速度。単純であるが故に、高みへと磨き上げられた一撃は難解であり、驚異だ。

「さっきのがまぐれじゃないっていうなら、証明してごらんよ。男の子、だろ!!」

つまり、回避する為に相手の動きを見てから動けたとしてもその時には致命的に出遅れる。相手より早く動けたとしても、早すぎればその動きに合わせられる。

「あつ、なめる、ナアアアア!!!」

その常人には不可避の一撃を、身体機能を加速させることによって無理矢理限界を超える速度で掻い潜る。細胞の加速、原理は身体能力

を“強化”する魔術を応用させた単純なものだが、肉体の制限を無視した行使は当然つげが回ってくる。

筋繊維の幾らかが断線した。

血管の一部が血液の過剰な供給に耐えかねて破裂している。

足首の先があらぬ方向に曲がっている。

それら全てが本来行動に支障をきたす欠損で、もし集中が切れて魔術が解けたとしたら、発狂するのではないかと自分の事であるのに関心が薄い。だが、今ここで無抵抗にやられるかもしれないという未来を容認するより遙かにましだ。

繊維が幾らか断線し、足首の関節がいう事を聞かないのを承知で、無理矢理魔力を通して“固定化”する。

通常のように自由な可動は出来ないが、こけて背を晒すリスクを考えれば安いモノ。痛覚を“停めた”ことでゴムを踏みつけた様な不快感を感じながら、無事な左足を床に付け、力の限り前方に飛ぶ。そしてその勢いのまま、飛んだ先にある板戸を体当たりするようにして吹き飛ばし、縁側の向こうの庭に転がり落ちた。

「っ、ガ——ハッア！ クソが、へばるのには早ええんだよ。いう事を聞きやがれこのポンコツがっ」

だが動けたのはそこまで、転がり落ちた事によって仰向けになってしまい、一度動きを停めた体はいくら魔力を通して魔術を行使しようとびくともしない。

「いやいやいや、寧ろ見ていて痛々しいから。それとも何、もしかして痛いのが好きな性質だったりするわけ？」

そんなわけあるか馬鹿と、力の限り叫び返したかったが、言葉を口にしようとした瞬間横になっていた事で胃から登ってきた血の塊が咽を塞いで盛大にむせた。

振返らなくても背後に死神である女がそこにいる事が気配でわかる。だがそこに至っても体は意思に反して行動を拒絶し、縁側から一息に飛び降りた女がかたわらに着地した。

「実際、よく粘るよねーちよつと感心するよ、ほんと」

すでに敵としても見ていないのか、女は倒れているこちらの下から

見上げる視線に合わせて座り込むようにして覗き込んでくる。敵、ですらないのだろうか、殺すと宣言した相手に対して、まるで眼中にないと言意のまるでない目で見られるというのは、死を覚悟して臨んだこちらに対して侮辱以外の何物でもない。

「ねえ、名前は？ 君なんていうのさ」

だから、首を傾げて聞いてくる女の言葉を理解して、

「——ハ。名前が知りたきや聞き出してみろよ、このデカ乳女」

口に溜まった血を吐き飛ばすようにして女の顔にぶつける。目つぶしに等という思惑はない。そもそも、視界を潰せたとしても、既に体は指一本も動かないのだから続く手など考えてもいない。せめて一矢報いて見せるという、単なる意地でしかない。

「プハっいいね悪くない。この状況で啖呵される男つてのもそうはいないよ。いや実際、今の時代の男連中には辟易してたんだけど」

だが、女はその琴線の何処に触れたのか、怒り散らすどころか高らかに腹を抱えて笑いあげ、目の端に涙を一滴浮かべながら、今度は腰を折ってこちらに顔を近づけてくる。

「中々に男前な君のプライドに免じて——一発で楽にしてあげよう」

「ぐ、オツ」

一瞬で変化した笑顔からの能面のような感情の無い表情。折り曲げていた上半身を起こす勢いそのままに、蹴り上げる足によって、首を起点に体が空中へと打ち上げられる。

既に地面ですら動けなかった身体が、空中などという更に不自由な空間で回避行動など取れるはずもなく、自由落下に従って頭から墜ちていく。

そして女の視線と自分の視線が交わり、拳を引き絞ったその体が、矢を放つ様に必滅の一撃を見舞う。

「じゃあね」

今度こそ避けられない。

二度奇跡的に回避できた一撃も、三度目は幸運から見放される。

意識の断裂を認識して、初めに思ったのはここが死後の世界なのかという達観。

背に感じる固い感触は嫌にリアルで、結局死んでしまったのかという諦めと、夢を叶えられなかったという後悔の念が湧きあがってくる。

だが、あの状態で自分に何が出来たというのだろうか。

確かに、訳も分からず一方的に殺されたというのは納得できない。が、明らかに超常の力を持った存在に、魔術師としても半人前の自分に抗う術など存在しない。

いや——本当にそうだろうか？

自分の深く、根っこの部分で何かが叫んでいる。

自分はこんな結末を知らない。

自分はここで潰えていいわけがない。

そんな未来を、認めるものか。

“自分がこんな所で死ぬわけがない”

そう心に響いた言葉に従い、手近に感じた鋭い何かに手を伸ばしかけた時——

「貴方が、私のマスターですか？」

沈んでいた意識を拾い上げるように、そんな澄んだ声がまるで岸へと引き上げるようにして、覚醒する。

開いた両目が捉えたのは土蔵の天井。自分がいつも鍛練をしている場所。だが、入口より月明りの注ぐその場所で、黒い軍服を身に纏い、その手に白銀の剣を一つ携えていた金髪碧眼の少女は目の前に立っていた。

「サーヴァント、セイバー。召喚に応じ参上しました」

「は、え？」

状況の理解しようとして、整理が追い付かなかった。

まず自分は桜を送り届け、日課である魔術の鍛練中に訪れた訪問者、襲撃者の手により負傷。殴られ飛ばされ、最後の一撃をもって自

分は息絶えたはずだ。そうでなければあの冗談のような物語に説明がつかず、それが夢幻でないのは彼女の背後に無残にも吹き飛ばされた土蔵の入口と、自身の身体の節々が訴える激痛を思えば否定する要素は皆無だ。

そして、いつまでも自分が倒れたまま閉口していた為か、こちらに問うていただろう彼女は周囲を一瞥し、おそらくまだ外にいるだろ襲撃者の方を見やり、表情を険しくした。

「……状況を劣勢と判断。事態の鎮圧を最優先します」

貴方はここにいてくださいと短く告げ、一足で土蔵の外へと飛び出していく彼女、曰くセイバー。

「え、あちよっ」

その速度は目で追える領域を優に超え、こちらが意図せず反射でかげようとした制止の音が届くはずもなく、次の瞬間には外で金属音がぶつかり合う音が此処まで響いてきた。

「——剣を持ったままって銃刀法違反……て、何を言ってるんだ俺は」  
そもそも深夜の不審者に拳で男を吹き飛ばす怪力女に、突然半殺しになっている自分。いつの間にか現れた西洋風の容貌をもつ女性、だがこれも仰々しい剣持ちと、今日はとことん思考が死んでいる。いや、思考を殺しに来ているのではないかという程、自分の中で常識という単語が脆くも崩れ去っている気がした。

ともあれ、

「よし、なんとかっ」

時間をかけて練り上げた魔力を術式へと丁寧に通す。正直歩くのでさえ気を失いかける程の激痛だ。しかし、こんな閉鎖空間に留まっていたところで状況が改善する筈もなく、座して待つのをよしとしないうならば、意識を手放そうとする身体に鞭を打ち、土蔵の入口へと手を掛けた。

すると——

「破アアアア!!」

襲撃者である女と、セイバーと名乗った女が互いの得物をもってぶつかり合い、火花を散らして距離を置いたところだった。



現代のこの国で文字通り鎬を削る様な命のやり取り等、それこそいつか聞いたようにファンタジー極まりない。だが、こうしてその光と熱に触れればいやでも現実を直視せざるおえなくなる。

「……これだけの腕を持ちながら、サーヴァントのいないマスターを積極的に駆り立てて暗殺者（アサシン）の真似事ですか。流派が泣きますよ」

「別に、今更そんな事気にする程潔癖じゃないよ。家柄、隠形は得意だし、第一、駄目だつてルールはどこにもないじゃん。そもそも下地からしてお宅みたいにな。『三騎士』様とは違うんだから、これくらい目をつぶってくれてもいいんじゃない?」

「確認するだけ無駄、ですか」

「セイバー」に「アサシン」、その他に流派や隠形、命のやり取りを当たり前のものとして削りあうその感性が肌に合わない。

いくなればジャンル違いの小説が物語に無理矢理詰め込まれたような、もともとただ学園生活を綴っていた話に突如として混入した異物。二人の女顔を出したこちらを気にせず、もしくは気にする余裕すらない程に場が緊迫しているのか。距離を置いたまま、セイバーと名乗った女が剣を握る腕を引き絞り、前にテレビで見たフェンシングに似た構えをとる。

あまりにも非日常を体現したような光景と渦巻く殺気のぶつかり合い。恐怖が吹き飛ばされたかのように、或いはその境地を白く塗りつぶされた様に、身体は逃げろという本能を無視したまま入口に寄りかかりながら、二人の激突を眺める以外に、出来る事はなかった。

剣を持ったセイバーに対してアサシンと呼ばれた女は終始無手のまま、構えを取られたというのに腕組みをしながら唸っていた。

「いやあしっかし、結構な業物だよねそれ。こりゃ手甲だけじゃキツイカー」

「別に、出し惜しみして油断してくれても構いませんよ。その間に、一瞬で終わらせてあげますから」

「うつつわあ。どこかで聞いたよその台詞」

取りつく島の無いセイバーの受け答えに、げんなりとした風に肩を落とすアサシン。物言いが真直ぐなセイバーに対して、彼女の言葉使いは砕けたものだ。相性のわるい、というより投げた言葉をバツサリと切り捨てられるような会話。だが、一転、アサシンは何の事はないという風に顔を上げた後、気合を入れ直すようにして肩を大きく回した。

「まあ、いつか。うだうだ悩むのは柄じゃない、ってね。こうして『最良のサーヴァント』と当つたのも縁と思つて、一つ、腕試しさせてもらおうかな、っと」

「まさか、此処から逃げおおせるとでも？」

回した腕を勢いそのまま左の掌に右の拳を打ち付け、空気が割れる音と共に、彼女の戦意が、明確な殺意となつた溢れ出す。

意気揚々といった態だが、対するセイバーはその言葉に心外だという様に、語尾をきつく返答する。だが、それも本来無理からぬ話だ。

聖杯戦争に呼ばれるサーヴァントの“クラス”は七つ。

その内、セイバーはアサシンの言うとおり『最良のサーヴァント』と言われる様にそのスペックが平均的に高い。

対して、アサシンとは七つの内のクラスの中でも基本スペックは一、二を争うレベルで低い。むしろ、サーヴァントは皆英霊の座に名を連ねた者達であり、最弱といつてもただの魔術師程度に後れを取るレベルではない。だがしかし、相手が『最良』とされるセイバーとなれば見劣りしてしまうのは道理だ。

「んーできない道理があるの？ 寧ろ、私が勝っちゃうかもよ？」

である筈が、相対するアサシンは不敵な笑みを浮かべ、半身になりつつ片方の腕を引き絞り、もう一方の腕の肘を相手に向けるという、武術において珍しい構えを取る。見様によつては弓を引くようにも見えるそれは奇をてらつた遊びだという要素はなく、張りつめる空気でそれが彼女本来のスタイルであるのだと明示していた。

『今さらに雪降らめやも陽炎の燃ゆる春へと成りにしものを——』

よつて、空気に伝播する独特の声法で唱えられた羅列も単なる言の

葉ではなく、文字通り言霊となつて彼女の雰囲気をも、存在をある一つの極致へと押し上げていく。

オン・マリシエイソワカ

『唵・摩利支曳薩婆訶』

所謂自己暗示の類だが、その効果は通常現れる筈の鋭敏化。感覚や集中力を極限まで研ぎ澄ませるのではなく、何処か彼女の存在を稀薄にさせていた。

見るからに面妖。穩行といったように、奇術の心得があるようだ。がしかし、この手の術は時間を与えれば与える程蜘蛛の巣のようにその制度を上げていく。故に、迷い思案するのは時間の浪費だ。

「先手、必勝!!」

「っ、はや——!?!」

ならばと文字通り空気を引き裂き、彼我の距離を一瞬でつめたのはセイバー。本来、速度においては最速とはいかなくても、その低いステータスの中でも速さにおいては上位に食い込むアサシン。そのお株を完全に奪う勢いで相手の懐に侵略したセイバーは、続く踏込みによる体重の移動を右手に握るその刃の先端に乗せ、相手の左胸、心臓へと一息に貫く。

一瞬の攻防。

相手が認識した時には既に懐へと侵入していた迅速の強襲に、アサシンは対応する事かなわず、心臓を貫かれた彼女はその姿をまるで幻のように薄れさせていく。

英霊とは文字通り生あるものではない。生前の偉業、悪行が残り、信仰され、畏れられて祭り上げられた人を越えた魂。故に実体など本来存在せず、サーヴァントとして受肉した彼女達であるが、その霊核となる部分を失えば現界している事は不可能。そしてその霊核というのの一つは脳。そしてもう一つが、

「貴女の、負けです」

胸を貫かれた彼女に留まる術がないのは先の通り。

「はー……あつけ、ないねこりゃ」

口元から血を流し、手に付着した己の血を眺めるように一瞥した

後、彼女はセイバーに何かを話そうとして、

「——なんてね」

その真横から、もう一人のアサシンが全力でもう一人の自分ごと、セイバーを殴り飛ばしていた。

「!？」

同じ人物。姿形だけでなくその魂まで、寸部違わず同じ個体が同一の空間に存在している異常。その認識に遅れたセイバーはどうか空中で体勢を立て直し、地面に打ち付けられるという最悪の結果は避けられた。が、誤った認識の代償が重い事を、鈍い痛みを訴える左肩が物語っていた。

「いやー今のは間違いなく真芯捉えたと思ったんだけどなーお姉さんいい動きするね」

「今のは……」

セイバーといっしょに吹き飛ばされたアサシンは傍らで完全に消滅したのを確認した。だが、今日の前にいるのはダメージの一切ない健全な状態の暗殺者。残像、分身といった類の身代わりという言葉が脳裏を掠めるが、その思考を読んだようにアサシンが否定した。

「ああ、これ？ 別に隠すつもりなんかないしいいけど。これが特技みたいなものでさ」

ホラ、と軽い口調で自分の持ち物を見せるように軽く、彼女はその身を臙げに歪め——像を結んでいた輪郭が三つにぶれる。

余人には信じ難いだろうが、その生み出された三体のアサシンは全て実体を持つ単独の存在。生み出した「アサシン」に縛られたものではなく、どれもかれもが彼女。故にどれが本体という事もなく、数に制限もない。

つまりはこの戦いは一対一ではなく、初めから一対多。

反撃から追い詰めているように見えた攻防はその実、アサシンによる戦力分析の前段階似すぎない。そして、アサシンが態々その種を明かしたという事は即ち、ここからが彼女の本領という事。

「さて、そっちが刃物で来るんだから、こつちとしてもこれくらい出させてもらわないとね」

アサシンは懐から取り出した鉄製の鉤爪を手甲に取り付け、先程と同じ構えを取る。見た目何の変哲も神秘もない、無名と思われる作りだが、態々取り出したのだ。飾りという事はないだろう。

「じゃあ」

そろそろ始めようかと姿勢を僅かに落したアサシンに対し、セイバーも堪える形で最初と同じ構えを取る。

「ええ」

それは二人が相対した先程のものと全く同じ姿だが、両者が互いに醸し出す雰囲気は段違いである。

土蔵の入口から、彼女達が発する雰囲気？まれて硬直していたセイバーの主人を余所に、二つの影が再度、大きな衝撃を生み出し、刹那の間に鎬を削りあう死闘が繰り広げられていく。

甘く見ていた。

迎撃してこのかた、今この胸を占めている感情はそれだ。

「せ、えーのっー」

こちらの斬撃をいなされた事によって生じた隙間に迫る高速の拳。幾ら雷速を誇るセイバーであろうと刃を引き戻すのには間が足りない。故に伸び切った手をただ返すのではなく、日本刀で言うなら鏢の延長、ナツクルガードで弾く。

そう、受け止めるでもその先の刃を立てるのでもなく、弾く。

「——うっ」

最初の被弾となった左肩、本来は左胸の心臓を狙っただろう一撃を咄嗟に庇った事によるものだが、その一度で、セイバーは彼我に存在する膂力の差というものを思い知っている。

「うっわ、今の合わせてくるかなあふっう。なら——」

「くっ」

真面に受ければ握る腕ごとひしやげそうになる程の怪力。アサシンの名に恥じない速度もさることながら、この相手はセイバーのどころか二つ三つも一撃の重さが違う。そもそも武器の用途が鋭さを要求するものと面の破壊を求めたもの。互いにもたらず破壊の結果は違うが、一発の速さがどちらの方が優れているかは問いにもならないだろう。

だが、拳という二つの得物をまったく同じ力で、それも規格外のパワーで振るうとなれば、単なる一撃が銃弾から大砲のそれに化けるのだ。

「っ、そっー」

故に受けに回れず、当然一度でも被弾を許せば致命的な隙を晒してしまう。そしてだからこそ、彼女が狙うのは相手の威力を削ぐ武器破壊。アサシンの拳単体、そこへ到達する為の障害である手甲と鉤爪の破壊だ。

「おわ——つと、ああああ、もう四つ目とか、お姉さんの剣鋭すぎ」

一撃の重さでは遠く及ばないセイバーであるが、一撃の速度で彼女に軍配が上がるのは揺るぎない。そして何より、彼女の繰り出す剣は負傷して尚、針の穴を通すように正確だ。もし、アサシンの膂力がセイバーと同程度かそれ以下、一般的、平均的なアサシンのステータス通りなら問題なく初撃の一刀で屠れたことだろう。

だが、それが叶わないからこそその英霊。

規格外、想定外であるからこそ、人の身でありながら人を越えた存在、英雄だ。

「そこはお互い様でしょう。分身といいその武具といい、一体いくつ隠し持ってるんですか」

セイバーの一撃により弾かれ、折れた鉤爪はその数4つ。数値にしてみれば小さいものであるかもしれないが、相手の攻撃を直に受けないうよう掻い潜り、反撃の無い腕が伸び切った僅かな隙を縫っての一撃。それを思えば四つ「しか」ではなく、この場合は4つ「も」打ち払えたセイバーの剣技の練度が異常なのだ。

だが、

「うん、まあ十分かな」

セイバーの言葉に答えるでもなく、新たに取り出した鉤爪の接合具合を確認するように腕を捻りながら一振りするアサシン。

不意を打った一撃から、彼女はセイバーに一回も有効打を与えられていない。なら浮かべるのは攻めあぐねる現状に対する焦燥などである筈が、アサシンのそれは寧ろ真逆。

「ぎ、次はもつと手数増やしていきますかっ」

「っ、またですか」

彼女の意思表示に従って、彼女の像がぶれていく。二回三回と回数を重ねれば彼女が他に獲物を有しているという選択肢は薄まってくる。終始無手であり、鉤爪という補助的な武具は取り出したアサシンだが、彼女にとって鉤爪事態の攻撃的補正に頓着していない事は、その体捌きから見とれる。

「っ——っの!!」

つまり、彼女にとって取り出した鉤爪とは相手をただ殺傷する為の武器ではなく、その本質は身に着けた手甲と同じく、寧ろ鎧としての側面が強い。

拳と剣において決定的な差とは即ち反応速度の差だ。

己自身の腕、神経が直結しているそれとその手が握る剣とでは、認識し、判断して、穿つという動作に対して、剣の場合は太刀筋を立てるといって一工程を挟まなくてはならない。達人になればなるほどの工程は限りなくゼロになるが、瞬間的な反射になればなるほど、生来持ち合わせたそれとでは差が出るのは道理。

「おっと！ あつぶなつ、いじゃない！」

「くっ、チヨロチヨロとー」

拳の連打という手数なら圧倒的優位にあるアサシンの連撃をしかし、セイバーは避けつつ、時には反撃すらしてみせる。

確かに攻撃のプロセスにおける理論で言えば、両の手が空く無手が有利なのは論として成り立つ。だが、それでも剣の方が有利とされるのは単純明快、リーチの差だ。

幾ら早い拳を繰り出そうと、真横から見ればただ腕を差し出しているだけに過ぎない。セイバー程の剣技があればその伸ばされた腕を切り捨てる事も可能という事も理由の一つ。であるがアサシンはそんなセイバーに対し、その身に着けた手甲、鉤爪で刃を弾き、時に絡め取るようにして動きを阻害する。何も神秘の無いただの鉄鋼ではあるが、直撃さえしなければ数回の接触程度、問題なく逸らす事が可能だという証明だ。

故に、神秘が軽いゆえの数による補強、壊れた傍から交換する事で己の脆弱さをカバーするという選択で、アサシンはセイバーと渡り合っているのだ。

そして、鉤爪が攻めの爪牙として然して必要ないというのは、彼女の武錬によるところが大きい。つまりは、彼女は宝具を必要とせず、ただの体術の身で英霊を圧倒できるという常識外れの武威がなせる業こそ最大の脅威。

言ってみれば彼女の体術が宝具級の域に達しているというデタラ



メ。

これが神霊クラスの化物であればただの体術などそれこそ鳩に豆鉄砲だろう。だが、英霊本来の力、魂の総量を「グラス」という役割に当てはめてる事で本体の何割かを召喚するという冬木のサーヴァントシステムがアサシンの武術に味方をしていた。

如何に霊格の高い英霊だろうと、この地の聖杯降誕の為の儀式においてはその神秘が減衰しているからだ。

「ホラ、どこ、見てるのさー」

そして、そこに折り合わせる彼女の特性、「実体を持った幻」という矛盾した秘術を織り交ぜる事によって、彼女の拳撃はより高位の技へと昇華しているのだ。

「あ——ぐっ」

交差する攻防。互いが有効打をあてられないが為に、両者の戦いは次第に飛び込んで擦れ違ふという光景が幾重にも繰り返される。ようやく、セイバーの剣がアサシンの胴を貫いたとしても、またしてももう一人、「無傷のアサシン」がセイバーを横殴りに吹き飛ばす。

「あーあ、まったく。ザクザク遠慮なしに刺しちやってくれてさあ。おかげで、私「三回も死んだ」じゃん」

そう、この技の異常性は何より、セイバーの剣が、それを握る手が確かにアサシンの核を撃ち貫いたという手応えをもってなお、彼女が「無傷」であるという怪異。

幻だから、薄れ消えたアサシンが既に幻影とすり替わっていたとかいう原理では断じてない。現に、クロスするように被弾覚悟で入れたカウンターはしかし、相手を貫いてからまだ消滅していないアサシンの攻撃を受けてから、もう一人のアサシンに背後から殴打されているのだから。

よって、セイバーの考察は自信で疑いつつも、アサシンが自身と同質で魂を分割するのではなく、共有する、或いは並列した幻霊を作り出す術と仮定してた。非常に空論じみた話ではあるが、もしこれが事実だった場合、アサシンを消滅させるには完全に、それも回避不能の空間に押しこめた上で、全て同時に生残る可能性を全て殺したうえで滅

殺しなくてはいけない。

「三回も霊核を貫かれて……ふざけてるのはどっちだっという話ですよ」

「んーいやいや、これでも三回も『殺される』って実際問題結構きついよ」

なら大人しくやられておけといいたくなるという話だ。普通、ただの人間なら一度の死でその生を終える筈が、彼女は三度殺されて尚立ち拳を構えて見せる。

「ま、身も蓋もない話しただけど結構でおかしな家の生まれでさ。こういうもんだと思っただけであきらめなよ」

世の中には常識外のものなどそれこそごまんといえるのだからと嘯く彼女に、戯言をと切つて捨てる。

セイバーにとつて、『世は常識外の存在で溢れている』など説かれるまでもない事だ。本当に常識外というのは、理不尽且つ一方的で、思考し模索する余地すらない程の絶望的な存在の事を言う。それを思えば、目の前で腰に手を当てて得意げにする『暗殺者』程度、なんと可愛げのある事か。

「確かに、世が非常識で溢れかえっていて、理不尽極まりないってことには全面的に同意しますよアサシン。ええ、兎角この世は不平等で、究極的には結果が全ての夢も希望なんてあったもんじゃないですよ。現実を見ろって話です」

そしてそう。現実を知って、尚——いや今まで真実を叩きつけられる度に屈する事無く立ち上がり、ひた走ってきたのがこの剣の英霊、その魂の在り様だ。なにより、現実を知って、それでも夢も希望も諦められなかった彼女だからこそ、『二度目』の聖杯戦争への参加を承諾したので。

ならばこの程度、

「そうだね。人の命なんて臍で酷く儂いなんて、どつかの詩人なんかは言うんだらうけどさ。現実を見ろって言うなら、そろそろ区切りにしようか」

戦意を高め、これまでの気の練度を凌ぐ収斂を見せるアサシンに、

セイバーは今までと同じ、刺突の構えを取って応じる。

そう。ならばこの程度の障害、軽く切り伏せ超えられないようなら、■■■■■という少女の願いは泡沫に散るだけ。握った剣が切り伏せてきた魂たちに奉じる為にも、これ以上の無様は晒せない。

「だから、応えて、スルーズ・ワルクキューレ！」

一息でこちらに飛び込んでくるアサシンの姿を確認し、セイバーも四肢に気を張り巡らせるようにして迎え撃つ。二度の負傷で碌に動かない左腕の事など彼女の頭の中にはない。今できる最善、持てる全霊をもって全ての障害を排除する。

『玖錠降神流——陀羅尼孔雀王オオオツ!!』

膨れ上がった気を右の拳に一点集中させ、彼女本来の力に上乘せされた一撃。

練り上げた余剰ですら踏み込む脚に現れ、目前で踏み切る彼女の周囲には地震と錯覚するほどの衝撃を伝播させる。それだけでセイバーは、この一撃に彼女が己の武術に心血を注いできたという事の表れだと理解し、

ブリアー

『B r i a h——』

その苛烈な一撃を、完全な意識の外である背後から雷速の一振りでもって斬り飛ばした。

「え、あ」

胴を真っ二つにされて崩れ落ちるアサシンの姿を眺め、刃に付着した血を掃う様にして周囲を窺う。だが、これまでと違いアサシンの姿は確認できず、徐々に消えていくだけの暗殺者をみやり、瞬いていた剣の光を徐々に収めていく。

アサシンが遅かったわけでもなく、弱かったわけでもない。寧ろ先程の一撃を初劇としてもらっていたとしたら、恐らく手痛い所ではすまない負傷をしていただろう。そして、そこまでの怪我となれば戦闘行為に支障が出るのは必至、これまでの彼女との戦いを思えばそれが致命的であるのは論ずるまでもない。

彼女は「最弱のサーヴァント」等ではなく、セイバーにとって間違

いなく強敵であった。

ただ、もしこんな「聖杯戦争」などという舞台でなければ違った出会いもあったのだろうか、

「——ごめんなさい」

自身も何に対して謝罪しているのかも知れず、ついに完全に霊核の消えたアサシンを前に頭を垂れ——背後で何かが崩れ落ちた音を聞いて、彼女は慌てて振返った。

マスターと呼びかけて抱き起した主人の身体は、簡単に見ただけでも生きているのが不思議なくらいの有様だった。骨折や裂傷などかわいいモノで、変色した肌を見てわかるほどに内部が傷ついている事が分かる。

自分の能力によって、ある程度の傷は自己回復できるセイバーにとっては他者の治療とはあまり得意ではない。知識として応急の医療行為は知っていても、これはその範囲を軽く超えている。

だが、このまま何もしなければ、今生の主の命がただ失われていくのを眺めているだけであるのには変わりない。

故に何か治療に使えるものはと極力その傷ついた体に気を遣いながら抱えて立ち上がろうとしたところで——

「セイバー、ですか」

酷く懐かしい、かつて見知った顔と再会を果たした。

嚙矢

— B e g i n n i n g    n i g h t m a r e —

思い返してみれば、親父、 “衛宮 切嗣” という男はどこか変な男だった。

変な、といえは漠然としているのかもしれないが、それ以外に表現する言葉を持ち合わせていないので他に言いようがない。

初めにあったのは白い病室のベッドの上だった。

今から十年前、冬木を二分した片方、新都と呼ばれる一角で大きな “火災” が起きた。今でこそ大きな公園として形を保っているが、当時はテロや爆発事故、その他にオカルトな崇りだのと様々な憶測が飛び交い、茶の間の話題には事欠かなかったらしい。

そして、件の事件唯一の生き残りが当時小学生だった少年、つまりは自分だ。

たった一人の生存者という事で、当然親がいる筈もなく、今では記憶もあやふやだが親類との関係がよくなかったのか、病院に缶詰状態だった自分に見舞いに来る人間もいなかった。来たとしてもそれは事情聴取と心配して経過を見に来てくれた当時事件を担当していた警官と、話題欲しさに一般人を装ってくるフリーのジャーナリストであり、病院側の配慮で直ぐに面会謝絶になったが。

ともあれ、そうした経緯で自分がいた病室に人が来ることはほとんどなかった。怪我らしい怪我はあらかた完治しているというのに、世間体か事情は分からないが、依然入院状態だったある日、二人の男が面会に来たのだ。

片方は冬木の土地で古くからの名家であり、宝石商を営んでいる “遠坂 時臣”。

そして、今では養父であり、衛宮の名をもらった “衛宮 切嗣”。

この日、俺は自らを “魔法使い” と名乗る二人の男と出会った。

「夢、かよ」

また懐かしい夢を最近見るなどひとりごちた。

昔の記憶は、正確には災害にあった当初の記憶は良く覚えていない。白状とも取れるのだろうが、正直、実の親の顔もあやふやだ。なので、今見た夢、昨日見た災害当時の記憶が自分の中で鮮明に残る一番古い光景で、物が物だけに強烈なのは言うまでもないと思う。

しかし、災害当初の記憶と違い、切嗣達と出会った思い出は紛れもなく自分の中では得難いもので、寝起きはそれほど悪くはなかった。

「ん？ 俺、客間で寝てた、か？」

なので意識が覚醒してから周囲を認識するのに齟齬はなく、自分が今寝ていた場所が自室ではないという事を把握するのに時間はかからない。加えて、

「——っ」

身体を思い出したかのように襲った激痛と、筋肉痛という言葉が可愛く思えるような倦怠感、言い方を変えれば酷く怠かった。

その痛みから、自身が見知らぬ女に襲撃され、殺されかけたという非現実的な出来事が脳裏を駆け巡った。

あれからどれだけの時間が経っていたのか、一夜明けただけなのか、いや、あれだけの怪我を負っていながら一日ですんだのかなどと思考が一向に落ち着かない。

などと、あまりの痛みに起き上がりかけた体が行為を拒絶するように倒れていると、

「起きられましたか」

部屋の襖が開き、その間から二、三日来られないと言っていたはずの舞弥が顔を覗かせた。

何故ここにいるのか、今日が、今がいつなのか、あれからこの家はどうなったのか、そもそもあの時襲撃者を屠った女はどうなったのか。思わず頭の中に浮かんだ疑問を口にしようにとして、再度体勢を崩して布団の上に崩れる。そんな自分を見た舞弥が上半身を助け起こし、飲み物は飲めるかとコップに入ってた水を差しだしてくれた。

意識を確認する為か、ここ最近の事を訪ねてくる彼女の質問にゆっ

くりと答える。と、問題ないと判断したのか、頷いき痛み止めだと差し出してきた錠剤を疑う事無く、自分は水と一緒に呑込むと、不思議と気だるかった身体が軽くなった。

「わるい。俺にも何が何だか……そうだ、舞弥さん。今日は何日」

「蓮、落ち着いて聞いてください」

急に居住まいをただし、神妙な顔つきで改まる彼女の雰囲気は有無を言わせないものがある。もともと顔立ちが整っていたことも相まって、対面するこちらいう事をきかない体に悪戦苦闘しつつも背筋を伸ばした。

「まず、蓮は私が発見した夜から二日間寝込んだままでした。状況から察するに、今現状を受け止めるのは困難だと思いますが、逃避しても現実は変わりません。順を追って説明していくので——」

「マイヤ、レンは起きましたか」

襖の向こうからひよっこりと金色のアホ毛を揺らしながら顔を出したのは、昨日襲撃者を見事に返り討ちにした碧眼の女。名をセイバーと名乗ったその人が当たり前のように、自然体に我が家が上がっていた。

「あ」

口からこぼれた間抜けな声。

続き、反射で大声で指さした自分は悪くない。悪くないならない。

そもそも、目の前で襲撃してきた不法侵入者とはいえ、問答無用で刺し殺しているような人間が、普段着を着て何食わぬ顔をしている方がおかしい。

だからか、指を指すのは失礼ですなどと口をとがらせている彼女に、黙れ馬鹿などと、低レベルな言い合いが始まってしまふ。突然混入した非現実の象徴のような存在を受け入れがたかったのか、単に寝起きで襲った痛みにささくれ立っていたのか、稚拙な口喧嘩は中々終息する様子を見せなかった。

「だから隣室に居てくれと言っておいたのですが」

そんな中、言い争う二人の傍で、舞弥が一人ため息をついていたよな気がした。

事態がようやく落ち着き、場所を寝ていた部屋から隣に位置する部屋に移り、ごく自然にお茶を入れてきた舞弥からそれを受け取って腰を落ち着けた。

その頃には、というよりは先程口論している際には気が付かなかったが、身体の痛みはそのほとんどが収まっていた。察するに先程舞弥から渡された薬の効能だと思われる。が、信用しているとはいえ、こうまで効き目が強いと、その成分に幾らか不安も出てしまう。

そして、改めて湯呑に入っていたお茶を一口咽を通し、わきの台に置いたのを見計らい、向かい合う形で座っていたセイバーがゆっくりと事の経緯を語ってくれた。

先日の襲撃者、突然の死の宣告。

自分が巻き込まれたトラブルの名称は、曰く「聖杯戦争」と名のついた「魔術師」同士による殺し合いだった。

「聖杯戦争」

それは、かつて冬木の名家であり、土地セカンドオーナーの管理者であった遠坂を初めとする三つの家の魔術師によって作られた「奇跡を現実とする為の儀式」。

奇跡と言っても形、願望、思想など、望まれる姿は多岐にわたれど、魔術師である彼等の望みとは一つ。

つまり、「根源」への到達だ。

この世の何処かにあるとされる場所。

曰く、全ての始まりであり、終わりをたどり着く場所。

曰く、この世の全てを記録した場所。

故にそこに至り、記録を引き出せたとしたならば、この世のありとあらゆるものが作り出せるという事。いうなれば人の身にして神の領域へと至る試みだ。

それは一般的な魔術師であれば誰もが望み、手段は違えど目指すもの。

そして、件の三人、後に「始まりの御三家」と呼ばれる彼らが起こ



した「奇跡」は良くも悪くも優秀過ぎた。全能たる「根源」への道を穿つための手段、奇跡を可能とする為に選んだのは、奇跡を起こす為に「奇跡の器」を作り出す事だった。

「奇跡の器」、つまりは「聖杯」。

聖人の生き血を受けた器や、最後の晩餐に使われた杯など諸説あるが、彼等が望んだのは「万能の釜」。大願である「根源」へ至るだけの魔力を秘めた器であり、結果として、彼等はその望みどおりの器を創り出してしまった。

だが、問題として、その使用者、万能の願望器たる「聖杯」はたった一人しか使えないという欠陥を抱えていたのだ。

そうなれば、如何にこれまで大願の為に協力していた三家の間にも亀裂が入った。聖杯戦争、その前身だ。

そして、一度目が有耶無耶の睨み合いのまま機を逸し、二回目で聖杯戦争のシステム、ルールを形作るも一回目と同じく失敗に終わっている。

その中で、魔術師達の闘争を代理する形で請け負う存在、「サーヴァント召喚」がシステムとして組み込まれた。これもまた程度としては常識外れの仕様だ。「サーヴァント」とはその名の通り召使、或いは使い魔を指すが、この聖杯戦争で呼ばれるのは、過去、現在、未来における英雄と呼ばれた者の魂を、聖杯が用意した「グラス」という器に注いで現界するというものだった。

用意されたクラスは七つ。

剣の英霊、セイバー。

槍の英霊、ランサー。

弓の英霊、アーチャー。

騎兵の英霊、ライダー。

狂乱の英霊、バーサーカー。

魔術師の英霊、キャスター。

暗殺者の英霊、アサシン。

いずれもその時代における豪傑達であり、たった一騎であったとしても、それは単騎で軍隊に匹敵しうる力と神秘を備えた英霊。それほ

どの存在のぶつかり合いともなれば、数に対して規模が「戦争」の名を冠するのもうなずける話。

そしてクラスが七つという事は参加者である魔術師、マスターと呼ばれる者達も七人。

魔術師であるか、魔術回路を備えた人間。そして聖杯に臨むにたる願いを持った者を聖杯が選び出す。

つまり、

「……オーケーオーケー。聖杯戦争？ 50年に一度の筈が異例の開催？ で、あんたが件のサーヴァントで、英霊様でセイバーだと。そこまでは分かった」

魔術師である切嗣という親を持ち、彼に指示していた自分は確かにその参加資格である魔術回路を備えた魔術師であるのは理解した。正直馬鹿騒ぎにしか思えない戦いに知らず巻き込まれていたのは業腹だが、マスターの証であるという右手に宿った痣、三画の「令呪」がそれだと言われては覆しようがなかった。思えば、襲撃してきたアサシンが態度を変えたのは「令呪」を隠していた包帯を見てからだった事からも、反論する材料には乏しかった。

付け加えるなら、あの時虚空から見慣れない剣を取り出していたというファンタジー前回な現象を目の前にすれば疑う方が難しい。試しに剣はどうしたのかとセイバーに問うてみれば、

「ああ、アレはですね」

と、ちよつと得意げな顔をして、一つ聞きなれない単語を唱えたかと思えば、虚空より、あの夜の再現であるかのように彼女の手には白銀の剣が小さな青白い光と共に出現していた。

「ちよ、バカかお前いや馬鹿なんだなそうだろ！ 真昼間からそんな物騒なモンホイホイ出すやつがあるかつ」

「なつ、そもそもこれは貴方が」

やかましいと、その手に持った真剣に怯まず脳天に手刀を叩き込んでやるも、相手も怯む事無く噛みついてくる。一応、その手にもった剣で刃物による物理的威圧することはなかったが、普通に考えて銃刀法違反の存在する現代で抜身の剣を晒されて動揺しない方がどうか

している。

決して刃物が苦手だとか、先端の鋭いものが不得手だとかいう理由ではない、決して。

そうして三度目の子供のような言い合いに舞弥が仲裁する事しばらく、ようやく落ち着いた頃。この頃にはセイバーがいう「聖杯戦争」の成り立ち、その仕組みについては幾分理解はした。そういうものがあるのだと魔術師という人種がいる以上、そんな方法を考え付く者がいるのだろうかという事も、まあ、分からなくはない。

そう、解らなくはないが――

「わかった――がなオイ、ちよつとまで。お前が言う聖杯戦争とやらはまだ始まっていないのに、なんで俺の家がこんなめちやくちやになってるんだよ!!」

アサシン襲撃から、舞弥の言葉通りなら二日目の朝、衛宮邸の外観はほぼ半壊という局所的な災害に見舞われたような有様だった。

「それは、確かに間に合わなかったのは不徳の致すところですが」

あの場合は精一杯だと弁明するセイバー。だが、自分は意識の失う時までの記憶は辛うじて覚えている。というより、考えてみれば被害規模がおかしいのだ。そう、あくまで襲撃者であったアサシンの攻撃手段とは徒手空拳。セイバーと相對して、手甲に鉤爪を装備していたが、その程度で屋根が吹き飛んだり庭が抉れたりはいらない。いや、一部的には損壊しそうだが、それでもここでの被害にはならない筈だ。「で、俺の記憶が正しいならだな。アサシンを倒す瞬間、お前結構な光放ってなにかやっただろ」

意識は定かではなかったが、あれほどの光がさしてはなれていない場所で放たれたのだ、嫌でも覚えている。記憶では、光というよりもビームと表現できそうなほど強烈で直線的な閃光だったが。

「あれは、そのですね……いや、ほら、何と言いますか、マスターが重症でしたし？ 緊急処置と言いますか何と言えは」

よく解った。つまりはギルティ。

彼や此れやと言いつつ訳をならべるセイバーの頭を思いつきり、アイアリンクローの要領で締め上げる。

「あイタイ。マスターちよつとこれ痛いです。いやほんと洒落にならないとかイタイっ、ちよ、女性に対してア、暴力反対イ」

「やかましいっ」

女性に対して暴力は見苦しい？

ああ、その考えには大いに賛同しよう。だが、この件に関しては別だ。何事も最初が肝心であり、今後どうするかの方針はともかく、ぶつかる壁全てにこの外で誇示されたような力技で解決されていけば、その内自分の胃に穴が開く。主にストレスで。

「蓮、気持ちは分からなくもないですが、事態が進みません。ここはどうか一度落ちつけてください」

「あー………ったく。ホラ」

舞弥に指摘されたようにその手を離すと、素早くこちらから距離を取って恨めしそうに上目でこちらを睨みながら頭を抑えるセイバー。というより、魔術師とはいえ、たかが一般人程度の握力で痛がるコレがサーヴァントなのかと少し不安にもなる………ついでに若干の罪悪感も湧く気がした。

「そ、そのですね。ですから、マスターであるレンはこの度、『聖杯戦争』の参加者、七人の一人として選ばれたわけです」

若干涙目のまま居住まいを正す姿に、残念ながら威厳はなかった。彼女の言葉を聞きながら、資格である『令呪』を眺める。

サーヴァントを召喚する権利を示すもの。そして、呼び出したサーヴァントに対して三回だけの命令権を持つ刻印。

こうしてみるだけでも確かな魔力を感じるあたり嘘だ妄言だと笑い飛ばすには少々物が重々しい。

「聞くだけ無駄だろうけど、拒否権は？」

加えて、魔術師としては未熟者の自分が『解析』しようとしても、かなり高度な魔術刻印であるという事が解るだけで、それを破棄したり誰かに譲渡したりしようにもチンプンカンプンであるという事が分かっただけ。ようは、現状を覆すのは困難であるという事実。

「………だろうな」

「『聖杯戦争』に参加したマスター達はいずれも己が望みのもって冬

木の地にきている筈です。中には、マスターのように突発的な選定によつて選ばれるイレギュラーもなくはないですが、これから出会う相手は戦いたくないと言つても見逃してくれる可能性はほぼゼロです」  
なので、例えば自分が「聖杯」に興味がないと言いつても、勝者に約束される「万能の願望器」である賞品を求めて集う魔術師達が見逃す保障などどこにもない。

聖杯を得られるのはマスターだけ。過去の「聖杯戦争」で勝者もなく終わった事があるという話を知っていれば、例えば実質無害であろうと、生残る可能性のあるマスターを放逐するのはナンセンスだ。

そして、マスター達が「聖杯」という奇跡の器に願いを託すように、本来一魔術師などに使役できない筈のサーヴァント達がしたがるのには、このどんな願いでも叶える「聖杯」という存在があるからでもある。つまりは、マスター達と同じく、彼女等も聖杯に臨む願望があるという事。当たり前であるが、彼女等は意思の無いただの使い魔ではなく、あくまで個々の意思を持った靈魂。

「ですから、改めてマスターに重要な事を聞きます」

よつて、マスターとサーヴァントの組合せにおいて、互いの意思疎通というのは不可欠である。相互理解の得られない組はそれだけで連携に支障をきたす。ならば、まず、魔術師と英霊にとつて、互いの願いとは勝利を目指すうえでまず互いに確認しあわなくてはならない必須事項である。

故に、

「貴方が「聖杯」に臨む願いとはなんですか？」

真剣な表情。

碧色の瞳に一切の嘘偽りは許さないという遊びの無い彼女の視線に貫かれる。

聖杯による一方的な選定とはいえ、そこには何かしら願いの形があるという彼女の言葉に従い、自己の中で形成されている願望らしきものを掬い上げる。

「俺は——」

「じゃ、行ってくるから」

「レンっ、話はまだ——」

突き放すように、乱暴に閉められた板戸が柱にぶつかり、独特の音を響かせる。セイバーがその音に思わず怯んだときにはもう、曇りガラスの向こうに彼の影はない。まるで目の前のそれがそのまま彼の内心、拒絶を表すようでもあった。

「行ってしまいましたか。すいませんセイバー、力になれず」

彼が起きてから場所を移し、付き添ってくれた舞弥と二人、半壊した自宅と二日前の夜の出来事、巻き込んでしまった「聖杯戦争」について事情をできる限り説明したつもりだ。無論、根底となる事柄に関しては知らなくてもいい事、寧ろ関わらないのなら知るべきでない事だ。巻き込んだ側としては隠し事をしなくてはならないのは心苦しいが、マスターに選ばれてしまった以上、それら最低限を知ったうえで判断してほしかった。所詮エゴだとわかっていても、だ。

「いえ、初めから意思がしっかりしている分、こちらも割り切りやすいですよ。それより、またこうして貴方に会えたこと、嬉しく思いますよ舞弥」

そして、件の少年。この度の「第五次聖杯戦争」でマスターの一人として選ばれた「衛宮」の姓を受けた彼の答えは単純にして一言。

『興味ない』

聖杯なんてものに願う事もないし、そんな戦いに興味もない。だから関わるなそんな物騒な非日常余所でやれ。それら諸々が定められた一言は彼という人間の性格を表していると言えた。

自身の命を狙われる渦中であって、狼狽えるどころかあっけらかんと切り捨てる。生きるか死ぬかの選択が理解できていない訳ではないだろう。舞弥から、切嗣よりある程度の魔術の手ほどきを受けていると聞く。つまり、この事態をはき違えているという事はない。

故に、「どんな願いも叶う器をめぐる争奪戦」に選ばれ、サーヴァ

ントという超常の存在を目の前にして尚、彼は「ソシナモ聖杯」には興味が無いというのだ。

「育て方をと、切嗣は若干放任が強い気もしますが」

「で、しょうね。彼らしいと言えればいいですよ。変わっていないみたいである意味安心しましたけど」

渋い顔をする舞弥に苦笑気味で応える。思い返せば、ここ、今は「衛宮邸」として定着しているようだが、そこに自分と彼女が内容はともかく談笑している光景がどこかおかしく、どこか温かい。

家主である切嗣は今ここにはいないが、言われてみれば、彼はあまり育児が得意そうには見えなかった事を思い出す。それをネタに二人で当時を振り返り、あの頃はどうかだったなどと花を咲かせるのも一興——だが、何時までもそうしていられないのは、二人共通してよく理解していた。

「それで、切嗣は？ 彼については何か」

こうしてセイバーのクラスが召喚された以上、聖杯戦争は開戦の鐘が鳴っている。加え、切嗣と舞弥の調査により、英霊の召喚は全て確認されている。つまりは七騎の英霊は既に冬木に出揃っているという現状、聖杯戦争の開幕はどうあっても覆す事は不可能。どのサーヴァントが誰に呼び出されたのかまでは把握できなかつたようだが、養子とはいえ、自身の息子が混迷の渦に巻き込まれたのだ。幾ら彼とはいえ一言くらいあるだろう。

「いえ、とくにはないと。自分ももうすぐ冬木に入るから心配はいらない。あと、それまでは面倒を見たやつてくれ、だそうです」

その言葉を聞いて、真剣な話だと気持ち引き締めた頬が少し緩んだ気がした。というのも、記憶に残る「衛宮 切嗣」という男は、一言で表すなら残虐、悪逆非道。目的の為に手段を択ばない男だ。今であればそれは彼が目指す目的の為に多くの苦悩の果てにたどり着いた決断なのだろうと理解もできるが、賛同するかわれればNOである。

だからであろうか、そんな彼が普通の人のように、当たり前前に我が子を心配しているという姿が微笑ましいのだ。

「……前言を撤回しますね。あれで彼も父親しているようで、なんだかちよつと嬉しいです」

当時、実の娘にどう接したらいいのか考えあぐねていた姿を思えば尚更に。

もつとも、その心配というのはまだ不慣れな様で、面と向かって口にすることは少ないのだろう。実際に目にしたわけではないが、その背を見て育つただろう少年を見た今ならある程度は察せられる。脳裏に浮かんだその姿の、なんとも不器用な父親ではあるが。

「老婆心ですか？」

その意見には同意なのか、口元に手を当てて何かを堪えている舞弥が首を僅かに傾げつつ訪ねてくる。が、少々その言葉は聞き捨てならない。

「失敬な。私はそんな心まで年老いたつもりはありませんよ。気持ちのはあの頃から変わらず、ピチピチの十代です！」

「あの、それは死語——」

確かに自分は過去の人間、いや、そもそもこの世界の人間であるのかも怪しいが、それでも心、魂まで歳に擦り減つたつもりはない。だからそういった意味でこれは少し、いやちよつと真剣に話し込む必要があると向き直って抗議の姿勢を取ろうとして、

「……いえ、すいません。ですが私も、こうしてまたあなたと会えたことを嬉しく思いますよ。セイバー」

こちらに向き直り、再会にと手を差し伸べてくれる嘗ての戦友に心が温まった。

あの時、〃第四次聖杯戦争〃のおりに瀕死の重傷を負った彼女を目にした時は、正直もうだめかと思っていた。また救えない。目の前で関わった人間の死を看取る。生前、戦場を駆け抜けた彼女が幾度も味わった光景であり、認められなかった魔名。だからこそ、こうして目にして、言葉を交わして、戦いはこれから始まるというのに咽がつまる。感極まるというのはこういう事を言うのだろうか。

「ええっ、改めて、これからよろしくお願いします舞弥」

差し出された手を握り返す。彼女にとって此度の聖杯戦争はどの



ような結末が待ち受けているのか、先は遠く、不鮮明であるがそれでも、この廻り合わせは心強いとしっかりとその手の温かさを確認した。

——そうしてしばらく。

「それで、ですね」

最初に切り出したのは舞弥。

互いに交差していたその視線が脇に逸れ、ゆっくりと外へと向かっていく。

「ええ、それで……」

それはセイバーとて同じことを思っていたのだろう。

マスターである彼への説明も終わり、彼のスタンスも確認した。互いに戦に臨むにあたって意気込みを再確認した。だから、その為に、ここで一つ直視しなくてはいけない事案があるのだ。

「これはどうしましょうか」

二人してゆっくりと視線を向けた先、穴が開いた障子どころか柱が折れ、壁が吹き飛び居間まで見えるその先には広い、イロイロな意味で広い庭が広がっている。

聖杯戦争への準備も大事だが、戦に臨むにはまず足元を固めなくてはならない。切嗣と合流するまで、マスターとなった蓮を保護する意味でも、拠点の確保は急務だ。

故に、聖杯戦争初日、彼女等の最初の仕事とは「後始末<sup>かたづけ</sup>」である。

正直に白状するのなら、この時は非常に気が重かったと記憶していた。

二日ぶり、と言っても意識が無かったのでどうにも妙な感覚だ。会クラスメイトには大丈夫か何があった等、親しい人間は家の惨状を耳にしたのか目にしたのか、割と突っ込んだ話を聞いてくる。

「いや、俺も昨日意識が戻ったばかりでさ。事件当時の記憶はないんだよ。ほんと、傍迷惑な話だけだな。聞いた話だと——」

なので、これまでこちらが耳にした件の噂話を整理して、用意した

それらしい『作り話』で誤魔化す。幸い、家が半壊に近い状況であるのは事実であるし、多少大げさな方が他人の興味とは逸れるものだ。「ふーん。って、てかよくお前生きてるよな」

「はは、俺もそう思うけど。面と向かって言うやつがあるかよ」

實際死にかけたし、今朝方はバラバラになるのではないかという痛みも味わったが、ここでそれを風潮しても何にもならないし、真に受けられるどころか頭の残念な奴と思われるのが落ちだろう。一体全体、どうしたら素手と剣で殴り殺し合う場面に巻き込まれたという大話を信じるのか。たぶん俺が聞く側なら二も無く頭は大丈夫かと聞くだろう。

そして、休み時間毎に野次馬をしてくる顔見知りをさばいていくと、あれよコレよと時間は本日の授業を消化していた。なんとも、こんな時間まで聞きに来るとは、この学園の生徒も大概暇なのか、単に話題に飢えているのかと額を押さえる。

が、日が暮れたのならこれ幸いだ。何しろ、家に帰れば取り組まなくてはならない事案が山となっている。文字通り瓦礫の山だが。

ともあれ、避けては通れない問題でもある。

基本的に自分のスタンスは無気力というか、火の粉が自身に降りかからなければそれでいいというものだ。実際、渦中にいなければ余所で勝手にやってくれと放り投げそうなものだが、一応命が関わっているらしいのだ。そうも言ってられない。

説明にあった『万能の願望器』とやらに興味は欠片もないが、参加権を破棄するか、最低限身の安全を確保できる手段なりなんなりを用意する必要があるだろう。

カバンに机の中身を詰め込み、重量の上がったそれを肩に担ぐ。途中、大丈夫かなどと心配してくれるクラスメイト達に、片手で挨拶を返しながら大丈夫だと言って教室のドアへと向かう。

少々心配され過ぎとも思うが、こうして気にかけてもらえるのは有難い事だし、悪い気はしない。日中は邪険にするように質問を返してしまっただが、今度はもう少し真面目に対応した方がいいかなどと苦笑しながらドアに手を掛けて――

「こんにちは。衛宮君は——」  
「げっ」

自分を目の前にして笑顔を浮かべた女生徒がこちらに気付かなかったのか、扉を開けた状態で遅れる事半瞬、目の前の人物が目的のソレだとようやく気が付いたようだ。

「あら、ちょうどよかつたわ。ちよつと私貴方に用があつたの。悪いんだけどつきあつてもらえないかしら」

見た目は間違ひなく学内、クラスに残っている女性を並べたとしても上位君臨する容姿。艶のある黒髪をすらりと流し、立ち姿は内面からの自身が溢れるかのように堂々としている。

一言で美人と言える生徒であり、そんな彼女に用があるから付き合つてなどと言われれば、普通の男子としては心ときめくイベントを夢想するのだろうか、生憎と自分はその手の動悸とは無縁だった。

「あ、ああ。遠坂、か。悪いんだけど今日この後外せない大事な様があつてだな。直ぐ帰らなくちゃ」

「ん？ 何か言つたかしら。ごめんなさい、ちよつと聞きそびれちゃつて」

無言の圧力が前から、ついでに後ろから恨めしいと言わんばかりの複数の視線が突き刺さってくる。

最悪だ。恐らく確信犯で、こうなるだろうとわかつていて教室まで足を運んだのだろう。つまりは、既に選択肢などない。

「あ……はい。お供させて頂きマステス」

よろしいと一つ頷き先に行く暴君を前に肩を落とすつつ、嫌々階段を上りながら、その先に行く彼女の後に続いて行つた。

「で、先ず答えてほしいのだけど、この二日間、正確にはその前ね。貴方の家で何があつたのかしら」

化けの皮が剥かれるという言葉があるが、この場合はむしろ自ら脱ぎ捨てたのであつて、これが「遠坂 凜」という女性の地だ。認めたくないが世間一般の言葉に従うなら、「幼馴染」というやつにカテゴライズされた筈だ。しかし、質問ではなく答えるのが前提というのが

聞き方としてまずおかしいと思うのは自分だけだろうか。

「何って、今日でその質問何回目かい加減うんざりするけど。あれだ、ちよつと家の扉にトラックが激突して入ってきてな。運悪くガスに」

「嘘ね」

「つておい、バツサリかよ」

何時からの付き合いだと右手の人差し指を立てる彼女の姿は、出来の悪い生徒を諭すかのように様になっている。付き合いが長いという事もこういう時は考えものだろう。

「貴方、嘘が分かりやすいのよ昔から。それでなくてもこっちはコツチで情報を掴んでるから」

じゃあ聞くなよと口をでかけた言葉を吞込む。

昔から、当時切嗣が留守の間にと紹介されたのが遠坂家。その当主と娘である遠坂 凛だ。切嗣に魔術を教わり始めた頃だったか、その頃からよく家を空けだした彼が代わりに指導してくれと願い出たのが始まりだ。なので、同じ師を持つ凛と自分は姉弟子とも言え、互いの事は実の兄弟のように知っている。

「じゃ、あんまり惚けられるのも疲れるから、単刀直入に行くわね。貴方、サーヴァントを召喚したのよね」

そして、そんな彼女が告げた言葉は不意打ちにして衝撃を孕んでいた。

「なんで、お前その名前」

渦中に放り込まれ、耳にしたばかりの本来聴くはずの無い単語。今朝方教えられ、魔術師どうしの殺し合い、その代行の名称。目の前で二人の女が殺し合いを繰り広げた、超常の力を持つ彼女、もしくは彼等を指す言葉だ。

「寧ろ、私からしたら貴方が知らない方が驚きなんだけど。まさかとは思ったけど、衛宮の小父様はそれも教えてなかったの」

そこでなんで切嗣の名前が出てくるのかは不明だったが、続く言葉は聖杯戦争最初期から彼女の家、遠坂が関わっていた事。今から十年前、四度目の聖杯戦争にて参加者として彼女の父親である遠坂 時

臣、そして、自分の養父である衛宮 切嗣がここ冬木の地で鎬を削っていたという。

それから十年後の今。本来五十年周期で起こる筈の聖杯戦争は本来の半分に満たない期間で開催の幕を上げている。

第四次のマスターであった親を持つ自分達。その手に宿った令呪が証だと袖をまくって明示してきた。

「で、貴方にも解ったでしょうけど、マスターになったなら、改めて敵同士よ。だから今日はその確認と宣誓ね。私としても真昼間からドンパチする無鉄砲じゃないわ。でも、これから戦う旧知の人間として、マスターになった他人の動機っていうのを知っておきたいの」

故にフェアにしようかと、今日は顔合わせの様なものらしい。この学園を戦場にしないというスタンスは、個人的には大いに賛成だ。何しろここには無関係の人間が多すぎる。

魔術とは秘匿する物。幾ら神秘の力を持つと、個々人の持てる神秘の位等たかが知れている。常人が至れる領域が魔術。一握りの人間がようやくたどり着ける境地が魔法だ。故に、世間の目から魔術師達は姿、魔術という成果を暗ませる。本来なら、こうして街一つを舞台に巻き込む様な殺し合いをやる方が異常なのだ。

そして、何を望み、何のために戦うのか、そう言われたとしたら、自分としてはいう事は決まっている。というより、今日聞かれたばかりの事だ。

「いや、俺戦わないぞ」

「はっ」

興味がない。戦わないし願いなんでない。事細かに言うつもりはないし、正確には望みだつてある。ただ、自分の願いを聖杯という他力に頼る気になれないだけだ。

「いや、そもそも俺 “聖杯” に興味なんてないし。なに、令呪が欲しいならやりたいくらいだよ」

だからこんなものいらないと、令呪の刻まれた手をぶらつかせるようにして上下に振る。魔術師としては根源に至る為の器として聖杯とはのどから手が出る程欲しいのだろうと、自分には令呪の譲渡な

どできないが、もしかしたら最初期からかかわっているという遠坂の家なら何とかなるのではと尋ねようとして

『――Anfang』

「はい?」

何か苛立ちを吐き出した様な舌打ちと共に、物騒な単語が彼女の口から洩れた気がした。

「――つまきた。貴方、思えば昔からそうだったわよね。いつもいつもいつもいつもいつも」

「あの、とお、さかさん?」

その口から洩れるのは聞き違いでなければ幼少期、互いに魔術を習っていた頃の出来事だ。なにを思う所があったのか、凜は事あるごとに自分に突っかかってきたのを覚えている。特に彼女を苛立たせるような振る舞いをした覚えはないが、自分より古くから魔道に触れ、志してきた彼女にとって半端な気持ちで魔道に足を踏み入れた自分が気に食わないんだと思っていた。

そう思う様になつてからか、互いに中学に上がる頃には段々と疎遠になり、そう言った蟠りは自然と消滅したと思っていた――のは、どうやら自分の方だけだったらしい。

「いい度胸じゃない、いらないうつというならその手ごともらつてあげるわよ。大人しくなさい、少しでも痛みを和らげなかったらね!」

振り上げ、指さすようにしてこちらを指し示すその形は、子供が銃を模すように親指を立て、人差し指で対象を狙ったもの。それ自体は彼女の父、時臣から自身も倣ったポピュラーな魔術だが、

「ちよーっおま、大人しくしてても痛いじゃすまないだろこれっ」

本来なら指さした相手の体調を崩す簡易の呪い、といった魔術。である筈が、横跳びに動いたために自分が元いた場所、コンクリートの壁はまるで銃弾が撃ち込まれたかのように弾け抉れていた。仮にこんなものが自分の身体に当たっていたとしたら、想像もしたくない。

「あら、少しはマシよ。貴方も脳髓グシャリと垂れ流したくはないでしょ? 腕の一本で命繋ぐんだからやすいものじゃなくて」

につこりととてもきれいな笑みで微笑んでくる凜の姿は、それもそ

れで絵になるのだろう。が、掲げられた右手に可視できる程濃密な魔力が渦巻いている事からも台無しである。

そして彼女なら言葉の通り、冗談ではなくやりかねない。普段の状態なら兎も角、今の彼女の表情、声のトーンは間違いなくブチ切れているときのそれだ。

「恨むんなら、半端な気持ちで魔道に踏み込んだ自分の未熟さを呪いなさい」

言葉と共に、横に振られた左手で周囲に簡易の結界が張られた事を確認する。人を寄せ付けない程の大掛かりな結界ではなく、恐らく防音をする程度の簡易のものだろう。つまり、助けを呼ぼうにも——いや、よしんば呼べたとしてもこの状況をどう收拾をつけるのか。

機銃よろしく放たれようとしている魔弾の群れを前に、二日目にして、俺は聖杯戦争最初の窮地を迎えていた。

砕けたコンクリートの破片が宙を舞い、それが地面へ落ちるより早く、飛びかう弾幕に晒されて砂に帰るように粉々にされていく。屋上は銃撃戦で練り広げられたかのように、無慈悲に、そして無残に荒れ果てていた。

「っのー！ 大人しくしな、さいつてのー！」

遠阪の魔術とは宝石魔術を得意とする。宝石という触媒に蓄積した魔力を、本来行使する魔術に接続することで術式の短略化、或いはブーストをするのだ。

だが、この相手へ対するのは個人的な感情。そう苛立ちであり、あの意味で嫌悪であり、侮蔑だ。魔術師である「遠坂 凜」という女と、「衛宮 蓮」という男は、魔術師としてそのスタンスが決定的に相容れない。

故に走らせる魔術も全て全力だ。行動原理は先の言うとおり個人、自分の感情、つまりは単なる八つ当たりである。のだが、

「っおー！ 無茶言うな馬鹿っ、こんなの、避けるに、決まってるだろ!!」  
蓮の頬を掠めそうになった魔弾、自分が放った「ガンダ」の弾幕を彼は悉く避けていく。

加減はしていない。いや、正確には本来得意とする宝石魔術を使っていない時点で本気というには程遠いのもかもしれない。だが、これが手加減をしているのかと問われればそうではないと言い切れる。

「ちよこまかっつ」

腕に刻まれた「魔術刻印」に炉に燃料をくべるようにし、更に弾幕を密にしていく。

本気というなら混じりけなどない。彼に宣言したとおり、凜は「殺さない」範囲での敵対行動をとっているのだから。確かに、ガンダは本来相手の不調を風発させる程度のものであるが、凜のそれは物理干渉するまでに魔力密度を誇った「フィンの一撃」。

対する蓮も魔術で身体を強化しているのだろうが、未熟な彼では全



身をくまなく強化するのは不可能だと知っている。よって、彼が受け損なえば腕の一本や二本がひしゃげるかもしれないし、当たり所が悪ければ頭蓋が碎ける事だってあるだろう。

「ぐっ、校舎破壊して楽しいかよっ、こんな場所です——」

「なら簡単よ、貴方が大人しく的になりなさい」

攻撃としては過剰にもとられるだろう。『殺さない』と手段を選びつつも、その選択肢の中で行う全力投球。

だが仮に頭蓋が碎けようと、『即死』しなれば問題はない。

いくらか猶予があれば、しばらく動けない程度には治癒もしてやるつもりだ。無論、その治癒を行使した場合に消費する宝石の額を考えれば頭が痛くなってくるが——何度もいうようにこれは個人的な八つ当たりだ、損得の感情ではない。だから、そうでもしなれば収まりがつかないと、後先を考えるのもそこそこに、まわした魔力をつぎ込み、弾速を上げ、密度を上げて彼女は獲物を追い込む。

アレスト——

『arrest——』

「させないわっ」

魔術を行使しようとした彼の出鼻をくじくように、当てるのではなく、ワザと避けられるギリギリの間隔で弾幕を張る。魔術とは平常心、常に余裕をもってというのは自身の父であり師である時臣の言葉だが、魔術においては真理だ。集中力が霧散すれば、練り上げた魔力は途端に四散する。熟達した者なら例外もあるのだろうが、未熟な彼がその域に到達しているはずもない。

「く、っそー！」

故に、不発した魔術に舌打ちをしつつも、彼ができるのは現状の強化した肉体で回避する以外にない。そして、よけられるギリギリを図ったということは、全弾をかわした彼の体勢は無理な行使で大きく崩れていた。

「次の手が疎か、考えなしで目先のことに手一杯、貴方の悪い癖ね」

アウトレンジから急加速。同じく強化の魔術で補強した脚力で両者の間を埋める。これが10mも離れているのなら話は違ってくる

が、ここは屋上、限られた空間で、遮蔽物もない。加えて、相手に隙ができるよう追い込み、確信していたのなら間隙は限りなくゼロだ。「っ!？」

驚愕と間近に迫る刃に対する恐怖。無駄と悟りつつも活路をと足掻こうとする意思の折れない目。それらが緋い交ぜになった彼の表情を至近距離で認識しつつ、だがこれでもかと魔力を練りこんだ拳は容赦がなく、加減もなく彼の鳩尾めがけて放たれる。

——ようとして、誰も来ないはずの屋上の扉が、乱暴に開け放たれた。

「こんなところで何の馬鹿騒ぎを——」

扉を開けた女性教師は目の前の光景を見て啞然と口をあけたまま停止していた。

いや、蓮が彼女の行動を停止させたとかそんな高等な魔術を行使したわけでもなく、単に彼女の思考能力が目の前の混沌とした状況に理解を拒絶していただけだ。

年期を感じさせつつも手入りを欠かなかった校風か、綺麗な状態を保っていたタイルはもの見事にえぐれ、もはやコンクリート面が露出していない場所を探すほうが困難だ。

近年自殺者も騒がれる世間の風潮からして、この学校も例に漏れずグルリと囲っていたフェンスたちは例外なく一枚一枚が満遍なく歪み、物によっては柱ごと吹き飛び基礎だけという場所もある。

そして、フェンスに押し付けられるようにして背をもたれている自分と、襲い掛かるようにしてその正面にいる凜。見方によっては不順異性交遊の現場に見えたり——もするのだろうか、個人的にこの構図は激しく遺憾である。いや、周りの状態を見ればそれどころではないの。は一目瞭然で、このご時勢に武装放棄を掲げ、戦争のせの字とも無縁なこの国でと、思考が止まるはよくわかる。実際俺が彼女の立場だったら二も無く扉を閉じて回れ右をしたい。これは自分には理解が及ばない手に負えないと無かったことにしたいが、哀れ、閉じようにも

彼女が強引に開いた扉は変形が激しく、とても閉じるようには見えなかった。

「あ、せんせ——いや、あの、これはですね」

「あーあ……どうすんだよ」

「ちよつと、貴方も何か考えなさいよっ」

この状況を丸く治める方法をと右手に、執念か練り上げた魔力そのままの拳を入り口にいる教師に見えないようにして脅してくる。が、知るか馬鹿とため息を吐いて思考を放棄する。

そもそも現状をよく考えてほしい。魔術師として未熟な自分がこうまで破壊された現状を覆い隠せるような隠蔽ができるはずが無いだろう。というより、この惨状を作り出したのは目の前で今も脅迫してくる“赤い悪魔”その人なのだから、どうぞ勝手に奮闘してほしい。一方的に“暴力”に出た自業自得で、自分はいくまで被害者だ。「貴方ねっ」

お前こそTPOを考えると、小声で吼えるなどという器用な真似を披露してくれた幼馴染。だが悲しいかな、時とは無常であり、そんなことよりあれはいいのかと彼女の後ろを指差せば、思考停止に固まっていた彼女がわなわなと震えだし、どうやら再起動を果たしたようだ。

「き、貴様らここに何を」

「あ、いやあのですね先生、これには」

こうなれば二人の間で論争、というより一方的に繰り広げられていた抗争は後だ。普段は成績優秀の文武両道、品行方正で全校生徒の模範と教師間で評判のいい彼女といえど、この場では旗色が悪過ぎる。

さてお手並み拝見、と背にしたフェンスに背を預けたまま傍観に徹していた蓮だが、もちろん魔術の露呈を見逃すほど彼も馬鹿ではない。事があまりにも收拾困難であるのなら手を出す、この手のある種繊細な事は彼女のほうが遥かに達者だ。先ほどまで襲われておいて妙な話ではあるが、これも一種の信頼である。

「はっ？ 何を言ってるのよアンタ——つて、ちよつと何を勝手にっ」

だが、その信頼している彼女が教師の前まで進み出ようとしたとこ

ろで、唐突にその歩みを止め、虚空に向かって独り言を放ったかと思えば、教師と凜の間、その空間で人間台の歪みが起こり、彼女らの間に一つの姿が浮かび上がる。

「だーから、お前の目は節穴かって言ったんだよ」

よれた金髪を撫で上げるようにして乱雑に後ろへ流し、髪留めのつもりか鉢巻上に捻った布で繋がった鬼の面を側頭部にかけるようにして結び留められている。衣装は今では歌舞伎か時代劇でしか見ない派手な着物を着流しであるかのようにゆるく羽織り、辛うじて襟が肩にかかっているというあまりにもだらしが無い、言い方を変えれば歌舞いた出立ち。

「お前さんが優秀なのは認めるけどよ。これはちよつと看過できないマヌケだわ」

見ただけで見間違えようが無い。まるで時代を間違えたかのような服装。言葉こそ現代のそれと聞き取れるが、直視しただけで魂を圧迫する存在は一つしかない。

つまり、この男が遠坂 凜の「サーヴァント」だ。

「よお、随分皮かぶるのがお得意そうじゃねえか。様になってやがるが、生憎、同類は近くにいれば丸わかりなんていう糞みたいにご親切丁寧な仕様だ」

凜のサーヴァントは現れたのが唐突なら行動そのものも破天荒。気安く目の前で困惑していただろう教師を前に、虚空からまるでセイバー剣を取り出したのと同じように古めかしい銃を一丁取り出し、「つつうわけで——いい加減正体見せろや」

躊躇うことなくその引き金を引いた。

「ちよ!?!」

「嘘だろっ」

英霊というのは基本的に過去の存在だ。例外もいるとはセイバーの談だが、それを考慮したとしてもあまりに常識はずれの行動だ。一般人に対する威嚇喝を遥かに超えた行為は主である遠坂も無論、離れていた蓮の制止が届くはずも無く、近距離で放たれた弾丸は女教師の脳天目掛けて穿たれる。

「……無論、その手の仕様など重々承知だよ。故にそこらの英霊程度、悟らせぬくらいには強度のある衣を纏っていたつもりだったが」

はずが、その凶弾はあろう事か女の目の前、額の数センチ前でまるで見えない壁に激突したかのように潰れていた。

「ハ、いくらコイツが魔術師以前に人間として抜けてるオマヌケだとしても、一般人が偶然あの場面で割り込むのはできすぎだろ。てかうチのコイツを馬鹿にしすぎだ」

「なるほど、忠告として受け取っておこうか」

銃を持たないもう一方の親指で後ろ手に主である凜を指すサーヴァント。認めているのだから貶しているのだからわからない彼と女の会話は、今度は状況に置いていかれているこちら二人を余所に進んでいく。

「しかし、事の分別を判断する前に手が出る野蛮の輩か。此度の三騎士は随分低脳な者が呼ばれたようだ」

「言ってる。それとも何か？ 手前の主人を無防備で晒しておいて？ 一から十まで全部御指示の通りに、命令なけりや何もしないのが忠君、とでも言う気かよ？ いつの時代だつつかう話だ。そういうのは野蛮じゃなくて、頓馬つて言うんだよ」

銃器を前に堂々と返答する女教師の姿は、先程まで屋上の光景に驚愕していた様子は影もない。その姿から荒事に不慣れな一般人とは程遠い、寧ろコチラ側なのだと窺えるが、少なくとも「自分の記憶」で彼女は一年前、自分がこの学園に入学した時期に新任としてやってきた教師だ。

「ちよ、何を勝手に、この人は紛れもなく」

「今回の戦いが『始まる前』から学校にいた？ で、それはいつからだよ正確な所」

寡黙であるため接する機会は少なかったが、まるで当時を知っているかのような歴史への理解。聞き手へ対する噛み砕いた解説と生徒の評判もいい教師だ。当然、幼馴染であり、クラスは違うが同学年の凜もそこは同じはずと彼女を窺う。

「やられた……いやでも、そんな、いつから」

「とう、さかか？」

だがそこにはまるで目も当てられない失敗をしたというように、彼女は蒼い顔をして目を覆う様に手を当てていた。

「と、まあそういう訳だ。『記憶改竄』なんざ別に珍しくもないが、コイツ等も含め、学校丸々『嵌める』とは随分派手な話じゃねえか」

つまり、一瞬でも思い出せたこの記憶は部分的なのか、それとも初めからなのか。蓮と凜が持つ彼女の記憶とは、その能力によって『作られた』モノだということ。

「フン。別に、半端に止めるのが性に合わんだけだ。陣を敷くのならば土台から、だ。地の利が無いのならそれなりにやりようもあるが、あつて損をする物でも無し、手に出来るのならある方が遙かに効率的だ。そして無いのなら、作りだせばいい。兵法の基本だろう」

瞬間、彼女の言の葉とともにその凄味が膨れ上がる。

とても慣れ親しんだそれは、もはや隠しようのないサーヴァント独特の気配と共に、魔術師が魔力を練り上げる際に魔力が可視化して巻き起こる風にも似ていた。風というには、幾分か規模が並はずれていたが。

「キヤスター、『魔術師』のサーヴァントっ」

七騎存在するサーヴァントのクラスの一つ。

「最弱のサーヴァント」とも称されるそれは、実際目の前にして、これが弱いなどと誰が口にできるのか。

蓮はこの戦いに巻き込まれてからアサシン、セイバー、そして凜のサーヴァントと、目の前のキヤスターを含め、既に四騎のサーヴァントを目にしたことになる。が、こと神秘、英霊が内包する魂の存在という領域で、これは別格だと一目見て理解した。

「うおっと、おつかねえおつかねえ。こりや藪を突つつきすぎたか？」  
「ちよ、アーチャー貴方ねっ」

力量ではない。

そも俊敏ならセイバーの方が勝っているだろう。筋力で言うならアサシンの方が、平均値で言えば凜のサーヴァント、アーチャーの方がバランスが良く質もいい。

正規のマスターとして「令呪」を与えられた蓮は、その姿をサーヴァントとして捉えればその大凡のステータス、何が不得手で何が得意かといった事が一目で把握できるようになっている。話ではその手のステータス可視化を誤魔化す能力を持ったサーヴァントがいる可能性もあると聞いていた。だが、キャスターが行った、行ってきたのはその存在を目の前にしてサーヴァントと認識させない、つまりは誤認。誤魔化す所の話ではない。

「いや、あの場で知らぬ存ぜぬで間抜け面晒して近づいてた方がやばかったら、実際。そこら辺、寧ろ感謝の言葉くらいあつてもいいんじゃないやねえの？」

凜はアーチャーに向かって何とか反論しようとしているが、実際あのままサーヴァントとして認識しないまま、その懐に入るのが現代の魔術師にとってどれだけ危険かなど論ずるまでもない。「最弱」と名打たれようと、それは英霊同士の話。科学が進み、神秘の薄れた現代の魔術師が彼女の足元に及ばないのは目の前にした今、肌で直に感じている。

そして、蓮と凜が現状の打開に二の足を踏んでいると、話は済んだかと一歩前に出てきたのは、問題の張本人であるキャスターだった。

「私としてはあのまま沙汰無しで終わらせてもよかったのだがね。貴様が出張るならそうもいくまいよ」

「あら、この状況で随分余裕ね。私みたいな小娘相手にするまでもないって言うつもりかしら。こっちは二人掛かりで潰してあげても良いのよ」

「強がりはやせ。その小僧が愚かにも己のサーヴァントを近くに從えてない事は今朝から把握済みだ。無論、令呪にて召喚する手もあるが」

させると思ふかと問う彼女に、振じ伏せるだけの答えをこちらは持ち合わせていなかった。それ程までにキャスターの威圧は精神的にも、物理的にも畏怖を抱かせるものがある。

英霊というなら凜の前に彼女を守るように立つアーチャーがいる以上対抗は出来る。出来るが——おそらくその選択を彼女が選ばな

いのは蓮がその背後にいるからだ。

遠坂 凜とはそういう人間だ。

他人に厳しく、自分に人一倍厳しいが、故に努力する人間は認めるし尊重する。そして間違えた事を殊更嫌うが故に、目の前で救えるものを見捨てるという行為を容認しない。無論彼女とて魔術師だ、救えないモノがこの世にあることぐらい理解している。だから救える手段がある限り、可能性がある限り彼女はあきらめない。逆を言えばそれを切り捨てる時、ことは既に手のつくしやうがないという事だ。

つまり、キヤスターが威嚇をしつつも中々攻勢に出ないのはそういう背景がある。距離を置きながら、彼女は蓮という存在を強調する事で所謂人質としている。正体を欺き、近くにいたという強みが此処にきて悪い形で型にはまっている。

「いい加減にしろよっ」

自身が彼女の足かせとなっている。

気に食わないと言いながら、こんな所で魔術師らしくあれない。昔からそうだ。彼女は曲がった事が嫌いで、生粋の「魔術師」としてあろうと振る舞っているのに、根っこの部分で人間らしさを捨てきれない。

そういった「遠坂 凜」という存在が、「衛宮 蓮」にとっては酷く眩しくて、同時に相容れないのだと今日まで言い聞かせてきた。

だから、

「ふざけるなよ。俺は——っ」

今もお前に守られるほど弱いつもりも、そうであつた事実も認めない。見くびるなど右手に宿った「令呪」を凜の制止を無視して行使しようとして——蓮の頬を魔力の籠った矢が頬を薄く裂いた。

「逸るなよ小僧。この場に『三騎』のサーヴァントが揃うのもさぞ見物だろうが、そうなれば激突は不可避だ。やられてやるつもりは更々ないが、ソレはそちらも同じだろう。さりとして方に一つ、という言葉もある。よってそうなる前に私から一つ、提案がある。ことに及ぶのは別に話を聞いてからでもよからう」

頬を伝う血の暖かさが、逆に頭に上っていた血を下げてくれた。先



ほど、キャスターは令呪の行使をさせると思うか、と挑発したばかりなのだ。今のようにならぬに考え無しで使おうものなら、恐らくキャスターは容赦なくこちらを狩りに来きただろう。

「ふむ。どうやら、聞く気にはなってくれたようだな」

キャスター、魔術師というものは本来直接の戦闘を不得手とする。よって彼等にとっての土俵とはこうした論戦、つまりは計略謀略で考え、備え、相手を嵌めて貶める事にある。本来ならばその「交渉」の席に着く事は悪手でしかない。

キャスターを相手にするのなら、通常その手管に乗る事が無いよう、乗せられる暇も与えず迅速に切り捨てる事が必須だ。

「さて——」

「っ」  
悪戯に時間を与えれば不利になるのはいうまでもない。そうと解っているだけに、現状の歯痒さに奥歯が軋みを上げた。

何を言う気なのか、騙されるかと身構えるこちらに対し、

「こちらの提案は単純明解だ。此度の聖杯戦争において私は勝利を“辞退”する。故、今後の接触一切を切り捨てたい」

キャスターが提案した物は、聖杯戦争に呼ばれたサーヴァントとしてはあまりに異質な、常道からそれたものだった。

無論言葉だけでないと魔術による契約を示した洋紙を投げてよこしたソレは、念の為に受け取ったアーチャーから見ても、安全を確認してから目を通した凜と蓮も共通してこちらに有利な内容ばかり。啞然としたこちらを余所に彼女は更にこちらの斜めをいく言葉で蹂躪する。

「正確には、私の願いは既に一度叶っている。未完ではあるが、此度の報奨である“聖杯”について、私は理解しているつもりだ。その為、アレに私の望みが叶えられるとは欠片も思えん」

まるでその中身を見てきたかのように語る彼女の言葉に圧倒され、事実を咀嚼しようと必死になっているこちらに対し、その時、蓮の前で俯いていた凜が一步、キャスターに向かって歩を進めた。

一步、凜がキャスターに向かって近づくと。

その歩みは警戒という彼女の心情が現れるようにゆっくりとしたもので、それだけにキャスターの発言は異質なものだ。

曰く、彼女は「聖杯」を求めていない。勝利を放棄するという。

英霊と言えどもそれは人。故にその願いも千差万別だ。

しかし、こと冬木の聖杯戦争に呼ばれた英霊、「サーヴァント」という器に応じた彼女等は事情が異なる。方に一人は無欲な英霊、俗にいう徳の高い聖人もいるだろう。だが、聖杯に呼ばれるものは例外なく己が焦がれる願いというものを持っている。それが即物的であるか、観念的であるのかは置いておくにしても、願いのない英霊という者はそもそも聖杯が選ぶ基準から外れる。

冬木の聖杯は「万能の願望器」と呼ばれるほどの完成度を誇るが、それはあくまで人が作り出した物。人工物として、越えられない壁というモノが存在する。無論、人が作り出した物としては破格である事は疑うまでもない。故に本来サーヴァントなどという括りに収まる筈の無い英霊達が「奇跡の恩恵」、「勝者に約束された栄光」を旗に応じる。それがサーヴァント召喚の根幹だ。

よって、願いが無いなどのたまう輩は、まずもって隠し事をしていると言外に宣言するようなものであり、休戦、停戦を申し出る為に提言するにはこれほど相手を馬鹿にした言葉もない。

そう、常識では。

「貴女……「聖杯」について知っている、って言ったわね。聖杯に呼ばれた英霊である貴女が」

本来、聖杯の召喚に応じた英霊には現代との摩擦、弊害が無いように最低限の知識が与えられる。だがそれは最低限であるが為に、聖杯戦争という儀式の根底にかかわる仕組みが丁寧に教え与えられる事はない。聖杯戦争という、もともと大がかりな儀式を円滑に進める為、設けられた補助装置程度のものだ。

「ああ、その言葉に嘘偽りは誓ってないと答えよう。仮にも、この身は『魔術師』の英霊として呼ばれたのだ。如何に過去に作られた高度な秘術であろうと、それが『魔術』によるものなら探りようもある。まあ、流派や式といい節操のなさには些か骨が折れたがね」

「なるほど、お手のモノという訳ね」

ならば『キャスター』はいえ、その知識は本来セイバー達と大差がないはず。だがその言葉を受けた凜の表情は得心が言ったという表情。こちらの挙動が目についたのか、さつき見たことを忘れたのかと小突かれ、そこで俺はようやく思い至った。

先ほど、正確にはその時まで、自分を含め凜も、この学園の人間全員の認識を悟られないようずらし改竄していたという魔技を。

「いや確かにそうだけど——ってオイ、それを知っててあいつの言葉をうのみにする気かよっ」

「だからよ。そもそも、彼女がその気ならアーチャーが『確認』を取ろうとした段階でアクションを起こしてないければおかしいのよ」

確かに凜の言葉は筋が通っていた。

聖杯戦争に呼ばれる英霊の中で、とりわけ直接戦闘を不得手とするクラスが彼女だ。いくら現代の魔術師相手にアドバンテージがあり、認識において優位に立てるとはいえ、魔術師同士がぶつかっている現場に態々姿を現すというのは少々疑問が残る。

もし、この学校内という空間での戦闘が、彼女にとってその条理を踏まえた上でも覆さなくてはならない事案だとしよう。仮初の役職を悟らせないためか、この学園事態に何か仕掛けを施している最中なのか。だがそう考えれば考えるほど、彼女自身が表に出るといのは道理に合わない。例えば、自分が彼女なら暗示なり使い魔なりで第三者を介入させる。姿は悟らせず裏からこの衝突に待ったをかけ、疑わせあつてこの場での戦いをうやむやにさせるといった具合に。

だからこそ、今ある情報でキャスターの言葉を信じるには早計だと感じた。

「それで、こちらの話には納得してくれたのかな」

尚も進言するこちらに対し、凜は後ろ手で『黙れ』とサインを送つ

てくる。

彼女は人の話を聞かない類いの人間ではない。寧ろ相手の意見は確りと聞かし、尊重する。無論、それが納得できなかったり理にそぐわなければ、完膚なきまでに真正面から粉々にするのが彼女だ。昔からの付き合いで、こういった合図を出すとき彼女は決まって譲れない、或いは既に結論が出ているときだ。故に、何か活路を見いだしたのだと信じて、自分はその好機に備えるよう、いつでも令呪を使えるよう気構える。

「いいえ。悪いけど、そちらの提案を飲む前に、一つ質問させてもらえるかしら」

「質問を質問で返すほど無駄な事もないと思うが、いいだろう。仮にも生徒『だった』者の質疑だ。聞こう」

提案に対する交渉の席につくための条件。流れとしては自然な凜の言葉にキャスターもその思惑組んで席についた。

「貴女が知っている。いえ、『見た』聖杯の中身についてよ」

「ほう。例えば、どんなものが見えたと思う」

「……そうね。例えば、酷く陰った、人型の、蜃気楼の様な何かとか」その情報は自分の知るどれともつかない言葉の羅列だった。そもそも聖杯は願いを叶えるだけの『奇跡の器』のほずで、彼女が言葉にしたような不純物などセイバーからは聞いていない。いや、彼女も聖杯によって呼ばれた英霊で、その知識とは召喚の要であり、現世に繋ぎ止める聖杯によるものだ。知らないことがあっても不思議ではない。

ならば凜の話すそれが時間稼ぎの戯言でもなく、『御三家』の一つである『遠坂』のみしか知らないはずの確認であるとしたら、

「ああ、その『影』もいたよ。私が見たのは全部で三つの影。男系と思われる二つと、女系と思われる影が一つ。本来、無色である魔力が貯められた聖杯としては些か以上にこれは異常な事態なのだろうが」  
「なるほど、ね。やっぱリーリーいいわ。受けましょう、一先ずは」  
「って、おい信じるのか!?!」

勝手に情報を引き出すための交渉戦なのだと思いきや、たった一つ

の質問であつさり引き下がった凜。それには流石に待ったをかけずにはいられない。

思わず肩を掴みかかろうとするこちらに対し、彼女とこちらを隔てる様にして、その間へ鬼面とかぶいた出立の男が割って入る。

「つ、オイお前！」

「よお大将。冷静そうな成りでどうして、中々にあつついねえ。まあ気持ちは分かるけどよ」

だから落ち着けよ、という風に“こちら”を向いているアーチャー。彼は飄々とした態でその手もう一丁の銃を取り出し、片手間であるかのように曲芸よろしく遊んでいる。

あまりに不謹慎な行動。

仮にもこの状況の引き金を引いたのは文字通り彼なのだから、積極的には言わなくとも、せめて真面にキャスターと向き合うべきだろう。

——と、そこでふと思いついた。

アーチャーはこちらを向いている。つまりキャスターとも、キャスターと向き合う己のマスター、凜にも背を向ける形だ。

本来なら不真面目ですむ筈もない彼の姿勢はしかし、銃も遊ぶ手と反対に握られた一丁目の銃は、まるで“後ろが見えてる”かのように正確に、キャスターへとその銃口を合わせていた。

「お？ なによ。こんななりでもれつきとした銃だぜ。それとも、そんなに物珍しいモンかね」

からからと笑う男。その上体は不動ではなく寧ろゆらゆらと留まらない。仮に背面を狙う事が可能としよう。だが本来無理な態勢で、それも正体不明の人外相手に取る様な構えではないだろう。

「アーチャー。頼むから話を脱線させないで」

「へーへー、仰せの通りに」

己が主人の言葉に引き下がる旨を承諾した彼だが、その瞳はまるで子供が新しいおもちゃを見つけたかのように、ある種嫌な予感をさせる色を湛えていた。

「衛宮君には、後で詳しく話すけど彼女が言う言葉には信憑性がある

わ。少なくとも、彼女はこちらが知っていること同等か、それ以上の何かを持つてる可能性がある」

「では、この協定は成立、ということでしょうか」

その視線から引き戻してくれる凜の言葉に素直に従い、アーチャーからその向こうに視線を向けると――戦闘意思の放棄のつもりだろうか。キャスターが胸の前で“印”の様なモノを切ると、途端に周囲の空気が“軽く”なった。

戦う意思はない。とは言っていたが、交戦できるよう幾重にも糸を張り巡らせていたのだろう。

今となつてはその術の詳細は知れないが、間違いなく自分の様な二ワカ魔術師には理解の及ばない神秘の類。それは後ろからでもはっきりとわかるほどに握りしめられている凜の手を見れば大凡察せられた。

「ええ、少なくとも学園、この周辺での戦闘なんてこつちも望むところじゃないわ」

故に、誠意は魅せたと目を閉じる余裕すら見せて踵を返すキャスターに、

「なら――」

「待って」

すかさず凜は待ったをかける。対する呼び止められて振返ったキャスターの表情は、興が乗ってきたという様に少しほころんでいた。

「さっきの話、この件に関する確約をくれないかしら。どうせすぐ用意できるんでしょ？」

「なんとも、目端が利くようだな」

「当然でしょ。大昔はどうか知らないけど、少なくとも現代で口約束なんてあつてないようなものよ。それも魔術師である、特にアンタみたい“超”が付くほど凄腕の魔術師相手ならね」

やれやれと首を振りながら、どこからか古めかしい羊皮紙を取り出したキャスター。宙に浮くそれに、彼女が筆を走らせるように横へ手を滑らせること二順、それで工程が完了したのかこちらに向かつて放

り投げるようにして寄こす彼女。

疑う事無く紙を受け取った凜の横から除いたそれには、まるでお手本であるかのように達筆な字でびっしりと文字が書かれた。それも漢字で、態々だ。

「まあ、こちらの目的に偽りは無い。実際問題、こんな昼間から騒ぎ立てるようでは、正直先が思いやられると思っただころであるし。承諾に感謝しよう」

下の方に唯一朱色に浮かぶ紋様から察するに、これが契約文、互いに不戦の約束を交わすためのものだという事は一目瞭然だった。

「ええ、こんな聖杯戦争序盤から三疎みなんて、他の陣営にどうぞ見てくださいっていう馬鹿のやる事よ」

キャスターの言葉に当然だろうと返しながら、しっかりと内容を確認する凜。

達筆すぎて自分には蚯蚓がのたくった模様のように見えるそれも、学園きつての優等生で在らせられる彼女の前では大した障害では無いらしい。

それもあれよあれよという間に最後の行まで確認が終わったのだろう。不振の意は拭えないが、それでも納得ができる内容だったのか彼女が一つ頷く。そして手に魔力を通し、立てた人差し指へと淡い紋様が浮かんだ。それは遠坂の家紋を現したのものなのか、それとも彼女独自のものなのか。契約という物をもっと仰々しく行われるものだと思っただけに、目の前であっさりと行われるそれには少々拍子抜けするが、学園で戦闘など断固反対である立場からすれば異を挟む余地などない。

朱色に刻まれたキャスターのそのの下に、凜がその紋様を記そうとして――

『——いいや、違うね』

9 発の銃声と共に、彼女が今まさに押そうとしてた契約書が粉微塵に吹き飛んだ。

『馬鹿は手前等みみたいな腑抜けのことだろ』

「どこからっ」

独特のエコーが掛かったように拡声された音は音源、襲撃者の位置を感知するのに混乱を引き起こす。

響いた銃声は9発。

内5つは反響していた為判別がつかなかったが、後の4つは傍にいるアーチャーのものだと解る。

彼は即銃を構え、主を守るように後ろに庇うようにして周囲を軽く見渡しているようだ。自分もキャスターもそれに倣い、屋上の入口へ背を向けるようにして待避する。

先程まで敵対しておきながら些か考えが甘い気がしなくもない。が、仮にも休戦協定を結ぼうとしていたのだ。それに、この襲撃者の目的が誰であるのか読めない以上、いがみ合う必要性は低い。

そしてアーチャーを前に皆が周囲を警戒する中、“声”は空から降ってきた。

「折角の敵を目の前に見逃すとか、お前ら揃いも揃って玉無しかよ」

癖のある青髪。

記憶にある頃のそれより目つきが数段悪くなった人相。

昔から放浪癖にサボり癖、非行が目につく奴だったが、見ないうちに腕に刻まれた派手なタトゥーが袖を剥いだだらうコートの肩口から覗いている。

「シンジ!」

旧友、悪友。

そして親しい後輩である少女の“馬鹿”兄。

「よお、久しぶりだな“衛宮”。家、えらく派手にぶつ飛んでたけど元気してるわけ?」

その手に握られた“砂漠の鷹”を掲げ、こちらを見た彼は何食わぬ顔で日常的な挨拶を交してくる。確か、彼が撃った弾丸の一つ一つは命中と同時に引き裂かれた契約書を除き、ご丁寧に4人へと放たれていたはずで。アーチャーが対処していなければキャスターはともかく、凜と自分は怪我をしていたかもしれない訳で。

「お前、なんでっ、こんな所に——」

「あ? なんでって、おまえそりゃ」



コートの先、大きさが明らかに体格以上の為にダボダボなシャツの下。顔を覗かせていた包帯の一部、鎖骨のあたりが淡く、だが確かに模様を描いて輝きを放っていた。

「マスターに、なったからに決まってるだろ。こんな面白そうな祭りだ。まざらない方がどうかしてる」

「嘘、でしょっ、なんであんたが令呪を」

凜と共に啞然としながら、荒れた屋上に立つ「間桐 シンジ」を確認する。彼女と自分とでは驚いている部分が違った気がするが、それでもこの男がマスターの一人であるという事は確定的で、衝撃を伴った。

だが、その胸で輝いた令呪が放つ魔力の波長を見間違える筈がないし、凜が見誤るのはもつとない。

「つうわけでさ。参戦、させてもらうから——よろしくたのむぜ」

だから、銃口を再度こちらに向けて無造作に発砲するシンジの言葉を受け止めるより早く、横にいた「彼女」が動いた。

そこでようやく、これが「殺し合い」だという事を、「衛宮 蓮」が忌み嫌う非日常の渦中なのだと思いついた。

悪友の、あまりにもと言えばあまりに予想外な登場。

凜との“一方的な”戦闘によつて荒れ果てた屋上、そこへ空から降ってくるという、派手と言えば派手で、ある意味自己顕示欲の強いシンジらしい乱入ではある。

大切な後輩の愚兄であり、中学から顔見知りであり腐れ縁。だが、今日の前で銃を突きつけ、あまつさえ乱雑無頓着に発砲する姿はどれも自分が知るどの彼とも当てはまらない。

そして、その理解を越えた光景に、蓮はただただ眺め、反応が遅れていた。

「……随分遅い登校だな間桐。今日の授業は終了しているが——補修希望か？」

対して、放たれた鉛の塊を苦も無く防いだのは、キャスターだった。アーチャーの時と同様、弾丸と此方側の間にまるで見えない壁が設けられたかのように停止してる。

現世の魔術師相手から来る余裕か、彼女なりの冗談のつもりなのかは不明だ。それも随分と殊勝な心がけだなと白々しく問うキャスターの言葉では内心を推量するのに材料が乏しいというのもある。対し、攻撃が防がれたシンジは気にした風もなく、どこ吹く風という様に、寧ろキャスターの技を興味深げに眺めていた。

「冗談やめろよ。今更センサー面もありえないね。それともなに？ 聖杯戦争のイロハでもご教授してくれるわけ？」

「戯けが。それが教えを乞う者の態度だというのなら、及第点にも遠く及ばん。聞く気があるなら、まずそれなりの態度というものがあるだろう」

論ずるに足らんと印をきる様にして虚空に指を走らせるキャスター。その切っ先が淡く赤い輝きを放ち、彼女の周囲を覆う様に模られた鳥を模したと思われる火の玉が翼を広げて滞空していた。

「ま、そうなるわな」

「多少の手心は加えるが、どのみち、先に仕掛けてきたのは貴様の方だ」

その数実に二十あまり。

一息に作られた炎弾は蓮の目から見ても、凜の目から見ても、呪を紡ぐでもなくただの一工程、腕を振ったアクションだけで顕現させたことから、彼女の魔術の腕を推量するのは十二分すぎる。

同じ一工程、詠唱を省いた術なら凜の「ガンド」とて同じものだが、これはその質も速度も練度も軒並み彼女のそれを凌ぐ。

だが、それを前にして魔弾に晒された彼は、

「ハッ、そんなモンしてくれなんて頼んだ覚えもないね」

まるでその脅威が無いも同じだという様に薄ら笑い、銃を握っていた腕と反対の手を振り上げると——一条の突風が屋上を襲った。

あまりの狂風はその場に居合わせた皆の視界を一時奪うもので、あれた屋上の埃どころか小さな瓦礫をも巻き上げ、凜達の前に位置していたアーチャーが飛来する飛礫を叩き落としていく。

ようやく強風が収まり、目を保護する為に上げていた腕を下ろすと、退治したままのシンジはまるで悪戯が成功した子供のように顔を笑みに歪め、残る二人のマスターは素早く状況を把握に努めた。

「っ、なに、今の」

結果、弓兵を除くマスター達が目にした光景、視界を取り戻した蓮達の前に広がるソレは、キャスターの消失を明示していた。

「うそ、だろ」

「さっき、先生」がご丁寧に言っただけだ。無いのなら、作り出せばいい。数で劣るなら状況が劣勢っていうなら、有利な状況を作り出せばいい」

まるで自分にはそれができると自信たっぷりと言い放つシンジ。だが、現状を創り出したのが彼の魔術、と考えるには材料が足りない。おそらく、いや、十中八九彼が連れてくるサーヴァントによるものだろう。

「なら答えは簡単だ。弱い奴から潰していく、確実に。多人数戦の基本、って言うだろ」

いくら彼の家が魔道において名家とされているとしても、その腕が魔術師として英霊の枠にあるキャスターに及ぶものとは到底思えない。だがしかしだとしても、その絡繰りを目で追えなかったのも事実だ。

「——へえ。中々面白い持論持つてるじゃねえかニイチャン」

故に、この場でそれを把握していたとしたら目の前でシンジと同じく手に持った銃を肩に担ぐアーチャーしかないわけ。

「持論も何も、実際そうだろ。奇襲が潰されたんだ。なら次の手を打つだけさ」

「ほーお、いうねえ。まあ、でだ。一つ聞きたいんだがよ。状況を作り出すってたなら、お前さんには俺とキャスターのどちらかを優劣つけたってことになるわけだ、が。参考までに聞かせてくれや。俺とあいっ、どっちの方が強いと思った」

「知るかよバーカ。強い弱いなんざ敵に聞いてどうするってんだよ」

ニヤついた顔で問いかけるアーチャーのそれは余裕の表れだろうが、対するシンジの答えは先程までの凜や蓮に講釈を垂れていた上から目線そのままに、寧ろサーヴァント相手に小馬鹿にしている節すらあった。

その様子が気に入ったのか、力量を比べるまでもなく格上の存在に態度を変えないシンジの様子に、アーチャーは一本取られたというように顔に銃を握ったままの手を当てて豪快に笑った。

「クク——ああ、たしかにな。じゃあ質問を変えるとするわ」

顔に当てていた手を軽く持ち上げ、銃把でこめかみを搔くようにして向き直る。

「あ、なに？ さっきのキャスターに使った手とか聞きたい訳？」

「そんな小難しい事じゃねえよ。第一、あんなもん摩訶不思議でも絡繰りでもねえだろ」

尚も挑発するように軽口を叩くシンジ。その姿をまるで懐かしむようにして晒うアーチャーは、次の瞬間酷く聞き取り辛い言葉を口にした。

「お前——■■感って知ってるか？」

ここが屋上であり、開けた空間で風が音を邪魔したとかそんな柔な障害ではない。もつと根本的に、例えばそれが異国の言葉と母国の言葉が混濁した耳慣れないモノであるかのような、理解するという工程を挟ませない溝がそこにはあった。

「は？ 寝言いつてるなよ。オツサン辞書も開いたこともないのかよ」

蓮も、横に立つ凜もアーチャーが放った言葉に困惑している中、対面しているシンジはどういう訳かその単語を読み取ったようで、その無いようにこれまた論ずるまでもないだろうと切り捨てる。

「いい答えだ。そうだよその通りだあるわけねえだろ。そもそも、そんな胸糞悪くなる『概念』なんざ誰が受けるかよおことわりだ」

そして、明らかに小馬鹿にされたのはアーチャーだというのに、彼はシンジの答えが堪らないというように身を振り、笑みを深くして哄笑する。

だが、奇怪な言葉と行動をとっていたとしても、今この場を支配しているのは間違いなく彼だ。真剣味にかける態度であろうと、彼が『戦闘態勢』を崩していない以上、闇雲に割って入るのはむしろ悪手だと必死に自分へと言い聞かせる。

そして、

「まあ、いい加減探り合いも面倒だ。キリもいいだろうし？ さくさくいこうや——ってわけで、ひとつ派手に立ち回れよ、餓鬼」

アーチャーがようやく、そして一息もつかぬ間に攻勢に転じた。

刹那、両手に構えられた銃から撃ち出される十もの凶弾の群れ。対してシンジが持つデザートイーグルは弾薬にもよるが、通常は打てて七く九発。それも反動等を考慮すれば、連射できる腕前があったとしても、まず打ち返すのも不可能な数の暴力。

加えて、避けるにしても隙なく次弾を放とうと構えるアーチャーの姿がある。この屋上という距離的制限がある舞台、初速で到達可能な速度の銃撃戦を選択した時点で、シンジが『アーチャー弓兵』に勝てる道理はないのだ。

そう。本来は無い筈が、不利な筈のシンジは焦るどころか張り付け

た笑みを崩す事無く、その弾丸が目前に迫る瞬間まで微動だにしない。

「——ですから、あれほど挑発は程ほどになされるよう提言したので  
す」

故の回答だと示すように、次の瞬間、突如乱入した小さい影が、あ  
ろう事か十もの凶弾を全て弾き落としていた。

まるで初めからそこにいたかのように表れた乱入者。サーヴァン  
トの実体化だろう手段で姿を晒した影の正体は、白装束に身を包み、  
その丈を超える長槍を携えた童子だった。

サーヴァントの実力を考慮する場合、その見た目というもののほど当  
てにならないモノはない。

宝具しかり、固有スキルしかり、はたまた外見そのものが偽装で  
あったりする。サーヴァント、英霊とは文字通り「英いでた霊」だ。  
先ほどの技はキャスターを消したのか飛ばしたのか、いずれにせよそ  
の絡繰りは目の前の童子のものだと考えていいだろう。ならば、見た  
目相応の実力だと勘定するのはあまりにも危険であり、蓮も凜同様、  
マスターとしての「目」をもって把握できるステータスだけでもと  
状況把握に務めようとした。

そこへ、思慮するという言葉を知らないともいう様に、目の前に  
現れた彼の「従者」へと近づき、戦闘中にもかかわらずその手を童子  
の頭へと無遠慮に、軽く叩くようにして乗せた。

「ああ、悪い悪い。相手もまさかこんな単細胞だとは思わなかったか  
らさ。助かったぜ、「ライダー」」  
「なー」

声を漏らしたのは、恐らく凜のもの、だったと思う。

サーヴァントのステータスを自ら明かす。七組という多人数で起  
こす殺し合い。それは僅かな情報さえ晒せば命取りになりかねない。  
自身が引き当てたサーヴァントがいかに強力だろうと、相性や戦い  
方、それこそ渡った情報によって弱点を突かれることもある、名が知

られているのなら、本来強力なスキルや宝具にも対策が取られることもある。つまり、戦況が覆らない保証はどこにもない。

故に、今シンジが言ったように、自身のサーヴァントのクラスとはいえ、『長槍』というその『騎乗兵』らしかぬ武器と武錬を見せた童子本来のクラスを明かすのは下策だ。

「おっと、そう深く考えるだけ無駄だぜマスター。この手の相手パカの考える事なんざ相場が決まってる」

故に理解できないと、何か考えがあるのかと相手の裏を読もうとした主を、従者は軽い調子で待ったをかける。

アーチャー曰く、

こういった手合いは己の勝利を疑わない。

彼我の実力差を見て、必ず相手を軽んじる。

自己こそが中心で、その他すべてが舞台装置であり装飾だと。

「つまりまあ、アンタの尺度で凶ろうとするだけ徒労だ。さっきの割り込みだって、どーせ面白そうな催しに自分だけ除け者なのが気に喰わなかったとか、大方そんなもんだろうしな」

人生という物語が一つのエンターテイメントだとしたら。いや、その価値観は『魔術師』である凜も、『魔術使い』である蓮もよく理解できる者だ。

魔術師に限らず、自己が認識する他との繋がりがこそが『世界』であり、認識し理解するという事はまず己という核がある事が大前提だ。故に自己が中心という言葉は聞こえが悪いが、己に目指すべき目標なり、夢を持つ人間というのは大なり小なりそうした性質を持っている筈だ。

例外は、まあいるだろうがここでは置いておく。世の中、人の思想などそれこそ千差万別。その中には確かに真逆の、自己を犠牲にすることを厭わない人間というものもいるにはいる。だが、ここで重要なのはアーチャーが一目で評価した『間桐 シンジ』という男の人間像。「へえ、言ってくれるじゃん。そこまで言うからには、相当自信があるんだろうね」

そして思い返せば、いや、記憶を辿れば、ここにいる二人が知る『

間桐 慎二〃と、目の前の 間桐 シンジ〃とでは何か見過ごせない差異の様なものを感じた気がしたのだ。

「おうよ。誰に向かって言ってるって話だ。人生俺主役。手前から見てコッチが脇役だろうと、逆もまたしかりってのはあたりまえだろう。ついでに言えば、格もえらく違うぜ?」

だが、その摩擦の正体を探ろうとするこちらを余所に、アーチャーとシンジによる挑発の賭けあいには途切れるどころか熱を上げていく。

アーチャーはともかく、シンジという男は蓮達の記憶にある彼と誤差があるろうと、沸点が高くないだろうという事は容易に繋がるし想像できた。

対面するアーチャーもそれを勘定に入れていないわけがないだろう。寧ろ獲物がかかったと、楽しげに笑いを零し、次の瞬間にはその喜色一色だった顔を僅かに引締めた。そして凜が命ずるでもなく、挑発を続けていたアーチャーは肩に担いでいた銃の照準を敵対する主従へと向ける。

「来いよ。手前みたいな餓鬼程度、この大舞台じゃ役不足だつてことを教えてやる」

その言葉で決定的だった。

「——っ、やれライダー!!」

「ハ！ オラ行くぜ!!」

無言で主の言葉に従い長槍を手繰る 〃ライダー〃を相手に、アーチャーは武器の間合いを活かし、先手となる号砲を鳴らした。

屋上で撃剣ならぬ号砲と疾風が吹荒れている頃、建物から離れた場所、所謂中庭で、一人見上げていた彼女。

「なんとも、上は随分と派手に楽しそうなものだな、こちらの気も知らず」

まるで今まさに繰り広げられている光景を目にしているかのよう



な眩き。だが、彼女は真実その激突を目にしているのだろう。

呪術的に手が及ばない、神格化された聖域や結界の類なら兎も角、ここは彼女が時間をかけて整えた謂わば“庭”の様なモノ。例えばこれだけ離れていようと、仕掛けた場所に限り、この街の範囲くらいであれば離れていても事細かに委細を知れるし、今彼女がしているように周囲に他人の干渉を遠ざけるような呪を張り巡らせることも可能だ。

そして、その中であるのなら、例えば常人には摩訶不思議な神隠しめいた“移動”で屋上から中庭へと運ばれたとしても、キャスターにはそれが誰によつて引き起こされたのかも承知だ。

「なあ、お前もそう思うだろ。随分と、駒使いの荒い主人だと見たが」  
故に視線は固定しない。

それが何処にあるのか、身を潜めているのか。そしてその術を見て、理解した為の行動だ。投げかけた言葉も屋上に戻るでもなく、そしてソレが障害になると想像できればこそ。手持無沙汰もあつてどうしたものかと問うた言葉に、キャスター自身返答を期待していたわけではない。

「……だんまりか。まあ、私としてはどちらでもかまわんが」  
だが、こうまで予想道理だと笑いを通り越して脱力してくる。

彼女が凜や蓮に戦闘の意思がないと言った言葉に嘘偽りは無い。この地で“聖杯”と呼ばれる聖遺物に興味がない、という言葉も嘘ではない、が、正確には事情が異なる。

それは何をしても土台手の施しようがないという達観ともいうべき諦めだ。

彼女が聖杯について知る知識は、恐らく、現状この地にいる英霊や魔術士全てを合わせて、誰よりも核心に触れていると自負している。故に、だからだ。

この程度、今まで見聞きした英霊や、マスター達の“魂”程度では、キャスターが望む筋書きには程遠い。

こんなものかという失望と絶望が、何より無力であるという己に対する自責の念が彼女の手足を縛りつけていた。

勝利になど興味がない。

この戦いに意味、意義など見いだせない。  
所詮茶番でしかあるまいと。

だから、この場で彼女が印を切ったのは学園で不逞の輩を野放しにするのは困るといふ、仮とはいえ教師という役職からのもの。彼女自身の方針としては指針にするのには弱く、その為、この行動は本当に、単なる気まぐれでしかなかった。

『神火清明——』

いつの間にか握られていた符が放たれ宙を舞う。

一、二、三と、その数は十に迫り八方へと陣を組、中央の起爆と共に“爆ぜた”。

『——唵』

爆炎と共に巻き起こる衝撃は大気を焼き、木々をなぎ倒し、一瞬で中庭を荒地地にかえる。学園での戦闘を望まないと口にした人間の行動とも思えない圧倒的な暴力。

だが、彼女も中々にそつがない。

焼かれた爆心はもちろんの事、周囲には野次馬どころか小動物の影もない。文字どおり無人であり、そこに立つのは術者であるキャスターだけだ。

「これでもそれなりに愛着があるのでね。あまり派手に“焼く”のは気が引ける。できれば早々に姿を見せてくれると助かるが——まあ、当然そうくるだろうよ」

憂う様な言葉に対して、行動がここまで伴わないというもののかと疑問の声が上がりがさうだが、現状ここは彼女の手によって“人”はいない。

そして当然、彼女が狙ったのはここへ運んだ“者”をあぶり出すこと。少々手段は荒々しいが、そうした隠れ潜む族に火責めが効果的なのは古今東西不変であろう。

現状が無人のままだという手応えの薄さは相手も意地を張っているのか、この程度では足りぬという強者の自信なのか。いずれにせよ、不足だなどのたまうのならその腹が満ち爆ぜるまで馳走するだ

けど、彼女は間を置かず思考を切り替える。瞬間的な面の破壊が及ばぬのなら、逃げ道を塞げばいいだけだと、彼女は新たに符を取り出し――

「アチ――ア――チツアチチチ!!」

まさに咒として放とうという瞬間、何もいなかった筈の空から突如として真っ白い物体が落下してきた。

「これはまた……」

「ちよ、爾子ニコのフサフサなお毛々がちりちりのまっくろくろになってるですよ!」

訂正。一部彼女が放った爆炎の余波の影響か、真白の毛並の一部を黒々と変色させていた。ついでに何やら一目見て喧しいと解るほどの獣で、人語を話すという異形だった。

それは、犬、なのだろうか。

イヌ科イヌ族――と彼女の記憶が習得している現代の動物の「知識」と照らし合わせてみるが、過去現在において、熊といっても過言でない巨体とそれに釣り合わない程大きな頭部を持つ犬など該当しない。無論、神話や民話の物語の産物だというのなら話は別だろうが、コレを生物と判断していいものか非常に悩むというのがキャストアの感想だ。人語を解し話す動物など、極端に言えば気味が悪いというもの。彼女がイヌに類する物ではと思ったのも、先程ソレの走りを見近で見ていたからに他ならない。

「随分と、大きな毛玉が隠れていたものだな」

だから判別もなんと称していいのかも不明で、唐突に姿を現して転げまわるといふ、あまりにも緊張を粉微塵にする光景。現状を指しての思わず口をついて出た呆れの声だったが、どうやら目の前の犬――と呼称――は大層御立腹のようだった。

「かっちーん。爾子は毛玉じゃないですよ。ちゃんと爾子って名前がありますの!」

瞬間的に、キャストアは頭を抱えなくなった。いや、悟ったというべきか。

「なんともこれは」

「コレ」は恐らく言葉を交わせたとしても、意思を通わせるなど恐ろしく困難な苦行だと。

「あ、なんですその胡散臭い目は。爾子は由緒正しい『式』ですよ！ そりゃ、今はチンチクリンのへっぽこが主人ですけど、あんなワカメなんて内心コレぽっちも、ふさ毛の先も認めてねー、ですよ！

丁禮ていれいが従うって言うから、爾子もしかたなく——」

なにより、この喋り出したら止まる気配の無い様子など最たるものだろう。端的に言って、脳は足りてるのかと疑問に思うレベルで残念な言葉の羅列が飛び出している。

「おい」

「わふん？」

屋上でかつてに喋りだし、嬉々として誇示したシンジとは、別の意味で色々足りていないと言える。見た目は犬熊の態だが、頭文字に「馬」の一字を思い浮かべたキャスターは悪くないだろう。

「先ほどからよく口が回る性分のようにだが……少しは隠さなくていいのか」

「——ああ!!」

散々口にして指摘されてから気付くあたり救いようがない。いや、これはむしろ何か企んでいるのか、寧ろそうした「遊び」を楽しんでいるのだとしたら大物と言っているのいかも知れない。が、その可能性を模索しようとする、不思議と脱力してしまう。ある意味でスキルじみた技能バカだとキャスターは評価を下す。

「クっ！ 爾子からこれ以上情報を聞き出そうたって、そうは問屋が卸さないですよ、この卑怯者！」

口に手を当てる仕草をしつつも、言葉を途切れさせず、「変態」、「詐欺師」、「悪魔」などと罵倒が出るは出る。

「戯けが、どれだけ頭の目出度い……」

いくつか彼女にとって心外極まりない単語が飛来してくるが、「力の籠っていない言の葉など戦況において何の効果もない——戦意を削がれる程度の抗力は發揮している——が、黙って付き合うには些か喧し過ぎるだろう。」

解りやすく言い換えれば、これ以上付き合いきれない、というやつだ。

「あい分かった。自慢の毛とやらが縮れたことには謝罪の意を考慮しなくもない。が、この身はそちらの都合で『連れ去られた』身だ。この程度の抵抗、正当防衛の範疇だと思いが？」

「……爾子、むつかしい言葉はよく解らないのですの？」

小首をクテンと擬音が聞こえてきそうな挙動を見せる『爾子』とやらだが、生憎とその凶体で可愛げなど底辺に垂直落下している。

「——ああ、よく、解ったよ。御身がどういう考え思っているのか。その性質も大凡察っした」

屋上での契約も、目の前の獣擬きとその主人とやらのお蔭で有耶無耶だ。別段屋上に駆けつけるほどの義理もない。が、同じように、ここで丁寧に対応する道理もない。

「故に、こちらもそれに見合った対応をさせてもらおう」

懐から取り出して握った符はそのままに、空いている手で、それが彼女の癖なのか口元に手を当てる。すると、その背後に咒も印も切らず、突如として虚空に炎が燃え上がり、直線と曲線を刻むそれは紋様を描いていく。

「ハイ？」

その背後、浮かんだ先が膨大な熱量を発しているのか、紋様を描く過程ですら周囲を湾曲させていく。本気、というには底の知れないキャスターだが、程度はともかく腹を立てていると凶るには難しくない。終始自分のテンポでキャスターをおちよくっていた爾子も、これにはさすがに口をつぐまずにはいられない様子。

「人選を間違ったな。そんなに人を小馬鹿にするのなら余所を当たればいいだろうに。例えば」

あの弓兵の主などは中々に興が乗るだろうと彼女はあたりをつけているようだが、たればの話は長々と好んでする程、キャスターも酔狂ではない。

「これで教師というのも中々忙しい身の上だな。時間も惜しい。よつて、痛む間もなく消し炭《かみ》変えてやろう。心配するな火加減を

間違えるへまはうたん」

これ以上の言葉の交わし合いに興味もないし、意義もないだろうと。浮かんだ「方陣」より爛々と燃ゆる凶弾が顔のぞかせる。

屋上が着々と修繕費を上乗せする勢いで荒れていく中、ここ中庭を中心に、より壊滅的な事態を引き起こす「鬼ごっこ」が幕を開ける。

私立穂群原学園。

冬木の地で丘に建てられたこの学び舎。四階建ての本校舎に美術、音楽室等が別棟に設けられ、理事の意向か、高校としては十分以上に立派な弓道場が建てられている。

時刻は夕刻より前、まだ部活動に精を出している生徒も残っている中、一部、いや、二か所において、そこは異界と形容しても遜色のない惨状を呈していた。

内の片方、より顕著に無残かつ無慈悲に変貌を遂げていく場を一言で表すのなら、疑問の余地もなく、それは一目瞭然。

ただ「火の海」、その一言に尽きる。

そして、この壮絶な、ある意味地獄絵図のような光景を創り出したのが一人の「女性」の手によるもの。加えて、生を許さぬ灼熱の世界で、いまだ生きながらえている規格外の巨大な生物が逃げ回る光景。仮にこの場に居合わせた人間がいたとしても、現実逃避する様は容易に想像できる。無論、この場に余人が居合わせる可能性が皆無な事も。

「ちよつとちよつと！ いいかげん冗談にもならないのですの！ あんたココのせんせーじゃないんですのっ」

喧しくも空を「駆けまわる」巨大な犬。大きさも規格外なら、その身体能力も規格外だった。その証明ともいうべきか、宙を自在に走る爾子<sup>にこ</sup>は、その白い毛の一部にすすけた様に変色しているものの、大きなやけどを負っている様な様子はない。

つまりそれは、この灼熱地獄の中で、爾子は致命傷に至る一撃を受けていないという事に他ならない。

「ここに至って口の減らぬ様は、ある意味で敬服するがね。だが、私の「炎」はそのような半かを許すほどぬるくはない」

故にだからこそ、この地獄絵図が出来上がったのだ。

必中を誓い、放つ炎はその効果範囲を拡大させていく。逃れ得ぬ爆

心となって爾子へと猛威を振るう。

だが、その獲物である式神、爾子はその悉くを回避していた。宙を駆ける三次元的な移動もさることながら、常人の目には止まるなどないその移動速度が、その有り得ない光景を現実のものとしている。

『神火清明』

無論、それをただ眺めて「鬼ごっこ」とも取れる現状をよしとするキャストではない。

彼女の手より放たれ乱れ舞う呪符は紙吹雪のように、だが、キャストの命に従って正確に、「爾子」と自称した式神を追尾する。

『——急々如律令』

彼女の口から放たれた言霊を引き金に、紙吹雪より燃え上がる紅蓮の華。もとが吹雪と見間違うほどの物量を誇っていただけに、巻き起こる業火は炎の暴風となって爾子の進行方向を塞ぐ——が、

「アチアチっ、このままじゃ爾子コンガリキレイに美味しく焼けちゃうですよ!？」

「心配するな。所詮式神、つまりは紙に念が籠ったモノ。魔道生物や使い魔とさして変わらん。どのみち、媒介が消し炭に残る程度だろうよ」

「そう言う問題じゃねえ！ ですよ！ こんな可愛らしい爾子を前にして問答無用で焼くとか血も涙もないですよ!？」

式神であると言い張った爾子の言葉の真偽はともかく、これほどの熱量をほこる炎に晒されれば、例え生物でも骨が残るかだろうか。

開幕から問答無用で周囲を焼き払った手並みもそう。幾ら周囲から干渉を拒絶できる結果を張れるとはいえ、少しは良心が痛まないのかと爾子は吠えたわけだ。

「あってどうなる。第一、そういうものは自称するような輩など、程度がしれるだろう」

が、結果はにべもない。

たった一言で無駄な感傷だと切って捨てたキャスト。その行動に伴う表情、どうやら言葉通り、彼女は動物の態を取っている爾子を焼き払うのも、仮初の職場である学園を燃やすという事態に何ら痛む



ものが無いらしい。

「うつわー……ひよつとしくなくても鉄面皮の冷血女ですの。きつと心がかサカサのシワシワですの」

「ほう」

瞬間、何も無い筈の虚空より、数重もの鉛玉が、爾子目掛けて放たれた。その数は人一人が銃器を持ったとしても撃てる量を容易く超え、爾子の視界を見れたのなら、そこには鈍色に光る壁さながらの弾幕が迫っていただろう。

先程までの「魔術師」然とした戦い方だっただけに、唐突な銃撃の嵐は虚をつくという面では効果的だ。現に爾子は僅かな間とはいえ硬直を強いられていたのだから。

しかし、

「これも避けるか……面白い」

その人が回避しえない筈の「壁」を避け、爾子はキャスターの真後ろへと駆け抜けていた。

弾幕は確かに壁のように見えても、実際は小さな誤差がある。あるが、それはコンマ以下の話であるのは無論の事、そのような思考速度を人は形成できない。

故に見事だと、強敵と見えたことにキャスターは口角を釣り上げる。

「ふふーん。この程度、爾子にとっては朝飯前ですの」

キャスターから幾らか距離を取り、捕捉されないよう自慢の足で円を描くように距離と機会をうかがう爾子。その疾走は姿どころか影さえも目には負わず、蹴りつけて舞い上がる砂が数瞬遅れて彼（あるいは彼女）の足跡を教えてくれる。態々定形ではなく、弧の大小を調整する事によって探知の網に捉まりづらくするという周到ぶり。見かけによらず戦いの駆引きに準じた戦法だ。

「へんっつー!」

——が、突如として姿を現した爾子。

悶えるようにゴロゴロと、赤くした額を短い両前足で抑えようと丸まっていた。

「ああ、言つてなかつたか。悪いがそちらは通行止めだ。外に用があるというのなら、コチラに話を通してもらわなければ困るな」

まるでそこに見えない壁へと激突したというような光景だが、キャスターがこの場に張った「結界」が外からだけではなく、内側からの干渉も跳ね除けるのならうなずける。寧ろ、そこまでしなくてはあそこまで派手に蹂躪は出来ないだろうが。

「う——、そういう事は先に行つてほしいですのっ」

恨めしそうにキャスターを睨み、大きな目を潤ませている姿は愛くるし——くもないが、何度も言う様にその巨体と出鱈目な頭身で台無しである。

「しかし弱つたな」

もちろんの事、キャスターは爾子の恨み節に取りあう気はない。ここで彼女が言う悩みどころは爾子の予想外の回避能力だ。

彼女も手は抜いていない。最初に姿を確認した時から、見定めた能力の範囲で遊びは一切なく攻めたてた。

中庭を焦土と化した爆炎しかり、爆符の紙吹雪による追撃も、壁と見間違ふほどの弾数にものを言わせた弾幕も、並みの英霊なら三度とも軽く屠れる技だ。

突き詰めれば、今以上の速度も、破壊力も、必中性を高めた技というのもキャスターは持っている。問題は、今以上に加減が難しいという点。術者である彼女自身にもそれ相応のリスクが伴うという点だ。建前としては、まだどの陣営も脱落もしていないこの段階であり手札を切りたくないということもある。

そのためにある程度高水準の術を多用してきた。が、それを全ていなしされるのでは、いよいよもって秤に乗せるリスクを上乗せしなくてはならなくなる。隠匿の為に結果として想定外に時間をかけすぎるのであれば、それは本末転倒というもの。

そしてならば、さて——

「致し方あるまい」

ここに「魔術師」の英霊が秘めた札を切る為印を組む。

刹那、結界内を熱風が吹き抜け、待機から水分を奪う。

次に編み出される術が及ぼす破壊はこれまでの比ではないと想像するのは容易だ。だが、この「内側」には既に被害を気にするような生物などいない。時間と手を尽くせば修復できる無機物程度、取るに足りないと言った彼女の口元は、笑っていた。

階下の一角で二つの霊核がぶつかり合おうとしている頃より前、屋上では二つの戦いが繰り広げられていた。

「そら、勢いが落ちてきてるんじゃないやねえのつかよー！」

一方は凜の英霊であるアーチャー。

「——口の減らない。『三騎士』の名をほこるのなら、己の腕で語ればいいものを」

そして襲撃者であるシンジが駆るライダーだ。

近接戦闘特化と遠距離特化の戦法と取る英霊同士、よってその戦いは間合いの取りあいに終始する。

「おおおお、言うね坊ちゃん。けどま、そら言われるまでもねエよ」  
会話を途切れさせず、その合間を縫うように両の手それぞれに握られた銃で牽制するアーチャー。

彼の銃の腕前が正確無比であり、軽薄な言動が目立つ男であるが、こうしてみるとその全てが一つの戦い方なのだと言も凜も理解した。

「口の軽い人間は弾まで軽い」

隙だらけ、その弾道見切っているぞと懐に一瞬の内で侵略したライダー。

その歩法は見事の一言につき、本来騎乗してこそ真価を發揮する英霊が徒歩（かち）で『最速の英霊』のお株を奪う。

「ぎーんねん……つと。まあそう急くなよ、祭りはまだ始まったばかりだぜ？」

だが、型破りなのは何もライダーだけではない。

「な、にー！」

ライダーの槍が最高速に至る直前、威力が乗り切る前に前に出た彼は銃身で槍の柄を跳ね上げる。

一步間違えればそのまま貫かれてもおかしくない零距离での攻防。だが、制したのは間違いなくアーチャー。そして弾かれたいま、その体格差もあってライダーは致命的な隙を彼に晒している。

「くっ」

アーチャーは二丁使いだ。間隙は限りなく零に近い。

故に槍による防御を捨て、後ろに飛びのきつつ懐から何かを取り出しそうとしたライダーはしかし、

「ソラ、歯っ喰いしばれ、よつとオ!!」

次の一手、残る銃で追撃するどころか接近してきたアーチャーの銃把による殴打によって殴り飛ばされた。

童子姿のサーヴァントが宙を舞う。

見た目相応に軽いのか、それともアーチャーがその細腕に反して並外れた腕力を持つているのか。あわやフェンスへ激突、そのまま場外へ吹き飛ばされるかと思ったライダーはしかし、空中で器用に身を捻ると、槍を屋上に突き立てて無理矢理減速して見せた。

「大当たり、つてか。おたくも大概器用だねえ」

「弓兵風情が、なめた真似をつ」

「なに？ 弓兵は近付けばただの雑魚とでも思ったのかよ。どこに銃で殴っちゃいけねエって決まりがあるよ。狙撃や早撃ちだけで戦える程戦場は生易しかねえだろ」

彼の軽口、行動、その挑発は全て相手の油断を誘うものだ。

邂逅からの会話で相手を探り、本来なら決定打を入れられる場面でさえ、挑発の一手として切り替える思い切りの良さ。先ほどのように、「獲れない」と判断したのなら有効打よりも相手の癪に障るように、撃てるところをあえて頬打つ。

「いいだろう。そちらがその気なら、こちらもそれ相応に戦い方を合わせるまで」

本来相手の怒りを誘うのは戦では定石であるが、同時に量り損ねた力力量差を読み間違えれば転じて窮地を呼び込む。考え無しに出来るものではないし、相手が誘いに乗らないのなら不発どころか不利をあえて選択するこの戦い方は諸刃の剣である。

「へえー……いいね。鶏冠どころか怒髪天つてやつか」

「その軽口、閉じさせてもらおう——俺」

一度は怒りを言葉に滲ませたライダーも、懐から長方形の紙を取り出した時には幾分冷静さを取り戻していた。それを踏まえ、アーチャーは余裕の態を崩さない。

『縛！』

紙を地に投げ、屋上の罅割れ剥き出しになったコンクリート面にソレが張り付くと、途端に大人の手程もありそうな蔓がアーチャーを中心に八方から襲い掛かる。発現も一息の間なら、その展開も刹那の間に、蔓はほぼ同時に襲い掛かる。が、

「ハ！ これでも俺は『三騎士』だぜ？」

アーチャーの半径、一定の距離に侵入した蔓は弾かれ、或いは磨り潰された様に砂塵となって霧散する。

例外なく、ライダーの術はアーチャーに届かない。だが、これはある意味で必定だった。

『三騎士』。

潜在的に関わらず、セイバー、ランサー、アーチャーのクラスで呼ばれた英霊はクラススキルとして『対魔力』を保持している。まして、その枠として呼ばれる英霊はその素質から更に補正がかかり、例外を除いて高い抵抗力を持つ。

「この程度の単純な魔術なんか——」

余裕が崩れないのも当然の話。

キャスター、もしくは神代の神獣でも呼び出すなら兎も角、ライダー単体の術程度が届く程『三騎士』の『対魔力』は甘くない。

「——無論の事」

だが、その程度言われるまでもない。

そう声が返ってきたのはアーチャーの背後。持ち前の俊敏さでアーチャーの実力を考慮し、秘めていた一手も捨て札とする。信頼ともいえる確信で捕縛の正否を確認せず、ただ死角を取ることにのみ全力を注いだライダーは、見事彼の後ろを取った。

「効き目など百も承知」

言葉と共に繰り出される槍の間合いは必中必殺のそれだ。アーチャーがライダーの声を聞いた時には、既に回避を許さない。アーチャーも遅れて回避の為か身を捻ろうとするが、その程度で間にあうのなら、そもそも声はかけない。

しかし、必中を確認し、弁舌かな彼への皮肉を込めた一撃は——  
「——またまた残念。声や音殺した程度じゃ、まだまだタマはやれねえな」

完全な死角から心臓目掛けて穿つ一撃を、振り被る様にして背後に回された銃身が受け止めていた。

「なんだよ。そんな不思議でもねえだろ。あんま人を化け物みたいな目で見てくれるなよ。割と傷つくわ」

ありえない、と表情に出してしまったライダーを責められはしないだろう。寧ろ、その表情をまるで見ているかのように、今も「前を」向いたままのアーチャーが言葉を投げていることを考えれば至極もつともだ。

「——」

「お？　なんだよ。今度はだんまりか」

だが、そこでかえって冷静に思考が切り替わったのか、ライダーは落ち着き払うようにして槍を手繰り、石突で地面を突く。一見構えを解いたようにも見えるが、闘志を絶やさないその瞳を見れば、ライダーの意思を知るには十分だった。

「そうさな、折角の祭りだ。華の舞台はそれらしく、精々派手に行くところさ」

「ボクはそんなもの理解できないし、付き合う気もさらさらない」  
「クハっ、つれないねエーま、結構。こっちはこっちで勝手に盛り上がるさ」

この手の口や、今までの挑発をもものもしないのなら、よりこちらがやり易いよう舞台を整えるだけ。

謀り、騙し、担いで欺く。

戦の駆引きも醍醐味だろうと歌舞くように構えるアーチャーと、対峙していたライダーは一息に距離を詰め、異なる獲物が火花を散ら

す。

二人の英霊が激突する。

互いに手繰る得物は対極だが、銀光と共に舞う連撃の数々は、彼等が一級の戦士である事の証明でもある。

だからだろう。

これほど近い距離でありながら、自身のマスター達に飛礫一つも飛ばさない彼等の技に、正直目を奪われていた。

「なんだよ、これ」

近づく余地がないとは、こういう事を言うのだろう。

次元が違う。

届かない。

比べるに値しない。

考慮するまでもなく、自身は足手まといだというレッテルを張らざるおえなくなる。

英霊相手には当たり前。そんな事前知識で弁えたと思っていた覚悟が、実際目にすれば丸で足りなかつたと思ひ知らされる。

いざとなればこの身を盾にしようという考えは、無茶どころか無謀。1%も勝機の無いという現実に叩きのめされた。

「で、何二人して呆けてるのさ。別に、バケモノ同士の戦いなんだ。余所は余所、向こうは向こうで派手に盛り上げてくれればいいだろ」

「シンジっ」

横で聞こえた声に意識を振り替える。

確認の為に僅かに視界をずらすと、どうやら目の前の戦いに意識を持っていかれていたのは凜も同じだった様子だ。

敵と認識した相手にとんだ間抜けを晒した形だが、何のつもりか、シンジは軽薄そうな笑みを浮かべたまま肩をすくめている。畏、という線もあるだろうが、あるかもわからないもしもを論じ煮詰めすぎるのも下策。そこにどのような考えがあるのかはこちらの知るところではないし、知る必要もない。要は慢心に足をすくわれる暇もない程

全力で振じ伏せればいい、それだけなのだから。

彼女と視線を一瞬だけ合わせ、即座に臨戦態勢をとる。彼女は腕の刻印に魔力を通し、蓮は回路に意識を回しつつ、令呪による召喚の機会をうかがった。

「おっと、そう怖い顔するなよ。僕としては、この場で君たちと戦う気はないんだぜ？」

「あれだけ派手に登場しておいて、随分な言い草ね」

「いやいやいや、だってそうだろう？ さっきのキヤスターがいい例だ。僕だって学園をこんな馬鹿げた戦いに巻き込まれてまっぴらごめんだ。けど実際、あんな訳も分からない『魔術師』が教師面して今日までいたんだ、排除するのは別におかしな事じゃないだろう？」

凜の言葉には全面的に同意だ。戦う気が無いと言い出したのはキヤスターも同じだが、両者には大きな隔たりがある。

即ち、攻撃意思を実際に行使したか否か。

「じゃあ、最初の銃撃は俺達を狙った訳はどう説明するつもりだ」

キヤスターの擬態が許せないというのなら、彼女を狙ったというのは解る。その相手との契約書を破棄させようと狙ったのも、キヤスターを牽制したかったというのなら解らなくはない。だが、それに付随した弾丸はどう見てもこの場にいた全員を狙っている。無差別ではなく、洩れもなく、だ。

しかし、そんなこちらの問いに対し、シンジはそんなことも分からないのかと呆れたように忍び笑いを零す。

「わるいわるい。他意はないよ。ま、衛宮はともかく、あの時の奇襲は最初から遠坂のサーヴァントは気付いてたみたいだぜ？」

「なに？」

本当かと視線で問うこちらに、凜は僅かに思議していたようだが、間を置いて頷き返した。

アーチャーの見た目は英傑というより不良のそれだが、『弓兵』の名に違わず見事に迎撃して見せたその腕前から一応の信頼は出来るだろう。故に気づいていたのだから、これもパフォーマンスだと言いつ張るシンジの言い分も理解できなくはない。



キャスターの提案がこの先どうなるか、彼女から比べれば明らかに魔術の劣る自分たち程度を欺くなど容易いだろうというのも確か。

「てわけだからさ。なあ遠坂、お前のサーヴァント、とりあえずひっこめてくれないか。あれじゃ、オチオチ話し合いも出来やしない」

「話し合い、ですって」

「言ったら。戦う気はないって。オレ自身聖杯戦争なんて殺し合いには興味がないんだ。寧ろ、家の縛りでこんな物騒なモンに巻き込まれて迷惑してるわけ」

シンジの家、*「間桐」*は聖杯戦争を始めた*「始まりの御三家」*の一つ。マスターの資格である*「令呪」*を優先的に与えられる権限を持つ家系だという。

その為、今代、第五次聖杯戦争の*「間桐」*のマスターが彼という事。歴史ある家柄なら、根源を指す為に聖杯を得ようとするのもうなずける。そして、それほどの名家なら本人の意思にかかわらず、渦中に放り込まれるというのも予想がつく。と、そこまで考えれば確かにシンジの言い分も整合性がとれる。

そう、取れてしまう――が、

「待てよ」

「衛宮君？」

「なんだよ衛宮。ここまで言ってもまだわからないわけ？」

「なんでもこうしたもあるかよ。お前、自分の話の説得力がないって気づかないのかよ」

どうもコイツは昔から話をかみ砕くどころか、長々と並べ立てる傾向がある。だが、本当に戦う気が無いのなら、それも*「御三家」*という家柄で、聖杯戦争への知識があるのなら、まずとれる手段はいくらでもある。

例えば、自分がセイバーを召喚したのが七騎目、つまり最後のクラスだったという事が一つ。彼はしばらく自主休校していた事から、正確な期間は把握できないが、彼がライダーを召喚してからは一日、ないし数日の猶予があったと想像するのは簡単だろう。

そしてもう一つ、彼が本当にキャスターが危険だと、邪魔だったと

「いのなら——」

「アイツをどこかへ消した時点で交渉の場は整ってる。幾らアーチャーが煽ってきたとはいえ、この戦いを疎ましいって言うならそもそも乗るべきじゃなかったんだ」

シンジの性格はこれでも長い付き合いだ。喧嘩は棒に振るより高く買う性質だというのは知っている。だが、少なくとも損得勘定のできないやつではなかった。

むしろ、感情が先走るのどちらかと言えばこちらの方で、あれほど見え見えの挑発に乗るのは、言ってみれば「らしく」ないのだ。

ある意味信頼、とも言えるのか。

「だから、お前言葉そのまま鵜呑みになんかできるかよ」

悪友である事を否定する気はないが、家族である桜やその家の人間を除けば、彼の事は良く知っている。

だからこそ、矛を収めるならそちらの方が筋だというこちらに対し、何がおかしいのか、対するシンジは腹を抱えて哄笑した後、目尻に涙すら浮かべて愉快気にこちらを捉える。

「イイね衛宮お前つてき、昔っから馬鹿だよなホントッ」

吐き出される暴言と共に、懐から取り出されるのは魔力によって光を発している手帳大の書物。

『arrest hour!!』

「ちよ、衛宮君!？」

明らかに魔術、攻撃性のものにこちらはその効力を知らない。故に実直に迎撃しようとする凜を抱え、持ち前の魔術で身体機能を「加速」させる。

「へえ、それがお前の魔術か」

シンジの正面から真横に位置し、距離も十分に稼ぐ。と、先程まで自分たちが経っていた場所が黒く変色し、抉り取られたかのように削られていた。

「どいて!!」

未熟な分、避ける事に手一杯だったこちらと違い、素早く再起動した凜は抱えるこちらを突き飛ばしてその腕をかまえる。つい先ほど

までそばでその威力を体感していた。『ガンド』による連弾。情けも容赦のかけらもない弾雨。

対してシンジは魔力で編んだものか、膜状の盾を前面に展開するが、

「つおっ！」

魔術の練度は、やはり凜の方に軍配が上がるらしく、硝子の弾けるような音と共に、シンジがフェンス際まで弾き飛ばされる。

「これでっ」

「くそ、どいつもこいつも」

その手に持った魔術書を手放さなかった事は見事だが、彼の防御が気休めにしかならないのは先に証明された通り。間桐 シンジの魔術では遠坂 凜には遠く及ばない。

放たれる『フインの一撃』。

フェンスにもたれかかっていたシンジは、その手に持つ魔術書で先程と同様の障壁を張るが、もたらされる結果が先程の焼き増しになるであろうことは、この場の誰もが理解していた。

だからこそ、

「こういう時の為の我等です。采配は迅速にお願いしますと、そう申告した筈ですが」

介入してきた童子姿の英霊の槍捌きに啞然となる。いや、この光景は魔弾こそ違えど同じ光景である事には変わりない。

「は、ははは、お前にしては気が利くじゃないかライダー」

「この程度はそうたいしたことでもありません。それよりも、次の指示をお願いします」

身の丈を超える長槍を軽く振りながら正面に構えるライダー。

だが彼はアーチャーと直前まで刃を交えていたはずであり、凜もそうそう横槍などはいらぬだろうと判断しての追撃だ。

先程まで彼等が戦っていた方へ視線を向ければ、してやられたと、何故か嬉しそうな表情を浮かべてこちらに歩を進めるアーチャーの姿がある。流石に、ワザと素通りさせたなどという事はないと思いたい。

「まあいい。とにかくここは体勢を立て直す。アレを使えっ」

もたれていた状態から、従者の機転によって救われたシンジも起き上がり、ライダーに求められた指示を飛ばす。

状況はここにきて振出しに戻ったと言っ方がいいだろう。

優劣はともかく、両者のサーヴァントは疲弊した様子もなく、互いに秘奥を晒していない。となればそう、ここで言う彼が「アレ」と評したモノは英霊の象徴たる「宝具」の使用を仄めかすものに他ならない。

「よろしいのですか？ 失礼を承知で申し上げるのなら、アレを使用した場合、しばらくは――」

「いいからっ、お前は黙ってオレのいう事を聞いていればいいんだよ！」

急かすシンジの怒鳴り声と、冷静な、ともすれば渋る様なライダーの間にある温度差は相当なもの。察するに何がしかペナルティがあるのだろうか。が、事ここにいたってはシンジも意思を曲げる様子が無く、ライダーは諦めたように息を吐きだし――

「――いくぞ、爾子」

次の一言を皮切りに、空気が変わった。

膨れ上がる魔力。突風と見紛うほどの奔流は瓦礫すら巻き上げる。砂礫が舞い飛び、目を開いているのも困難な中、僅かでも視界を確保しようと正面に腕をかぎそうとした時、吹きつける風の中に何か大きな影を見た様な気がした。

「オイオイオイ、これはちよつと洒落になんねえんじゃねえの」

そして傍らにいたアーチャーが正面に進み出たのを感じた刹那、それまで不規則に吹荒れていた風が、一つの指向性をもって凪ぐ。

『■■■■■ ・ ■■■■■』

破碎音。

一瞬の静寂の後にやってきたのはアーチャーを除く二人を屋上の入口まで吹き飛ばすほどの衝撃。ついで、まるで耳元で発破されたかのような大きな音が耳に響いた。

「なんだよ、今のっ」

反応などまるでできなかつた攻撃。

そう、間違いなくライダーによる攻撃で、五体満足だと認識できたことに、自分たちはアーチャーによって守られたのかと、安堵と共に顔を上げる。するとそこには、まるで大きな車輪が蹂躪したかのような轍が出来、自分たちの頭上、屋上へ続く入口の天井が、綺麗に吹き飛ばされていた。

「ハ、一杯やられたな」

その両手に夥しい裂傷を負いつつも、気にした風もなく千切れた袖を巻いて自ら手当をするアーチャー。

シンジが取った手段は撤退。いや、あわよくば相手の一人でも巻き込もうという博打だ。アーチャーによって宝具解放による蹂躪劇は衝撃波程度にとどまったが、それでも屋上に生々しくのこる爪痕が、ライダーの脅威を明瞭に語っていた。

## 縁已生

### — After engagement —

学園からの帰り道。

それは青春という二文字に彩りを加えるうるピースだ。

誰が惚れた腫れただのといった他人の色恋から、内に秘めた葛藤に悶える事もあるだろう。

もしくは恋愛など知ったことか、額に流れる汗こそ青春と夕日に走り出しそうな馬鹿もいるだろう。

無論、初めに断わるのなら、そんなおアツイ青春ドラマ等には欠片も魅力を感じないと此処に宣言しておく。

なら、ここで何が言いたいかというと、

「ねえ……本当に大丈夫なんでしょうね」

後ろから矢の如く降り注ぐ疑心の目。それが視線のみならばまだかわいいモノだったが、学園から商店街を過ぎ、人通りが目に見えて減ってからはご覧のとおり遠慮がない。

絵面的には我が学園憧れの君との下校。羨む者もいるだろう。

だが、これだけははつきりいっておく。

気心が知れるレベルを超越した幼馴染に、可愛げなど皆無だと。

「ちよつと、今何か失礼なこと考えてたでしょ」

「別に、さっきのこととか考えてただけだよ」

口から洩れるのは曖昧な返事。

多分大丈夫だとか、平気だ大したことはない。当たり前障りが無いどころか生返事なのは十人が聞いてもそう答える。彼女から聞いているのか、とこうして耳元で聞かれるのも何度目になるか——5回を超えたあたりで数える事など放棄したのは辛うじて覚えていた。

「嘘ね——って言いたいけど、流石に無理もないか。あんなことがあった後だしね」

勝手に自己完結してくれる辺り、幼馴染というやつは侮りがたい反

面、ありがたき半分といったところだ。

そう、今二人揃って普通の学生よろしく放課後の一風景におさまっているが、ほんの少し前は、お互いに非日常の只中にいたのだから。

場を混乱に貶め、掻き回すだけ掻き回したシンジとライダーの主従は、形勢が傾くや否や即座に撤退した。その際に屋上をこれでもかと蹂躪してくれたおかげで、学生も立ち寄れる憩いの場は跡形もない。約一名、その事態に身内が一枚噛んでいるというのは頭の痛い話だ。

ともあれ、三竦みどころか一日に三騎のサーヴァントが出くわすという事態は一端の終息を見せた。今朝説明を受けたばかりだが、基本的に聖杯戦争は一对一の常態で陣営が争い、他勢力を牽制するというのが基本だという。特殊なケースで同盟を組むという事もあるらしいが、「聖杯」という大きな景品がかかっているともなれば手を取りあうという事が難しいのもうなずけるという話。

そして横槍（シンジ）がいなくなつたとなれば、今度は先程の争いの続きかとこちらは身構えたが——何故か当の彼女は呆れ顔で手に握っていた宝石をしまった。横に歩いてきたアーチャーのやる気のない野次もその決定に一役買っていたのかもしれない。此方としては、訳も分からない癩癩で戦うのは御免なので、大いに歓迎。と、ならばこれからどうするかと屋上の有様に二人頭を抱えていた時だ。ふと、アーチャーがさも今気が付きましたという様に口にした。

『そういえば、アレ、ほつといてもいいのかよ』

そう言いながら親指で指したのは背後——ではなく屋上の外、つまりはここ以外の場所だろうわけで。何の事かと気が付いた二人は、顔を見合わせてすぐさま基部が剥きだししているフェンス際まで駆けよ

り、次の瞬間壊れた屋上の扉を更に蹴り飛ばして階段を駆け下りた。

ほんと、どうしたらこうなるのかと頭を抱えたい思いだった。

幼馴染など常々碌なものではないと思っているが、その時は普段付きまとう弊害故か、横で同じポーズで頭を抱える凜の気持ちがよく解ってしまった。

目的の場所にたどり着いた彼女は震える指を持ち上げ、ソレを指した。

並んでいた自分にそれを止めるような勇氣はなく、また理由もないのでどうぞ頼むと眺めていた。

そして彼女は問うた。

これは一体全体どういう事だと。

それに対して問われた者の答えは単純明快だった。

憂う様に、それこそいつも教壇で物覚えの悪い生徒に呆れつつ、だが教職者として見捨てるような不義はしない。そうある種尊敬していた時のままの眼差しで、

修理、その一言。

加えて、他にどう見えるというオマケ等とのたまう付きだった。

僅かな静寂。それは風が凪いだように穏やかで、同時に、自分には暴風の到来を予感させるものには十分。

刹那、彼女は吠えた。

いや噴火した。

次の瞬間、女性に有るまじき怒声をこれでもかと吐出し投げつけ、彼女はそれでも足りないかと怒りの丈を示す為か、マガジンを注ぎ足すように速射し止まる気配がなかった。

だがそれも無理もないだろうと擁護しておく。

何故なら、駆け降りるというより飛び降りる勢いで一階へと降りた二人。そのまま靴も内履きのまま後者を飛び出し、目指したのは本校舎と別棟との間。放課後となればそれぞれ部活に精を出すか下校する者、幸い生徒の姿はない。が、いくらそうした状況を作れるとしても、これは度が過ぎるといふ凜の意見には、欠片も異を抱くことなく頷いていた。

木々は例外なく焼け爛れ、花壇の煉瓦ですら灰になっている。

所々が抉られ陥没した地面は隕石でも墜ちたのかという深いクレーターが出来ている。いるが、その数からして、これは単発ではなく流星群でも降ったのかという規模。逆に無事な個所を見つける方が困難という有様だ。



こうなるとそもそも荒れているの一言で済ませられるレベルなのか。告白するなら、眩暈がしたのは焼けた空気の所為だと思いたかった。

「正直、アレが明日でどうにかなると今でも思えないんだけど。本当にキャスターに任せてよかったのか？」

瓦礫の間を動き回る白い髪の小人たちが、救援隊さながらに撤去作業に勤しむ姿はシニールで、どこか哀愁を漂わせていた。

「さあ？ 少なくとも、あの状態が放置されるのなら『監督役』から勧告がいきかねないし、彼女も馬鹿じゃないならそれなりに偽装工作はするでしょ」

それは確かにその通りではある。

実際、こちら側——主に遠坂——が滅茶苦茶にした屋上についても、帰宅前に一応の結界は敷いてある。だが、それはもともと屋上が平日頃から人気に限られているという側面がある。日中、大勢の生徒が利用する中庭と屋上とでは求められるレベルも違ってくるのだ。

「まあ、そう願いたいけど。やられ損にならなくて済んだだけ行幸か」中庭をこれでもかと破壊の限りを尽くした光景を思い出すに、とても一日で終わるように思えないのも事実。だが、今回の騒動は何も収穫が無かったわけではない。

例えばライダーの最後に見せた宝具。恐らくはセイバーを凌ぐだろう速力を見せた一撃や、

「そうね。キャスターの魔術に関して、一部とはいえ分かったのは大きな収穫よ」

彼女の魔術が凜や自分のそれと違い、西洋というよりむしろ東洋よりの呪術使いだという事だけでも大きな収穫だ。

焼け焦げた爆撃にでもあった様な惨状、大量の使い魔を使役する女術師。東洋、それも日本となれば『公式で記録に残る』陰陽師はいない。返せば、裏の界限にはいるという事ではあるが、あれだけの腕なら大分候補を絞り込めるはずだ。

ライダーに関しては、童子姿の騎乗兵というのはキーワードとしては弱い。しかし、一瞬とはいえ宝具の開放を目にしたのだから、大凡のステータスは開示されている。少なくとも、全く対策が取れないわけではない。

つまりは、これからの戦いに対して、こちらは大きくアドバンテージを得たという事。無論、それは相手側にも言える事だが。

個人的にはそんなことはどうでもいいというのが正直な感想である。屋上の問答で凜には答えたが、聖杯にも、この戦いにも欠片も興味がないという答えに嘘偽りはない。ただ、自分の日常に干渉されたから抵抗しただけであり、向こうから来ないならこちらから関わろうという気もないのだから。

だからその為、朝のセイバーから受けた説明と質問の答えに、改めてこの事態の対する旨を伝えるつもりだった。そう隣を歩く彼女に話し——何故か現在に至る。

「なあ、それよりも……本当に家に来るのか？」

「当たり前でしょ。コツチにはいろいろと聞きたい事があるし。貴方にも聞きたい事があるんじゃないかしら？」

本当に、なんでこうなるのか。

さも当たり前だろう、と意地の悪い笑みで見返す凜の姿には頭の方に上る物を覚えるが、知りたくないと言えば嘘になる。現状、自分が知りうる事はセイバー、そして舞弥からもたらされた物。そして自身が身をもって味わった敵の殺気と異常性だ。これで夢ならどれだけいい事か。

「——じゃ、無いんだよな」

家まで帰る道すがら、腹部にきつく巻かれた包帯の感触を服の上から確認する。昨日、のような感覚だが、自分が意識を失う事になった出来事。アサシンと言われた女の一撃、強化の魔術の上から骨を砕くその感触が脳裏を駆ける。

「つまり、そういう事よ。貴方にその気が無くても、この地にいる残り六人のマスターにはどうでもいい事よ。もちろん、私を含めてね」

そして隣を歩く幼馴染も、“七人による殺し合い”に参加する一人

なのだという事。お互いに敵同士だという事を強調してくる。

この瞬間、そして先程から争うどころか休戦の態を貫いてくれるのは、単に余裕なのか、それとも彼女流のケジメなのか。

「ま、詳しい事は腰を落ち着けてから話しましょう。私も貴方の家にお邪魔するのは久しぶりだし」

個人の感想としては、彼女とは命をかけるような馬鹿な争いはしたくないというのが正直な所だ。互いに反発し、最近は疎遠な間柄だったが、それでも旧知の人間と向かい合い、さあ殺しあえと言われて躊躇なくナイフを取れる人間はどうかしていると思う。

いや、状況が人を追い込むのか。

だが、そうだとしても、それを避けられるのならそうしたいと、蓮は渋々といった風を装い、彼女を家に招く事にしたのだ。

そして、ようやく目的地へたどり着き、二人して家の門をくぐると

「あ。お帰りなさい、レン」

黒のタンクトップに裾広のニツカズボンをはいた、見事に土方姿の英霊様が出迎えてくれた。

予想通りというか、自分以外のサーヴァントの気配を感じ取った彼女が即座に武装して凜目掛けて剣を抜いたには溜息しか出なかった。無論、こちらが止めるまでもなく実体化したアーチャーによつてその刃は弾かれ睨み合う事になったが——その行方がどうなったのかは、この際割愛させて頂く。

何故かと言われれば、そう。

留守の家を預かる身として、これ以上の被害など御免被るからだ。

家の何割かが張りぼてで補強されている現状に、手遅れな気がしなくもなかった。

「ドウゾ、粗茶デスガ」

「あら、ありがとう」

若干乱暴に置かれた湯呑。態度でまだ警戒しているぞ、と暗に示すセイバーに対し、凜はトテモにこやかに華麗に流す。

自宅の門をくぐり、その先にいた作業着姿のセイバー。

たしかに、修繕に精を出してくれていた事はありがたい。こちらとしてはその服はどこから調達したのだとツツコミを入れない所だったがそんな隙もなく、傍らの遠坂を見たセイバーは虚空から剣を取出し、服装も黒い軍服姿と完全武装の彼女。

そして主に刃を向けられたのならと、飄々としたこの男も己の得物を抜いて立ちはだかる。

学園からずっと彼女の跡に付き従っていたのだろう。その言動から、主人の意向を軽視するといった自由奔放なきらいがあるように捉えがちだが、これで義理人情もあるらしい。もともと、その判断基準が常人のそれであるかどうかは判断に窮するが。

ともあれ、そんな玄関先での突発的な衝突は、互いの主の矛を収めろという命令によってことを荒立てるまでも無く終わった。

凜と互いに目を合わせ、ため息をついたのは記憶に新しい。互いに一つの戦いを潜り抜けたところなのだ。話し合いをしに来たというのに、余分な厄介ごとなど勘弁してくれという話。玄関先で騒ぐなどという個人的事情もある。

皆聖杯を巡って争う敵同士である筈なのだからと、セイバーは不審顔のままだが、そうして玄関前で立ち会っていても話は進まない。彼女とは一方的に主従関係だと言われただけの間だが、ここは都合よくその威権を使わせてもらおう事にし、二人を「無事な」客間へと案内したというのが先程のことだ。

「んー？ つと、なあ俺には何も無いわけ？ 客を選ぶとか随分不作法な騎士様もいたもんだなオイ」

訂正。

ここまでセイバーが不審顔のままだという話。約一名、彼女の不信というか、怒りに薪をくべる奴がいる所為もあつたらしい。廊下から入ると縁側に向かう障子の傍に陣取り、胡坐をかく始末。セイバー程ではないが、不作法だという印象を受けるのは無理もないだろう。

彼の言葉通り、その前置かれた簡易のテーブルの前にはお茶請けどころか茶の一つもない。代わりというのだろうか、温度の無い視線が胡坐をかいていた彼に降り注がれてはいた。

「アーチャー……お願いだから話を進めさせて」

彼の主である凜の言葉に一息つく。

互いに席に着き、セイバーがお茶を入れてくると積極的に出て行つたあと、こちらが聖杯戦争についてどこまで知っているかと話し終えたところだったのだ。これから本題に入ろうというタイミングでセイバーが戻ってきたこともあり、一呼吸入れるかと思えばこの横槍である。

お盆を持つ手が震えているセイバーの気持ちも分からなくないが、それでは持ってきた湯呑が一つ余るだろう。折角彼女が善意で用意したもの、一先ずはと宥めにかかると彼女は溜息を吐き——彼に近いテーブルの端に湯呑を叩きつけた。

絶妙な力加減か、湯呑自体には損傷がない。無論、その中身である液体の何割かは飛び散っているが。

「おおこわっ」

それを受けて懲りる様子が無いアーチャーに、彼女をとがめる言葉が口について出る事はなかった。

市販の茶葉で入れたお茶が、何故か自販機に並ぶように整った味があるという奇妙な現象を目のあたりにした。

これは一種の才能なのかとか、馬鹿な考えが頭を過ぎるが、全くの無駄な思考、今この場で割くのも余分だ。だからその液体をもう一度だけ口に含みつつ、目の前の朴念仁が話した情報を一先ず整理する事にした。

「なるほどね。あらかた、基礎的な情報はセイバーから聞いてたわけか」

首肯する彼が話すに、噂の衛宮邸がサーヴァントの襲撃にあったという情報は確定的であった。

情報が集めやすいのは、冬木の管理を任せられている「セカンドオーナー」たる遠坂の特権である。その為、事件当夜にも最後の英霊召喚から、二つの英霊の衝突は確認していた。

そもそも英霊同士の激突を秘匿しきれないからこそ、聖杯戦争では早期決着が望ましいもの。故に、碌に隠蔽をしなければ他勢力に筒抜けであり、確証は得られなかったが、大凡どのエリアにサーヴァントが現れたという程度ならすぐにわかる。

もつとも、マスターにとつて鬼門中の鬼門であるアサシンに襲撃されて平然としていられる目の前の男の幸運さには呆れるが。

「アサシンにアーチャー、キャスターにライダー。まだ本格的に始まったばかりなのに、よっぽど不運な星の下みたいね」

「言うな……俺も結構真面目に頭抱えたい気分なんだから」

いや、この場合はある意味で幸運なのか。若干悪運が強いだけな気がしなくもない。

説明も終わり、改めて現状に項垂れている彼の姿には同情の余地があるだろう。

自分は欠片も抱かない感情であるが。

マスターに選ばれる条件は二つ。

聖杯に願うだけの望い、或いは狂気を持っているか。

そして、魔術師としての素養、その血筋だ。

彼の願い、願望については幼い頃に触れているのでこの際は省略する。問題は、彼が曲りなりにも自らの意思で魔術を志し、養父である切嗣に師事したという事。

遠坂の家に残る歴代の記憶から、マスターに選ばれる人間が一般人と遜色のない、或いは自覚の無い人間が選ばれたというケースが存在

する。

7人という大前提の枠を埋める為に、聖杯が本人の潜在的な魔術の素養、或いは過去の血筋で「魔術師」だったものが存在すれば選ばれるのだ。

聞けば蓮のセイバー召喚ケースは、彼の意図しない偶発的なもの。事故とも捉えられるだろう。

だが、彼は曲りなりにも「魔術が死と隣り合わせ」だと教えられ、それを承知の上で鍛練を本日まで続けてきたのだ。超常の戦いの只中に放り込まれたとはいえ、同情するのは話が違う。それは彼が魔道の修練につき込んだ日々を侮辱する行為に等しいと知っているから。「ま、運が悪かったと諦めなさい。というより、この場合は命を繋いでいるだけ幸運ね。それも「最良」と謳われるセイバーのカードを引き当てたんだから、お釣りがくるくらいよ」

「いや、その理屈はちよとまで。そもそも俺はだな」

戦う気が無い。聖杯にも興味が無い。

彼の主張は一貫してそれだ。そして、彼の願い、幼い頃から頑なに変わっていないそれを知っている身としては、その言葉が信用に足るということも身に染みている。

だからそれを理解しつつも、こうして苛立たしく思うのも、自分の理屈に照らし合わせたモノなのだと理解している。

彼と初めて出会った幼い頃の記憶。

尊敬する父の紹介で、とても大切な友人の子供という事で、緊張半分、興味半分で落ち着かなかったのは良く覚えている。

幼さゆえか、当時の彼の印象は、女であった自分をもってしても人形のようなだと形容してしまう線の細い人。

雄性よりも雌性を感じさせる顔立ち。

男の子だと言われ、目の前で女の子みたいだと呟いてしまい、彼が見せた不機嫌顔がとても華やいでいたのは女性として心抉られるものがあつた。

とにもかくにも、相手方の印象はこの際なげるが、こちらとしては

最初の出会いは好印象だったのだ。同じ年頃の子供。それも自分と同じように魔術を習っているというのだから、興味が無い訳がなかった。

だが、

『そんなものに興味ないよ』

なんとなしの言葉だった。

彼も魔術を修めようとしたのなら、そこには何かしらの願いがある筈だという疑問と興味。

だから、父から聞かされていた「根源」についてどう思うのか、何を知っているのかと、共通の話題を持つ歳に近い彼に聞いてみたのだ。

だが、彼の答えは短かった。

なんだそれはという、無関心。

あまつさえ、彼女がこれまで認めてもらおうと血のにじむ様な努力をしてきた宝石（魔道）をそんなモノだという道具程度の認識。

その時、生まれて初めて感情のままに人の頬を張ったのだと、痺れる掌の感触に遅れて認識した。

彼が現実には悲観しているのだとして、それは別段どうでもよかった。

魔道に対して不真面目でも、すこし苛立たしいが、それでもかまわなかったと思う。

だが、彼は無知な井の中の蛙でも、甘え性の天邪鬼という訳でもなかった。

彼は、衛宮 蓮は、養父だという切嗣に魔術を習い、まだ半年もたっていないという。

自分が父に魔術を師事し、第四次聖杯戦争のころ、7つの頃には本格的な修業を始めていた。そう、彼と出会ったのは第四次終了から三年後。当時十歳を迎え、未熟だった魔術もある程度の水準に届き始めていた頃。

そして、問題の彼は、魔術を習い始めてたった半年で、自分の二年分に近い研鑽を飛び越していた。



追い付いてはいない。寧ろ比べたらその開きは歴然だろう。だが、その短い期間で彼が習得した魔術が、更に幼かった当時の自分には到底たどり着けなかった習得速度。

はつきり言うのなら、その時彼の経歴を耳にして、まるで自分が無能者のように思えた。

彼が言う大したことはない、興味がないと言う言葉が、そのまま自身の歳月を馬鹿にされたような気がしてしまったから。そこからは男女も関係なく、大ゲンカしたと記憶している。

駆けつけた互いの両親にいさめられ、その場は流れる事になったが。

しかし、ことはそれで終わらず、後日切嗣が家を空けがちだと心配した時臣の気遣いで、彼を家に預かるという事案が発生してしまった。その為、ことあるごとにであう彼と、絶える事の無い小さな戦いは継続していたが。

「——って、おい。聞いているのかよ」

「え、ああ、ごめんなさい」

目の前で覗き込み気味に、少々遠慮したようにこちらを窺う蓮の姿。自分はどうでもいいが、女性相手に窺うのはともかく、覗き込むのはご法度だろう。そういう奇美をあまり期待できない人種だとしてもだ。

だがまあ、今回の場合は話半分聞いていた時分の落ち度もある。その為、弁解に始まり、今は愚痴交じりの文句を大人しく聞いてあげようと耳を傾けていた、が。

「てか、今回の不運の一端だって、半分はどこかの暴力女の所為だろ。わけわからん質問の後に問答無用で殺しに来てるし、あと公共物滅茶苦茶だし」

「へー貴方、まだ本気でそんなこと言うんだ」

少々こめかみに来た。

かれこれ七年近くの付き合いになる筈だが、いまだにそんなことを口にするというのか。

青筋が浮かぶどころか、腕の擬似回路が浮き立つのではないかと少々過剰気味に魔力を回し、「私大変怒っています」と無言の笑みでアピールをする。

だけど、自分は知っている。

こういうアピールを、この目の前の炭素男はまるで受け止めきれないのだと。

「いい機会だからこの際ハッキリとわかるよう強制してあげるわ——

——そこになおれこの練炭ツ!!」

幼い頃の愛称を投げつけられ、相手も昔ならがらの反射でいきり立つ蓮。

従者をいさめていた主達はここにきて、話し合わねばという建前をなげうち、テーブルを境に向かい合う。

「れーんー！ おーなーかーすーいたーあ」

そして、とうとう取っ組み合いに発展するかという所で、玄関の方角から、客間に向けて気の抜けた大音量が響き渡った。

「この声って、藤村、先生？」

互いに持ち上げた手の力が過多から抜けて下がる。蓮は脱力のあまり体勢を崩しかけているが、互いによく知る人物の乱入に矛先が鈍った状態だ。

空気を察したのかアーチャーは人笑して霊体化し、何故かセイバーはその場にとどまっている。が、特に取り乱すところがない辺り、何かしら対策をとっているのだろう。というかそうだと思いたい。深く考えるのが面倒だとか、そんなことは決してない。

などと、聞こえてくる足音に逃避時間もないと、互いにこの状況をどうするかと一瞬視線を合わせている。

「れーんー私はご飯を所望いた——す？ あれ？」

乱入者は玄関からほぼ間を置かず、客間まで直行し、勢いよく閉じられていた襖を開け放つ。

「すいません。先ほどそこで会いまして」

「あれー遠坂さんも来てたんだ？　こんばんはー」

こんばんはと苦笑い気味に返すこちらに対し、自由奔放を地でいく大河がテーブルの上に身を投げ出す。続いて顔を覗かせたビニール袋を下げた舞弥が申し訳なさそうに頭を下げていた。

客人である凜。そもそも料理をする気が無い大河を余所に、舞弥と二人で手早く夕食を作り遅めのご飯となったのが先程の事だ。

凜との話し合いに思ったよりも時間を取られていたようで、辺りは既に暮れていた。

「は？　俺が遠坂を送って行けつて？」

そして、家の用事で今日はいない桜を除き、五人で囲む食卓。そう、実はセイバーは霊体化していない。

しかし、これも考えれば有り得た話。自分がアサシンに襲撃されて舞弥に発見されるまで、看病をしてくれたのは彼女だ。大河は自分の保護者だと自称する事もあり、夜であっても衛宮邸に顔を出すこともある。その時に顔を合わせているらしく、おかげで余計な説明の手間がなくなっていたのは都合良かった。

もつとも、そのおかげでセイバーと義姉弟という設定が出来ていたが。

「そうよー。最近はこの辺りも物騒なんだから、このありさまを心配してきてくれた遠坂さんを、まさか蓮は女の子一人でほっぽり出す気じゃないでしょうね」

そんな子に育てた覚えはない、と目尻に涙を浮かべる

小芝居までうつ大河。だが生憎と、自分も彼女に育てられた覚えはない。

正確には、今日までの生活で世話にはなってるし、恩も感じている。それ以上に被った被害と、この家のエンゲル係数を右肩上がりにする実績が、非常に残念なことにそのありがたみを打ち消しているのだ。

「それとも、蓮は女の子を守るっていう使命より何か大切な事がある

の?」

「いや、別に用事は——」

「あら、そうして頂けると私としても心強いです。ありがとう衛宮君」  
一つ言っておくなら、別に大河の主張を断る気はなかった。なかつたが、横からステキに心を波立たせる凜の笑みに、本気で断りたくなつた。

結果としては承諾する事になつたが。

「蓮。外に出るといふのなら後でこれを投函しておいてもらえますか。後片付けはこちらで済ませておきますので」

「ん? 別にいいけど」

と、片付けを簡単に済ませようとすると、台所から顔を出した舞弥が一通の封筒を手渡ししてくる。それは宛名もかかれていない奇妙な封筒で、一目で何かのメッセージだと悟り他の目に触れないよう懐に入れる。

「じゃ行ってくるから、後よろしく。あ、藤ねえは舞弥さんの邪魔だけはするなよ」

玄関で靴を履いて板戸を空ける前、釘をさす言葉に中の方から抗議する声が響いてくる。が、それを無視して外へ出る。

大河という一般人の目もある中、学園と同じく“大人しい優等生”という皮を被っていた凜を送る為に彼女の家を目指すが、

「で、さっきの手紙は何だったのよ」

目ざとい幼馴染は先程舞弥が手渡した封筒について、しっかりと怪しんでいたようだ。

「……親父からの呼び出しだよ。昔から面倒事がある時は藤ねえの目もあるし、ああして手紙で場所を指定してくるんだ」

「へえ、切嗣さん帰ってきてるんだ」

昔から放浪癖のある人だが、それでもこちらを気にしてくれていたのか、時たま様子を見るように顔を出す事があった。家にいるより、外を飛び回っている親、というのも子供心に心配、というより怪しんだものだが。

ともあれ別段隠すことでもない。先程のやり取りについて説明す

ると、何やら空いた妙な間に長年の付き合いからか、嫌な予感が脳裏をよぎった。

「つて、まさかお前もついてくる気じゃないだろうな」

何を今更当たり前だろうという顔をする凜だが、何が当たり前なのだ、この時間帯の住宅街で危うく怒鳴りそうになった。

切嗣と凜は彼女の父親である時臣との繋がりもあつて昔馴染みだ。時臣の事情もあり、切嗣が魔術の鍛練を見ていたという事もある。

だが、舞弥がこのタイミングで切嗣からの連絡を繋いだという事は、恐らく今朝話していた件だろう。自分はなんとなしに聖杯戦争に巻き込まれた口だが、どうやら切嗣はこの事故に関して何かを知っていると彼女がほのめかしていたこともある。

だから、彼から離される事はまだ自分でも消化できえ居ないこと。どんな内容が語られるか見当もできないし、出来れば第三者の立ち会いは遠慮してもらいたいのだが。凜は自分も切嗣に話があるとの一点張りで無理に主張を通そうとしていた。

「なんだよ。その話つて」

「そうね。貴方にも話しておいた方がいいか。切嗣さんはね」

「お待たせしました、レン」

話しながら歩いていると、いつの間にか自宅と遠坂邸へ向かう交差点、その坂に着いていた。そこにはセイバーの姿があり、どうやらマスター達が活動的になることを気にして、護衛の為に抜け出してきたのだろう。もしくは、舞弥が頼んでくれたのかもしれないが。

こちらに歩み寄った彼女は凜の姿を見て、今日の不礼を詫びる為に頭を下げる。

流石に先程まで敵意を向けられていた相手に、一転して頭を下げられる事態に彼女も慌てて顔を上げるようにうながし、今までのやり取りと気にすることは無いお互い様だと場を収めると、自分も切嗣のもとへ同行する旨を告げた。

件の件については、まだ自分は了承していない筈だが。彼女の中では既に決定事項なのだろう。無理に断わっても後をつけてくる光景が容易に浮かぶ。

傍らで、セイバーがどうしてこうなったのかという、不思議そうな顔で小首を傾げている。

「ああ、その疑問については俺も非常に聞きたい」

その回答すら面倒になり、道すがら話すか、凧が勝手に話すだろうと諦めを付ける。

そうして、三人は遠坂邸に向かうのではなく、坂を下り、新都の方に足を向ける。

封筒にある切嗣が指定した場所は新都にある大きな公園。この時間なら人目はなく、話しが魔道に寄った事という事もあつてうつつだけだ。

彼が話すという言葉がどういふものかは想像できない。そもそも彼は昔から多くを語らないきらいがある。長年の付き合いからそれでも大切なことはしつかり話してくれているものだと言っていたが、流石にこの件は事案が事案だ。言葉足らずで流すには少々大きすぎる。

道すがら、彼に会って一番にどんな文句を言うかと考え、自分に続く形で三人は坂を下る。すると、突然セイバーが纏っていたコートを投げ捨て、自分と凧を庇うように前へ出た。

「こんばんは。ようやく会えたね。お兄ちゃん」

どうかしたかと、彼女に問う前に投掛けられた言葉。その声はどこかで聞き覚えがある物。

セイバーが無手のまま構え警戒するその先、絹のように滑らかに、月明りに輝く銀髪を風に晒した赤い目をした少女が立っていた。

遠坂を送り届けろという一方的な命令から、二人は切嗣からの呼び出しだと指定された場所へ向かう為に、一路新都方面へと歩みを変えらる。

二人の家も深山町にあることを考えればそれは逆方向であり、家には大河を残してきたことを考えればあまり時間もかけられないという不安要素はある。だが、今回のコンタクトは長年切嗣の相棒であった舞弥を経由したものだ。その彼女も片付けを済ませておくという態度で残ってくれている。だからそちらに関してはあまり心配する程ではないと切り捨てられた。

思えば切嗣が冬木に戻ってくるのはいつ以来か。

小さい頃、まだ自分が引き取られた当初は環境の変化になれるまで見守るつもりだったのだろうか。彼は比較的家にいる事が多かった。

蓮が編入した小学校にも慣れ、知人にも面通しが済むとある日、とても大切な用事があるからと、彼は唐突に言っただけで家を空けた。それも二三日の話ではなく、週単位で帰ってこない事などざらで、蓮が高校に上がった頃には月単位でいなくなることもあった。

その彼が何処へいくのか、いつ帰ってくるのか何をしていたのかも口にしないので実は切嗣の事をあまり知らないのかもしれない。そう思うと自身がとても薄情な人間に思えるが、これで身よりの無かった自分を引き取り、普通に学生をやれる程度には援助してくれたりと感謝はしている。また、過度な干渉をせず、距離を取った対応も今思えばありがたかったと思う。いきなり環境が変わり、その変化に戸惑っていた時分には、その緩やかな距離感というものが必要だったように思うから。

むろん、だからと言って欠片も文句が無い訳ではない。寧ろ感謝の数と同じく、いやそれより多く苦言は数え切れない。特に、付き合いの長い知人とはいえ、長期にわたって家政婦まがいの仕事をさせていた舞弥にはしっかりと謝罪をしてもらいたい。

そうして道すがら、彼に会って一番にどんな文句を言うかと考え、自分に続く形で三人は坂を下る。

すると、突然セイバーが纏っていたコートを投げ捨て、自分と凜を庇うように前へ出た。

「こんばんは。ようやく会えたね。お兄ちゃん」

無手のまま構え、セイバーが警戒するその先に立つ少女。

絹のように滑らかに、月明りに輝く銀髪。

宝石のように透き通った赤い瞳。

一目見て小学生くらいだと見て取れる体つき。

全体的に赤と白を基調にしたボアポンチョ。

その白い肌も相まって、最初の印象は人形のようなと思う程、どこかかけ離れた容姿だった。

「お兄ちゃんって、衛宮君、アレ知り合い？」

確かに聞き覚えがある。だが、それがどこであったかはどうしても思い出せない。

少女の日本人ばなれした容姿は特徴的で、一目見たなら忘れようはないだろうと断言できる。昨今の開発が進んだ冬木では外国人が暮らしているのは珍しい事ではない。だが、今までの自分の短い人生で、ここまで綺麗に透明度のある少女は見たことがなかった。

或いは、まるで雪のよう并接受えた独特の印象が強いせいもあるだろう。

「いや俺は知らないぞ。そもそも」

自分に親類と呼べる存在は、養父である切嗣だけだ。

10年前の大災害で両親を亡くし、いたのかも怪しい親戚から引き取りの声もなかった自分には近い繋がりというものがない。

覚え忘れないだろうと記憶を探っていると、あろう事かセイバーは虚空より白銀の剣を顕現させた。

「警戒意識をあげてください。この感じ、常人のそれではありません」

取り出した聖剣を手に、切先が一切ぶれることなく目の前の少女に向けられる。

確かに、こんな時間に、それもただならぬ雰囲気と言葉の端に、佇



まいからも漂わせている。そんな少女が一般人と大きく異なるのは、  
“魔術師”でなくとも違和感を覚えるだろう。当然、セイバーの意見  
に後ろにいるマスター達も異を唱えるつもりはない。しかし、それを  
考慮しても、セイバーの額に流れる汗、緊張に強張る顔は、何か他の  
要因に揺さぶられているように感じる。

「そう。貴女が今回のセイバーなのね。けど、そんなことどうでもい  
い、というより貴女って不粹ね。異国で折角出会えた姉弟の話に邪魔  
に入るとか、亀にでも踏まれてつぶれちゃえばいいのに」

「亀って……」

その形容は歳相応に思える幼さが窺える。が、セイバーを視界に収  
めた彼女の瞳、その色が一瞬言い表せぬ狂気を宿したように見えた。  
ほんのわずかに、緩みかけた気が、知らず背筋に流れた汗の冷たさと  
共に引き絞られる。

「ああ、そういえば名前も聞いてないんだっけ。キリツグにも困った  
ものね」

「親父を知っているのか」

「ええ、よく知っているわよ。アイツがどういう人間なのか。貴方と  
の関係も、この街も、このくだらない殺し合いがどういうものかも」

とても冷めた目をする少女だと、その時、目の前に立つ少女へ対す  
る印象が変わった。

言葉にどこか感じさせる幼さと大人びた、いうなれば温かくも冷た  
いという対極の温度が混ざり合うアンバランスさが、一つの単語を境  
に零度へと一息に落ちていく。

問いかけた言葉も、まるで沈黙しかけた火種に油を注ぐように、静  
かに、だが彼女の瞳は明確にソレが憎いと語っていた。

「イリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。と言えば大体  
は察してもらえるかしら。ああ、けど今日は他の参加者の顔を見に来  
ただけだから安心して。そんなに身構えられるとこっちも疲れちゃ  
うから」

「へえ、態々来て挨拶だけ？ 私にはヤル気満々に見えるけど」

「貴方達にそれほど興味がなかったのはほんとよ。寧ろついでくらい

だったんだから」

ならばこのイリヤと名乗った少女は、いったい何を目的にこの場に姿を現したのか。

戦う為ではない。とはいうが、彼女が聖杯戦争の関係者、十中八九マスターの一人だという事は、セイバーの警戒具合にも、その名前からも明らかだった。

今朝はセイバーから、そしてつい先ほど遠坂から聞かされた聖杯戦争を始めた「御三家」、その経緯。聞き間違いでないのなら、彼女はその一つである「アインツベルン」を名乗ったのだから。

そして当然、そんな言葉が信じられるかと前に出た遠坂に対し、本当に、「自分達に興味はない」と言うように少女は一言で切り捨てた。

短く、ただオシオキをする為だと。

「どういう意味だ」

「どうも何も、そのままの意味。約束を守れなかった人に、言葉通り針を千本飲ませるの。ねえ、さつきキリツグがどうか言ってたわよね」

「だったら？ それこそ貴方には関係の無い情報だと思っけ」

「キリツグはどこにいるの」

凜の言葉に被せるように投げつけられた言葉。

YesかNO、それ以外の言葉は聞かないし必要ないと言外に示す彼女の瞳は、この短い邂逅の中でも一際冷めきり、下手に話題を逸らすうものなら切貫かれる様な、刃物を想像させる鋭さがあった。

だからか、反射的に彼の居場所は知らない、定期的に家を空けているからと事実を混ぜた嘘を告げてしまった。

そして、それが決定的に間違っただと、次の瞬間この場の誰もが理解した。

「そ、ならもういいわ——バーサーカー」

その「男」はいつからそこにいたのか。

黒い甲冑は宵に染まったこの夜より濃く、淡い月明りの中でさえ深い闇色。

「っ、いつの間に」

「役に立たない人たちなんていらぬ」

白銀の髪を持つマスターである少女が呼ばなければそこに存在していることをも見落としかねない存在感。

主だろう少女に呼ばれて浮かび上がる黒甲冑。その深く彫られた虎兜の二つの窪みが、狂気を孕んだ赤い光を宿す。

「……やっちゃえ」

それは小さく。自分たちの耳が微かにとらえた獣を野に放つ号令。だがそれで十分だった。

少女の言葉を待っていたと言うように、傍らに控えた虎兜の狂戦士は、主の下知をもって鎖より解き放たれる。

まるで長い間繋がれてた獣が歓喜の雄叫びを上げるように、人とはかけ離れた絶叫。

獣さながらの雄叫びが、周囲一帯を震撼させた。

小さく最小限の距離を取り、猛進する狂戦士を掻い潜る。

だがそれは逃げの手を打つための回避ではない。後ろに残る主達を守るため、彼女が選んだのはあえて向こう側のマスターを狙うという誘導。

「かかったっ」

後ろから追従するように遅れて聞こえる風切音。その空気にさえ悲鳴をあげさせる質量を圧を持った拳を、大凡の気配だけで当たりをつけ、身を沈ませることで回避する。

狂戦士といえど、手綱を握るのはマスターだ。理性が無いのだから、彼等がとる戦闘における対応というのは大雑把にならざるおえない。その為、敵目掛けて特攻する狂犬を無視してマスターを狙うというのは少々の賭けでもある。が、読み通り、アインツベルンのマスターは本来コントロールが難しい狂戦士の手綱をしっかりと握っている。

そして今の攻防で把握した重要なことはもう一つある。バーサー

カーの速度がセイバーに追い付く類の域ではないということだ。

最速の英霊とも称されるランサーとはまだ会敵していないものの、セイバーの速度は高ランクであるのは揺るぎようがない事実、そして利点だ。だからこそそれが優位に立てるかどうか、サーヴァント同士の戦いでは彼女にとつて最重要事項となる。それ如何で戦略の立てようが大きく変わるのだから。

獲物は最初の夜に戦ったアサシンと同じく徒手空拳だが、この相手は彼女程速度があるわけではない。直線的な威力、膂力は間違いなく狂戦士に軍配が上がるだろうが。

よつて、この程度なら彼女が遅れをとるわけがない。危なげなく背後からの奇襲を回避したセイバーの様子に、蓮が安堵しかけた時だ。

「っ!？」

その行動は単なる直感、本能だ。

回避したセイバーを正面からとらえる為に続けて放たれた拳の二連撃。

一つ目を交わし、クロスするように刃を相手の手甲に走らせ、肩口からカウンターを見舞う。そのビジョンを描き、彼女が構えた刀身がバーサーカーに触れる直前だ。刀身と甲冑の間が後数センチも隙間の無い刹那、急に飛び退るように彼から距離を取ったのは。

「どうしたのかしら。それとも——ああ、さつきといい、あなたつて中々いい勘してるのね」

二人のやり取りから距離のあった蓮達の目には、今のやり取りの間に何があったのか知る事は出来なかつただろう。何せ、セイバー自身も自分がなぜそのような行動をとつたのか理解できていなかったのだから。

「セイバーっ」

「離れてください。いえ、それよりも二人は機を窺つて離脱をつ」

今のカウンターは間違いなく好機で、相手が迎撃にでても容易くそれを越えられるだろうとセイバーは思っていた。しかし結果は自身の第六感に従つた回避行動。そして頭が理解するよりも先に、今の行動が間違いでなかつたと納得している自分を自覚していたという不

可解な感覚。

「離脱って、数ならこっちの方が上よ。このチャンスを——」

凜の言うこの場での利を考えないセイバーではない。理屈でその勘定は既に天秤に乗せている。だから、それを考慮したうえで相手の危険度が高すぎるのだ。

誓って、セイバーはバーサーカーの素性を把握している訳ではない。聖杯戦争における二回目の参加という特異例であり、記憶の継承もしている。いるが、その思い出した記憶の中に、こんな仰々しい黒甲冑の覚えはない。

なのにこの背後から忍び寄られる様な不安は何か。そう問われれば答えに窮するが、あえて言葉にするのならその雰囲気。コレが纏う険呑さはそのままとても不吉な何かを連想させ、脳裏に駆ける警鐘が、思考が下す判断を待たず体に働きかけるのだ。

「オイオイなんだ、いまさらかブルっちまったとかいうきじゃねえよな」

「アーチャー。貴方は今更」

対峙する両者の間に走る緊張感を砕くのは、セイバーと違い霊体化していたアーチャーだ。その両腕には、昼間の戦闘による名残りである布が包帯代わりに巻かれていたままだが、気にした風でもなく古びた銃を取り出していた。

「いえ……今は貴方と言い合う時間も惜しい。貴方は凜たちの安全を確保しつつサポートに回ってください。どうにも、アレには寒気がします」

援護よりも撤退を優先させろというセイバーの物言いは、聞くものには臆病風に吹かれた様に聞こえるだろう。事実指示されたアーチャーも面倒だというように手で側頭部をかいている。

だが、事実として、この時この場にいる者はそれ以上の思考の中断を余儀なくされた。

「オオ——■■■■!!!」

虎兇の狂戦士が絶叫を伴ってセイバー目掛けて殴りかかる。

一撃。二撃。三撃と、その全ては彼女を捕らえて屠る為のもの。こ

ここまでくればあのアインツベルンの少女も、まずは邪魔な前衛を潰しに来たということだろう。数に利のあるこちら側だが、定石に従って考えるのなら前衛たりえるのは彼女のみなのだから。

「くっ、だがこの程度なら」

打ち下ろされる砲弾と見間違うほどの拳圧を、セイバーは身体を逸らして躲しきる。が、初めのように、刀身を当てるようなことは決してしない。いや、彼女は全霊でバーサーカーとの接触を避けている。

「■■■■!!」

「ぶぎまね。避けてばかりじゃ、私のバーサーカーに勝つことはできないわよ」

幸い、場所は住宅が密集した住宅街というよりかは散在している。人数が少ない時間帯というのも味方はしている。だが、少女の言うとおり、このままで勝機が無いのは誰の目にも明らか。

故に、彼女が探るのはその勝機の程。突き刺さり主張する違和感の確証を得る為に全神経を集中させて見極めようとしているのだ。

そして、その慎重さは、決して取越し苦労ではない。

「まあもし、仮に何か小細工をしようとしても——」

今までで一番大振りな腕の引き絞り。

背後を壁に阻まれたセイバーの退路は左右上下の三方向。その一つ、上空を断つための打下しの為のものだ。

だが半面、溜めと比例して隙を大きく晒す行為。通常ならこれ以上ない絶好の好機を、セイバーは空中でステップを踏む事で、空中を稲妻が昇るように駆け上がった。

「そんなもの、結局は無駄でしかないから」

その結果、

「っ、やっぱり」

「嘘、だろ」

セイバーに代わって彼女の交代を阻んでいたコンクリートの壁が吹き飛ぶ。

砕けるのではなく、吹飛ばされる。瓦礫ではなく砂より微細な塵のように舞う壁だったそれらは、まるで砂城が吹き飛ばされたかのよう

に、跡には何も残らない。

「アーチャー、凜！ なんでもかまいません、バーサーカーに攻撃をっ」

「え、けど私の魔術なんて」

魔術がサーヴァントに届かないという一般的な主張をセイバーはそんなことはどうでもいいと怒鳴り散らすように攻撃を求める。同じ援護なら弓兵のクラスであるアーチャーがいるだろう。

確かに、凜個人は表には出さないが、条件付きで一度、いや二度程度なら英霊を打倒する一撃を見舞える。だが、それは本来奥の手。この聖杯戦争に勝ち残るために幼い頃より練りに練ってきた結晶なのだ。おいそれと使うのは躊躇われる。

「迷ってる隙ねえだろ。俺らは後衛だ——構えな、合わせてやるよ」  
「アンタねっ」

簡単に言ってくれるなど隣に立った弓兵は、しかし凜の予想に反してこれまで見た事がないほど緊張感に引締まった顔をしていた。

これまで戦ってきた中、対サーヴァント戦でも飄々としてきたこの男が強張る姿。それは今もバーサーカーとつかず離れず距離を保つセイバーとも共通するもので、知らず凜も息を飲む。

「ええい!!」

そして、だからこそそれらが決め手になったのだろう。

戦術を選ぶのは結局己の経験と直感だ。前者は高々十そこらの少女が培った経験。戦場の華となった英霊には遠く及ばない。だが最後に継る導が他人を指針にするなど遠坂 凜は看過しない。よって従うのは己の直感。

『――Anfanog』

これは己の選択、彼に言われた可能性を考慮しただけに過ぎないと自分に言い聞かせ、取り出したのは彼女が保有する「宝石」の中でも大粒の一品。

即席ではなく、それなりに値もはり、時間をかけた逸品だ。

「これで無駄になったら、貴方が責任持ちなさいよ！」

主に金銭面だと主張する守銭奴の軽口も、知らず彼女が感じ、伝播

してきた不安を払拭するためのものだろう。

彼女も一流の魔術師として、師でもある己の父に認められる程の腕前、自負がある。だからこの程度何でもないと振り切るように掴んだ寶石を投擲、弾丸となるその一撃に、アーチャーが獲物である銃撃を追随させた。

そして――

「よし、ビンゴッ」

爆ぜる爆炎に次ぐ轟音。

その威力は例え相手に大きなダメージを与えられずとも、注意を逸らす事は出来るだろう。そして後を追う形で放たれたアーチャーの弾丸の軌道を覆い隠す。

連携は完璧だと、誰の目にもそう映っただろう。

だが舞う煙の晴れたその先には、

「うそ、だろ」

「当たり前よ。私のバーサーカーは、誰にも傷一つ付けられやしない。最強のサーヴァントなんだから」

ひび一つどころか、爆炎による煤もない健在な黒甲冑。

二人の連撃に対し、たった一つの拳を撃ち下したかたちで仁王立ちとなる虎兜。

彼が唯一持つ、無二である絶対の異能が、月明りの下晒される。



魔力が、アーチャーの放った神秘の残滓が無散していく。振り貫かれた黒塗りの手甲。

傷はなく、焼け落ちた様子もないそれは無傷のまま。

英霊に対して現代の魔術がまったくの無為でしかないのだとしても、アーチャーが放つ弾丸は彼の生きた時代、彼が培った獲物であり業。つまり、現代を越えた“神秘”を宿すもの。

よって、ここに判断材料が三つ用意された。

「物理、魔術、宝具——の類でもキツイでしようね」

そんなのありかと口をついて出かけた憤りを呑込む。

狂戦士が持つ不条理。理不尽を体現する能力の歪さは、イリヤスフィールの言葉通り“最強”の名に恥じない能力だった。

「ごめいさつ。この世界に“産み落された”ものはみんな、彼の拳に抗えない」

彼女の言う例外なくという定義がどこまで真実なのか。その程度を知ることには出来ないが、事実として無機物であろうと魔力であろうと、さらにはアーチャーの攻撃ですら無力化されている。

ただ“拳で殴る”という悪夢にも思える手段。

額面通り受取るのなら、彼の拳は“触れたモノに問答無用で死を与える”という、言葉にすれば冗談のように馬鹿げた能力。

「っ、だからって」  
横に立っていた凜の気配が、言葉に反して一步後ずさった気配を感じた。

だが、それも当然だろう。触れば負けるという相手に、一体全体どう戦えというのか。

「かわいいわねリン。でも素直になったほうがおりこうよ」

いやそもそも、コレを前に勝負を自体挑む事が間違っているかのように見える。

蓮も凜も、逃げ出さないのは偏にそれがどういう結果を生み出すの

かを理解しているから。背を向ければ、己の末路は彼の足元に積まれた砂となると。

故に逃げられないし、ただ単に逃げるつもりもない。

真正面からあきらめないを受け止めていた彼等に対し、やはり、少女は冷め切った目で見下ろしていた。

「——つまらない意地をはるのね。いいわ。なら望みどおりにしてあげる」

「■■■■——■■■■!!」

振り下ろされる白く小さな腕。その主の号令に従い、咆哮と共に狂犬が飛び出す。

彼が両腕に宿す「絶死の理」を覆す術などこちらにはない。だが、魔術師が死を受け入れている存在だとしても、無条件にそれを受け入れ諦めるのでは訳が違う。蓮も凜も諦めていないし、思考は決して停止させない。

考えろ。

ただその一言を頼りに脳と魔術回路を限界まで酷使用する。

その間はまさに僅か、数秒にも満たない思考の海のなせる業。だが、目の前に迫った狂戦士はその腕を振り絞っている。猶予などいくらもない。

そこへ——

『スルース・ワルキューレ』  
『戦雷の聖剣!!』

極光を放つ聖剣で空間を薙ぎ払ったセイバーが、空いている左腕で己の主を抱え、傍にいたリンをアーチャーが回収して一息に距離を空けた。

「セイバーッ」

「ただの目暗ましです！　あまり効果は望めませんっ」

配慮する余裕がないのだろう。遠慮のない全力の移動は、強化している筈のこちらが舌を噛みそうになるほどの高速運動。遅れて横に着地したアーチャーと凜を見れば、彼女も若干額に汗を浮かべていた。

「アーチャー。貴方に何か策は」

「……ねえな。少なくともあんなクソふざけた能力覆すなんざ、そう簡単に来れる芸当かよ。どう考えてもこの場じゃ不足も不足、なんも足りてねえ」

「逃げるしかない、か」

そもそもココに残るといふ選択肢を考える方がどうかしている。だから心のどこかで背を向けるべきじゃないと訴える己が異常なのだ。

もちろん、それを行動に移そうとするほど無鉄砲でもないつもりだ。アーチャーの言うとおり、先程まで自分たちがいた場所の舗装を“砂場”に変えている異常な光景を確認すれば、可か不可など論ずるまでもない。

「ムダよ。ここからはだれも逃がしてなんかあげない」

そして、論ずる暇など与えないというように、狂戦士が頭上より落ちてくる。

その様はさながら砲弾が降り注ぐ様そのもの。彼が着弾した地面が衝撃によって砂に変えられる傍から巻き上がり、視界を潰しかかってくる。

「クソっ、遠坂！」

人気が無いといつてもここは住宅街、道のど真ん中だ。その巨体も合わさり、二組の主従は分断される。

「さがってくださいー！」

砂煙の向こうから深紅の双眼を輝かせた虎兜がこちらを覗きこむ。続いて放たれる拳撃は相手の間合いの内、回避するには半瞬遅い。

判断は素早く、覚悟を決めた様な表情でセイバーがその手に持つ聖剣で防御姿勢を取る。が、

「——たく、人使い荒すぎだろ」

その凶弾の基部。拳より上の甲冑部分に万遍なく放たれる、都合二十もの魔弾。その衝撃の幾らかは狂戦士の持つ理によって霧散したが、残る魔弾の炸裂がその上体を逸らした。

「オイオイオイ、ただだけ魚喰ったらそんなナリになるつつうんだよ」  
固すぎだろとぼやいている声は右上方、近くの民家の屋根で両手に

銃を構えていたアーチャーのものだ。

「おうおう、おつかねーの。何だよ怒髪天でも突いたってか？ ハッ、生言わせんなよ黒甲冑」

思わぬ横槍を受けた形になった虎兜は、その視線を横槍を入れた当の本人であるアーチャーへと移している。理性を無くしている筈のバーサーカーに指向性のある怒りに類した感情があるのかは不明だが——いや、それより、この場ではもつと重大な情報がある。

「衛宮君！ こっちは大丈夫よ。それより——」

無敵に思える能力も、無欠ではないということ。

拳から肘にかけて無傷の甲冑に対し、二の腕、肩にかけての被弾カ所がアーチャーの攻撃を受けてくすんでいる。罅といった鎧を破壊するまでではなかったが、だとしても。

「ああ、利いてるっ」

無敵に思われた鎧であり、矛である狂戦士の能力、その発動の前提条件。即ち彼の腕、恐らく拳から肘にかけて纏う“絶死の法”に触れるということ。まだ判断材料は少ないが、それでも光明が見えたことには変わりない。

「……なにをよろこんでいるんだか。そんなもの」

だが、己が最強と謳った英霊の欠点が露呈したというのに、少女の言葉、そこに宿る感情は変わらず零度のまま。

「ぞうがアリにかまれて痛がるわけじゃないじゃない」

その言葉に答えるように、狂戦士が崩れされた体制を立て直す姿にはまるで堪えた様子がない。

加えて——

「傷が、塞がっていくっ」

破損させられなくとも、僅かに与えたはずのダメージが癒えていく。まるでそれは一つの映像を巻き戻すような不可解さ。

だがそう、考えてみれば納得のいく話。彼有能力が物理だけでなく、概念的なもの、魔力や神秘の産物さえ無力化してみせている。なら、ダメージを与えられたという“事象”を“殺せた”という不条理が

実現したとしてもおかしくない。

「いえ、ですがこれなら、戦えないわけではありません」

しかし、ダメージを問答無用で無効化されるわけではないのだ。

ご都合主義ここに極まりりといった、まさに理不尽の塊のような法、彼の能力でありルール。

確かに驚異的な能力である事には変わりないが、手も足も出ないという訳ではない。戦いようによっては足を縫いとめる方法などいくらでもある。

「てえわけだ。即興上等、合わせてやるよ。派手に暴れてようや」

古めかしい拳銃を二丁、構えといえば雑なそれが様になっているアーチャー。

「言つてくれますね。そちらこそ、遅れないでくださいよ」

聖剣から戦意を放つように雷光を瞬かせるセイバー。

二騎の英霊が互いの得物を構える。その姿は垣間見た勝機を逃さんと猛るように、「絶死の法」を持つバーサーカーに欠片も臆している様子が無い。

きっかけはどちらからだっただろうか。

まったく同時に見える拳のきらめきと銃声が合わさり、迫る虎兇の狂戦士を彼女等は迎え撃つ。

「じゃあ」

「ええ、私達も」

その姿を改めて確認し、完全な劣勢ではないと判断する。

少なくとも、逃げの一手しかなかった会敵当初に比べ、セイバー達はバーサーカーをその場に押し止めている。

三騎の英霊、それもバーサーカーと相対して際立つのは、まず何よりもその爆発力。空気すら圧殺しかねない猛攻とそれに組み合わせる死を与える拳撃だ。

故に、コレに勢いをつけさせるの下策。可能な限り攪乱し、足を止めさせ、攻勢でありながら守勢を取らせるために地に縫い付ける必要がある。

現状、〃真名解放〃ではなくとも宝具による攻撃をかき消されたのだ。有効か見極められない状態で先走れば無駄撃ちでしかないだろう。

「理解できないわね。この期におよんでまだはむかおうなんて」

その為に、マスターである蓮と凜が選んだのは聖杯戦争の常道である英霊同士の決着による勝敗ではない。その憑代であり、この世に存在しないサーヴァントを維持させているマスターを狙うというのがある意味で当然の帰結だろう。

「あら、なんで結果が決まってるのかしら？」

「だな。悪いがコツチは二人掛かりだ。子供相手でも命を狙ってきたんだ加減はしないぜ」

むろん、蓮にイリヤスフィールを殺すつもりはない。あくまで無力化、その後で令呪の破棄なりバーサーカーとの契約を破棄させればいい。

これを凜が聞いたのなら何を甘い事をと一蹴されるのだろうか。

「なまいき。いいわ、別に二人でも……遊んであげるから、さつさとかかってきなさい」

そしてこちらの挑発をそのまま受け取ったのか、マスターである少女が魔術師としての己を起動させる。

「っ、嘘だろ。人間かアレ」

服の上からさえ紅く光り浮かび上がる独特の紋様は魔術回路だろうか。全身に限なく施されたソレは魔術刻印のそれにも思えるが、そもそもの魔術刻印は代を重ねた魔術師が研鑽した成果の結晶。

「噂には聞いていたけど、相変わらずアインツベルンの考える事は頭おかしいわね」

この冬木の管理者でもあり、6代目当主の凜が実父より移植された魔術刻印でさえ左腕に刻まれたもの。それだけでも相当であり、移植時拒絶反応による激痛が伴う事も考えれば、イリヤスフィールのそれは正気を疑うレベルだ。

こちらの驚いた様子にクスクスと歳相応に無邪気さを感じさせる笑いが降りかかる。だが、目の前の少女のそれは明確な殺意を織り交

ぜたモノ。

相手は子供であろうと魔術師、聖杯によって選ばれたマスターなのだ。怯んで時間を浪費している場合ではない。

「っ、俺が突っ込む！ 遠坂は」

「ええ、バックアップの心配はしないで」

『arrest hour!』

同じく遠坂が彼女の始動キーを唱えるのを耳に捉えながら、一息に強化した足でアイリスフィールとの距離を縮めにかかる。

数日前——感覚では昨日——は死にかけた身体が、まるで平常時のように好調に魔力を循環させている。

「飛んでっ!!」

そこへ背後から声と共に迫る弾幕。援護というにはこちらも巻き込む気ではと思う程の物量にものを言わせた魔弾の壁を、近くの電柱を駆けあがるようにして回避する。

強化しているとはいっても、対象となるのは身体機能、体感時間といった自己にあるもの。その為、重力制限を無視するような類ではない。が、電柱と電柱の間くらいなら跳躍の足場にする程度造作もない。

「ッシー・もら——」

突き出ているボルトを足場に、登るのではなく一気に蹴り落ちる。

その先、常人の近くを超える移動をもって少女の頭上を取り、

「そんなわけないじゃない」

「っ、壁か!？」

見えない壁に隔てられるようにして落下が阻まれた。

至近距離。互いに表情を確りと確認できる距離での停滞。その致命的な隙を、横合いからより魔力を練られた魔弾が飛来する。

「ダメかつ、衛宮君!」

威力としてみるなら屋上で見た時のそれより数段上に練り込まれた「ガンド」を少女が取り巻く壁がくもなく受け止める。こちらの物理的なものに比べ、凜の方向へ手を添えていたが、効果が無い事に変わりはない。

「へえ。割と簡単な魔術ね。こう、かしら」

そして、視線だけをこちらに向け、空いている右手を真直ぐ伸ばす。親指と人差し指を伸ばした、その独特の形。

「あぐ!?!」

直ぐに理解して離脱するが、もともと至近距離だったこともあって回避は不可能。強化の上からだった事で本来受ける筈の呪いは薄い。少し体にだるさを感じる程度だが、地面を蹴って捌路を置こうとしたために踏ん張りがきかず、少女から大きく距離を離される。

「この感じは」

「リンと同じだって? でしょね。ちよつとクセがあるけどなかなか使い勝手はいい魔術ね」

凜の「ガンド」は「フインの一撃」とも呼ばれる物理的な威力を宿した呪いの塊。少女の言葉が演技でもないとするれば、今初めて行使したようにとれる。だが、仮にイリヤスフィールが魔術師として高位の術者であったとしても、見ただけで同程度の威力を持たせられるのかという疑問が残る。

そこへ、背後から響いた轟音と共に、間横を通り過ぎる影。激突と共に塀を粉碎したのは、バーサーカーによつて吹き飛ばされたセイバーとアーチャーだ。

「アーチャー!!」

「ボケが、なに、余所見なんかしてやがるっ」

セイバーを庇ったのか、両者とも吹き飛ばされたにしては、アーチャーの負傷が目立つ。取りわけ、色素が抜け落ちたように白く変色し、意思が通わないようにあらぬ方向に曲がっている右腕を見れば、彼が直撃をもらったのは明らか。

アーチャーがどういう手段でバーサーカーの拳に耐えたのか、彼等の戦闘に目を向ける余裕のなかった蓮達に知るよしはない。

だが、問題はもつと別の所にあり、この場で最も懸念すべきことがある。

「っ、レン!?!」

瓦礫と化した塀から出てきたセイバーと目があい。こちらを捉え



た彼女が目をむく表情を浮かべ、次の瞬間散らばった破片を吹き飛ばす勢いでこちらに駆けてくる。

だから、それで何が起きているかと途切れていた思考が符合する。ゆつくりと、本当にゆつくりと振り返える。

その間。まるで周囲が制止したかのように周りは静かで、こちらに向かつて叫ぶ凜やセイバーの声が酷く遠くに感じた。

「――」  
無言で立つ巖のような男。

セイバー達との乱戦の痕か、傷ついていた甲冑が目の前で徐々に修復されていく。その内、唯一変わらず無傷である双拳。ゆつくりと腰だめに構えられた手甲が、構えに従って擦れる甲冑が甲高い音を響かせる。

『今度は、俺の勝ちだな ■■■』  
「えっ？」

本来言語を失っている筈の目の前の何か。

それらが黒甲冑によつてこちらに向かつてかけたものだと、遅れてようやく認識でき――何故かこの時、思考は回避や防御といった行動をとらせなかった。

まるでその言葉その物が呪縛であるかのように、とても大切な、何か重要な見落としをしている様な違和感が思考を、身体を縛り付ける。

瞬きもせず、迫る黒い塊を前にただ立つ事しかできない不可解さ。

そして“絶死の拳”によつて、衛宮 蓮の意識に幕が引かれる。

走馬灯など流れる余裕などない。唐突に、一方的に押し付けられる生の終わり。

一瞬だけこちらになおも駆け寄ろうとする眩しい光が見えた気がしたが、意識が保たれたのはその瞬間だけ。

即座に訪れる無音の暗闇。次第に自我が？まれていく感覚と共に身体感覚は消え去っていた。

『——ああ。何とも情けない姿だな我が■ ■よ』

その刹那、とても耳障りな、心を乱す不快音を耳にした気がした。

まず始めに自覚したのは、浮遊感だった。

上下左右、それどころか自分がここにあるのかも不確か。いつそ虚脱感すら感じるほどの空間は白い。そもそも、この体に視界と呼べるものがまだ機能しているのかは不明だが、まるで自分が死んでいるかのように感じ——何を馬鹿など自嘲する。

死んでいるように、ではなく、この命はとうに“終わって”いる。

自分が最後に見た物。黒甲冑の拳が目の前に迫るその時を鮮明に覚えている。アレを受けたのは間違いなく、なら生きている筈がないと理由を考える前に理解してる自分がいた。

あの術理、その絡繰りが分かった訳ではないが、そうだという確信が己の中にあった。

そうして、己の現状を把握すれば、次に浮かんでくるのがあの後、自分が死んだ後に凜たちがどうなったのか。

最悪のケース、を想像しなかったわけではない。考えられる、ありうる場合として彼女等が敗れ、同じ末路を辿るということもあるだろう。

だからこの胸にある感情は、ある種信頼によるものだ。

きつと彼女達なら、アイツならきつと生きている。そうだと信じていたから、例え理不尽な死だったとしても、取り乱すことは少なかったのだと思う。

だから、この時の自分は致命的に無防備だった。

「——ああ。何とも情けない事だな我が■■■よ」

途端に風景が風に浚われるように、白い世界が黄昏色に染まった。

突然の声に驚く暇もなく、景色が変わり、消失していたはずの感覚が戻ってくる。

例えばそれは目の前に現れた砂浜に打ち寄る波の音であったり、浮いていた筈の足が感じた砂に沈み込む感覚だったり。

そして何より、開けた視界が目の前の広がる風景よりも異質だと捉

えてしまった影。

ボロ外套に身を包んだ稀薄な男の姿。

いや、稀薄、というのは少々語弊があるかもしれない。確かに、ここにいと認識しなければ気にも留めない、或いは意識から零れ落ちてしまいそうになるほどの存在感。だがそれは一度気付けば、服に付着した炭のように、対面した者へと拭いされない違和感を植え付けられる。

思わず誰だとかぼれたのは自分のものだったか。

身構えるこちらを眺めていた影法師の男は、まるで呪詛を謳い上げるように、仰々しい動作で深くかぶられた外套の奥から言葉を洩らししていく。

「誰か？ ああ、その問いに答えるのも何度目だろうか。今こうして思うに感慨深く、今回の出来事が無ければこうして感傷に浸ることもなかったのだろうか——ああ、すまん。つい懐かしさにこのようなことを」

予想に反し、外套の男は口数が多かった。多いというより途切れないと形容した方が確りとはまるような言葉の羅列。一つ一つ、その並びが呪文のように、耳にしているこちらの内が削られる様な苛立ちを感じさせながら、彼は名乗りを上げた。

「メルクリウス。名など私にとつて掃いて捨てるほど、それこそ星の様にあるが……君相手なら此方の方が妥当かな」

とてもではないが人に名乗るような、まるで作法の無い名乗りに思う所はある。あるが、ふざけてるのかというこちらの言葉に対し、男は気にした風もなく、言う傍から言葉を被せていく。だからか、遮るのも無駄だと悟り、彼の好きにさせていた。現状、彼の言葉を遮ろうにも手が、離れようにも足が動かないということもあった。

「さて、こちらの名乗りも済んだところで、本題に移らせてもらおうか」

そもそも、話題を脇道に逸らさせていたのはどこのどいつだとか、そんな抗議が通る事もないのだろうか。

「君は、自身の身に起こった事を正確に思い出せるだろうか」

だから、そんなまるで先程自分に起こったことを見ていたかのよう  
に語りかける男に、初めて意識を真直ぐと向けた。

「難しく考える事はない。断片でもいい。要はパズルと同じ。自身の中  
に思い浮かんだピースを繋ぎ、己に起こったことの顛末を詳らかに  
する。話はそれからでも遅くない」

先程自身に起こったこと。

思い出すのは苦痛を伴ったが、一言で言えば単純な言葉。

即ち、自分は「殺された」のだということ。

「然り。では、君はその後どうなったのか。想像できるかね」

なら今こうして見ている光景は何なのか。まさか人は死んだ後でも  
夢を見るものだと思っっているわけではないが、死んだ後の事など誰  
も知る筈がないのだから証明する方法など当然ない。

そして、目の前にした怪奇現象を真剣に考察するのも馬鹿らしくな  
り、つい、言葉通りの情景を思い浮かべる。

凜は、あれで根は情に厚い人間だ。知った顔がなくなればいくぶん  
動揺するかもしれない。だけど自分は彼女の魔術師としての顔も  
知っている。だからそれほど心配はしていない。抜目の無い彼女の  
事だ。守勢に回れば狂戦士程度、仕切り直すなど造作もないだろう。

彼女の傍にはアノ男アーチャーがいた。

軽薄そうな男で、人となりを知るにはまだ碌に話してもいないが、  
不思議と信頼している。理屈じゃない。あの男は戯れが過ぎるきらい  
もあるが、結果として最後には廻りまわった必ず主の為に動くのだ  
と。

セイバーは、あの夜から拒否しているこちらを守るために剣を取っ  
てくれた。期待に応えるどころか、こちらに何を望んでいたのかはま  
だ聞いた訳ではないが、悪いことをしたとは思う。出来るのならもつ  
と真剣に彼女と向き合えばよかったのだが。

こうして思うと、不思議と後悔は薄かった。未練がない、とはまた  
違うのだろう。心配が無いのもそれに一役かっている筈だ。

だからそれが答えだと、目の前の男に怯まず告げようとして、その  
答えをまるで知っているかのように、男は聞くまでもないと両断しに

かかった。

「いいや、答えは単純——全滅だ」

瞬間、心臓が止まったかと思う程の衝撃を受けた。

感覚の消失以前にこの体が確かなものであるかもわからないが、直視を避けようとしていた顔が、ここにきて目の前の男に固定される。

「そう驚く事でもあるまい。幼き頃からの知人、悪くは思っていないなかつたのだろう。近く、それも目の前で失つたとあつては自失するのにも無理は無かろう」

言われたソレは、あえて目を逸らしていた結果の一つ。

ありえない。信じている気持ちに偽りは無い。だがもし、万が一になくとも可能性が、と。思い至れば止まらない。マイナスの思考が外套の男によつて浮き彫りにさせられる。

「そして主達がいなくなれば憑代の失つた彼女等に生き残る術などない。例え一例外《アーチャー》であつたとしても、アレはおめおめと見逃してくれるほどやさしくはないよ」

つまりは契機となつたのは自身の「死」。

彼女が死に。彼が討たれ、彼女が倒れる。無理や直視させられた想像は輪郭を帯びていき、この目にその光景を幻視すらさせた。

いや、今こうして目の前にしている光景は自身による想像の産物ではなく、

「で、あればだ。君はそれを知り何をなす」

目の前に積まれた血の通わない三つの塊が何であるのか。確かめるまでもなかつた。

「今、君に提示されている選択肢は大きく分けて二つ。つまりは、諦めるか、足掻くかだ」

仰々しい動作で右手と左手を横に開く。あたかもそこに提示するナニかがそこにあるかのように。思えばコイツは初めからこちらを馬鹿にしたような芝居かつた挙動が多かつたと思ひ起こしながら、けれど意識の殆どは道連れにしてしまったらう三つの折り重なつたソレに向いてしまう。

よつて耳に届く言葉の束が、まるで砂嵐にさらされたかのように途

切れ途切れに聞こえてくる。長々しい口上が流れ、その最後、恐らく要点であろう彼が掲げる二つの選択肢が差し出される。

「前者は難しくはない。アレによってもたらされた終焉に納得し、受け入れ、ただ壺毒の断片としてもう一度消え去る。もしくは、待ち受けている絶望を理解し、無謀にも不動である極致の死へと立ち向かうか」

男の言っている言葉を理解した訳ではない。

そもそも言っている言葉の半分以上は意味不明だ。雑多な情報が多すぎるし、そもそも選択肢である筈のそれらは前提条件からしておかしく破綻している。消えようにも立ち向かおうにも、死んだはずのこの身を選びようがある選択肢などそもそも初めから一つの筈なのだから。

だが、それすら些末事だと、一層笑みを深くした男がゆつくりと掲げている内の一つを差し出してくる。

それが何であるのか。もし言われた通りだとして、確かにソレは自分が選ぶだろう選択肢だ。嘘や罠に塗れていると心が警鐘を鳴らしている一方で、その程度がどうしたと躊躇わず手を伸ばしていた自分がいる。

そして――

「そう。それでいい」

差し出された手を掴むのではなく、その掌の上で拳を作る。そこには何も無いが、例えるなら男の掌にのせられていたナニかを受け取ったような形。そして確かに、なにもない筈のそこで形を作った拳の内から、何かが自分の核に向かって流れ込む様な違和感を感じた。

背筋を走る悪寒から、咄嗟に振り払おうと手を大きく払った。が、視覚に何もなかった以上、その程度で振り払える筈もない。実際、手に何かに触れた訳ではないのだから。

では、今の不確かな異物が混入したような感覚は何なのだというのか。

「では、君の■■■■の■■として最初で最後の贈り物だ。どうかそのまま受け取ってあげてほしい」

息が荒くなつたような、過呼吸に陥つたように重く感じる身体。視線が低く、男から見下ろされる形になり、ようやく自分が蹲つていたのだと気付いた。

睨みあげるこちらを、男は満足げに観察している。

そう、先程からこちらを見ていた不快な視線の正体はそれだ。

目の前の男は相手と同じモノだと思つていない。そういつた者特有の冷たさと熱、好奇心と期待感が混ざつた瞳をしている。いくぶん達観したような色が強いが、男がこちらをモルモットのように見て接していたのだと思えばこの苛立ちにも納得がいく。

なら、今この身に陥っている不快感も碌なものである筈がない。

「そう邪推したのではないだろう。親の情というのは中々に偉大だと痛感した為の、謂わばコレは彼の真似事のようなもの」

逸る鼓動はまるで耳元で鳴り響くかと思つて程うるさい。

何とかしてこの異物を摘出しなくてはと理解しながら、しかし体は僅かも抵抗が出来ない。それらしく動いたのは内に走る苦痛から、微かに身悶えた程度。

「さあ、我が代替よ。今度こそ我らの悲願を——」

そして頬についたざらついた感触に、身体が完全に地に伏したのだと気付く。一步、目の前で踏み締められた足音と視界に移る外套が、男との距離を物語っている。頭上からより大きく、覆い潰すようにせまる圧迫感が動け動けと身体に警鐘を鳴らし——そうして、二度目の意識の途絶を味わつた。

舞い上がった塵が霧散し、その中から一つの影が現れる。

「うそ、でしよ」

粉塵の要因となつた爆砕の着弾点。そこにさきほどまでいたのは二人の男。

片方は自分の小さい頃からの幼馴染であり、性格は中々に歪んでいくが悪運が強い奴で、

「あーあ……意外とあつけないのね」



間違つてもこんな無骨な大男ではない。

「っ」

「そうこわい顔しないでよ。私は何もまちがった事をしていない」

そうだ。彼女は、イリヤスフィールは何もまちがった事はしていない。聖杯戦争に参加する一人のマスターとして、取れる最善手を選んだだけだ。

そもそも、初めにサーヴァント同士の決着をつけるでもなくマスターを狙ったのはこちら側。それが偶発的とはいえ、立ち位置が変わり狂戦士に強襲されたのだとしても至極当然の流れだろう。

固執するのではなく、手近に、確実に屠れるものから削っていく。合理的な手段を選んだに過ぎないのだから。

「——いや、それでもっ」

考えろ考えろと止まりそうになる思考に鞭を打ち、ひたすら馬車馬の如く回し続ける。

こちらから見てバーサーカーの向こう、セイバーは目の前でマスターを失った衝撃からか、どこか固まっているように見える。アーチャーは、問題ないだろう。まだ聖杯戦争が始まったばかりだが、アレがその手の感傷に手を鈍らす性質であるとは思えない。それに、どちらかといえばダメージがデカいのはこちらの方だという話で。

「っ、アーチャー!!」

だからこの場は敗色濃厚と判断し、即座にアーチャーに撤退の意を伝える。ただ名前を呼んだだけであろうと、それだけでこちらの意をくんでくれたのか、彼は脇にセイバーを抱え、負傷している筈の腕で狙いも出鱈目にバーサーカーを牽制する。

「無駄よりン。言ったでしょ。ここからは誰も逃がしてなんかあげないって」

「くそつが！ オイてめえ、ボケツとしてんな振落すぞ!!」

牽制の筈の銃撃が、狂戦士に対して有効に働かない。

だがそれも当然の話。アーチャーの銃撃が曲りなりにも牽制として働いていたのは、大口径の銃を形状から見て取れる弾倉以上の弾数と、そしてそれらを二丁も自在に手繰る彼の射撃の腕前によるところ

が大きい。だから無事な片手でセイバーを抱え、負傷した腕で乱射するという曲芸じみた行為がどういう結果になるかなど論ずるまでもない。

故に、

『Fixierung<sup>狙え</sup>, Eilissalve<sup>一斉射撃</sup>!』

腕に刻まれた魔術刻印、そこへ過剰供給で熱暴走を起こすのではという程魔力をこれでもかと流し込む。その結果が目の前、狂戦士へ目掛けて放たれる魔弾の壁。

物理的に破壊力を持たせるまでの技量を持つ凜だからこそ可能な魔術であり、いかにサーヴァントといえど無抵抗で正面に構えるには難のある弾幕。

「■■■■ア!!!」

しかし、そのことごとくを狂戦士は一考もせず猛進する。

わずかに、本当にわずか、その分厚い装甲に着弾した瞬間だけコンマ単位でぶれている様に見える。

つまりは戦車に石を投げつけているようなものだ。わずかに揺れたとしても、巖のような虎兇の足は止められない。

「ごっの!! なめるんじゃ、ないわよ!!」

それだけの小さな足止め。だがそうだとしても、一撃一撃が小さな揺れ幅しか生み出せないのだとしても、数にものをいわせればその一歩を押し止めることは出来る。

「よお、お勤め(苦労さん)」

「無駄口叩かないで早く代わって!」

そして横に到着したアーチャーの腕から抱えられていたセイバーを奪うようにしてひったくる。

この非常事態に相も変わらずぶれない態でいるアーチャーは、空いた手にもう一度銃を握り、負傷している方と合わせて迎撃を開始する。その様はお世辞にも会敵当初の冴えは見れないが、悔しいが自分の魔弾より遙かに上なのだから、これが適材適所だ。

「アンタも、呆けてないでしっかりしなさい!」

「——っ」

しつかりしろ、と焦点のあつていなかたセイバーの頬軽く張る。活力が戻ったという程ではないが、自力で立てはするだろう。

「いい、今状況を把握してるのは貴方よ。衛宮君とのパスはっ」

マスターとサーヴァントはその主従関係により、召喚の儀式より目に見えないパスが繋がっている。よって正確ではなくとも大凡危機的状况であるのか程度は感覚で見取れるし伝わる。つまり、バーサーカーの向こう、破碎されたアスファルトと砂の山の下にまだ生きているかもしれないという微細な可能性もある。のだが、首を下げて目を伏せたセイバーの姿が明確に答えを告げていた。

「そう。なら、他に選択肢はないわね」

悔やんだのは一瞬だけ。

喧嘩もするし、笑い合う事もあつた。決して憎く思っていた訳ではない。ないけど、だからといって今は必要以上に感傷的に浸っている時ではない。否、感傷に浸っていられる暇などない。

「■■■■——■■ア!!」

「アーチャー!」

「わーってるって、の」

人使いがあらいとぼやきながらも的確に応戦してくれるアーチャーの牽制を頼りに、迅速に後退していく。その中、やはり後ろ髪を引かれるのか、セイバーの動きはどうにも鈍い。

「セイバー! もっと急いで」

マスターを愚直に忠義を尽くしてくれる従者というのは本来貴重だ。そもそも英霊などという最上位の魂、癖があるのが当然で殿を務めているアーチャーでさえましな方なのだ。

けれども、今この場でその美德を讃えている場合ではない。通常なら彼女にもバーサーカーに対して応戦してもらいたい所だが、今の状態の彼女がああ虎兇と戦ってくれたとしても、この状況へプラスになるとは思えない。

「オラさっさとすすめ、ちんたらしてんなっ」

「っ、ごめんなさい」

そうしてアーチャーを後尾に本格的に撤退仕様と反転しかけた時

だ。

バーサーカーの向こう。瓦礫の山より、黒い影がゆつくりと立ち上ったのは。

その影は見覚えがある。間違えようもない。

服はボロボロだと遠目でも見て取れるが、彼は立ち上がるだけの状態にはある。

「衛宮君！生きて——！？」

ならばならば、この場で撤退という選択肢は彼を見捨てるという行為で、だからこそ転進することに異論を唱える者などいない。

「どういうことかはさっぱりだけど……生きているならやる事は決まっているわ。バーサーカー！」

「させません!!」

まず飛び出したのは彼のサーヴァントであるセイバー。銀髪の少女の従者である虎兇の方が蓮の距離は圧倒的に近い。が、その程度がどうしたと気にも留めた風もなく、彼女は文字通り風となりこの狭い道を踏破した。

まさに一瞬。

その大凡のステータスからか、セイバーが速力に優れたサーヴァントだということは読み取れる情報として知っているが、コレは確実にその情報を越えている。

大きく振り被られる黒く大きな拳。着弾は大砲の如く、火力はただの爆砕とは比べようもない凶悪なそれを、しかしセイバーは雷光を湛えた聖剣を下段にひいて構える。瞬く光量は今までの比ではなく、ここにきて出し惜しみのない全力を投入しているのだと傍目にもわかる。

いざ、と必滅の拳に迎撃の覚悟で臨む彼女へ、横から思わぬ手が伸びた。

「っ、マスター!!!」

助けに駆けつけたセイバーを、何を考えたのか蓮は横へ突き飛ばす。当然、その後には迫る拳が止まる筈もなく、目標も変える筈もなく狙い変わらず彼の頭上へ向かって振落されていく。

「今度こそ、直撃よ。少し驚かされたけど。さ、次はあなたの番よ、リン」

バーサーカーの拳が、蓮のいた壁ごと粉碎し、触れた傍から砂になり余剰で破片と混ざり飛び散る。

何故彼がセイバーを突き飛ばしたのかは分からない。だが、あの至近距離でただの人間が無事でいられる要素などどこにもない。

「なんでっ」

まるで理解が追い付かないと思考に続いて突き飛ばされた状態から体が止まっているセイバー。

先ほどとは違う、間に合ったのだ。駆けて、全力で走り、決死の思いで虎兇の拳に相対した。

なのに、

「さあ、バーサーカー。まずはその女から始末なさい」

「まずいつ、アーチャー!!」

遠くで凜の叫びが聞こえる。が、間に合いはしないだろうし、一撃でこの狂戦士をどうにかできるとは思えない。

役に立てなかった騎士など不要。

結局、自分は何のためにもう一度この地獄に呼ばれたのか。結局はまた何もできない絶望を味わうだけなのかと、抵抗する気力も失せた彼女は力なく頭を垂れ――

「――」

何故か、いつまで経っても彼女にその生の終わりを告げる幕引きがおける事はなかった。

「なんで、だってバーサーカーの攻撃はっ」

いや、正確には、伏せて視界が狭まっていた彼女を除き、この場の誰もがただ一点を凝視し固まっていたのだ。

「生きて、る」

埃と爆砕の影響か、皮膚の所々に擦れたような傷が見れたが、あの一撃に曝されたというのなら不可解に過ぎる生還劇。

「――よ、――れ」

生きている。言葉も喋っている。

本来なら手放して喜ぶべき場面だろう。なのに、なのになぜ、言いようもない不安感にかられるというのか。

「何をやっているのっ、さっさとかたづけなさい!!」

「レン!!」

バーサーカーと彼の距離はほとんど変わらず、そこは死地。虎兜の間合いだ。

返す体の動作で振り上げられた拳。次いで放たれた一撃はこれまでの比でなく速い。だが、距離というのなら彼女とて同じ、付け加えるなら、速さでセイバーが劣るということはありえない。

故にこの程度と、瞬間的に最高速にギアをあげようとした彼女はしかし、その寸前、守るべき目標である少年が目の前より消失した。

「え?」

不発する拳と、急な展開に辛うじて制止を間に合わせた彼女が前に傾きかけた体を無理やり修正する。

どこだと、失った目標へと視線をめぐらせた両者だったが、先に見つけたのはセイバーだ。

「■■■■!!」

「な!」

背後より狂戦士の兜を力の限り殴る蓮。その膂力は巨躯の虎兜に對しては明らかに力不足。だが、その鈍く輝く黒い拳はいかな強度をほこるのか、殴りつけたバーサーカーを転倒させた。

「押し、勝った? ……うそでしょ。立ち上がったって言っても」

この場の誰もが目を疑う光景。如何に強化の術を持つ魔術師とはいえ、相手は痛覚と無縁の狂戦士、加えて歴然の体格差がある二人において、ただの魔術師である蓮がこのような芸当が可能だと誰が予測できるだろうか。

「うそ。まぐれ……ううん、そんなことありえないっ! 何を遊んでいるのバーサーカー、そんな死にぞこない、さっさとやっつけなさい!!」

「■■■■オオオ!!」

「よく解らないけど、これなら……ってなによアーチャー」

続いて放たれる狂戦士の拳のラッシュ。その一撃一撃はいかな存在であろうと致死量になる必滅の一撃。ならば当然コレは好機だろうと、援護に回ろうとした凜の肩を、傍らにいたアーチャーが押し止めた。

「今はふざけている場合じゃ」

「下がってな。ありやまだ寝ぼけたままだろ」

よく見ろという彼の言葉に従い、蓮の姿を確認する凜。

遠目に見ても、バーサーカーを相手取る彼の速度は尋常ではない。強化した視力と魔力の残滓でようやくその軌道が読める程度。攻撃の際にぶつかる影響で捉えられる一時的な制止で、彼がようやく見て取れた。

「なによアレ、傷が」

一撃でも喰らえば敗北する拳。ということとはつまり、彼は最初の一撃以降、目で確認した限りでは一撃も、それどころか掠りもしていないのだろう。

しかし、制止する彼の残像には、まるで服の内側に負傷を受けたように衣類が徐々に赤いその面積を増やしていく。傷らしい傷はない——いや、初めにあつた頬や腕といった露出部分に見られた傷が徐々にだが薄れているように見て取れた。

傷は癒えていくのに出血の跡が残るといふ異常。つまり恐らくは、身体が異常な速度で再生されているということ。限界を超えた行使に悲鳴をあげた体が壊れるそばから、彼の中の何かが故障箇所を元に戻しているということだろう。でなければあの出血と消えていく傷の説明がつかない。

「仕組みはよく解らんが、どう見ても正常な人間の反応じゃねえだろ。いいか悪いかはともかく、だ。あの状態のままにしていけない展開が待ってます、なんて都合よく事が運ぶとも思えねえ」

「だったらっ」

こんな所で悠長に話している余裕はないだろうと吠える凜に、そんな事解りきつてるといわんばかりに気だるげに、彼は傍らで事態の更改取り残されていたセイバーの背を蹴った。

「つてわけだ。オラ、ボケつとしてんなよ駄犬」

「アーチャー!? 何をっ」

「噛みつくのは後にしろつてんだよ。テメエのご主人様がもたねえ。見りゃわかるだろ、さっさとアレ止めてとんずらすんぞ」

恨めしそうに蹴られた背中を押さえていたセイバーだったが、視線は主である蓮とアーチャーへ二回ほど行き来し、天秤が傾いたのか彼女は主を救うべく全力で駆けていった。

「たく、動くのが遅えんだよ」

そして後衛に控える凜を残し、三騎の英霊とただ一人の魔術師はぶつかり合う。状況はバーサーカーと蓮を中心に、既に人の認識を越えた域に上っている。

バーサーカーが拳を放つ。

その拳を避け、視覚から同じく拳を当てる蓮。

いくら人を越えた動きをしているといっても、一撃目の虚をついた動きを除いて、蓮の動きは酷く単調なものだ。

ヒット&アウェイ。

基本的な戦術というものは、それだけ検証がされているということ。

同じく“狂化”で理性の働かないバーサーカーもそうした意味では単調な攻撃手段になるのだろう。だが、ただの人間と英霊では、その経験が天と地ほどももの差がある。如何に本能で突き動こうと、それだけで勝れるほど彼等の溝は浅くない。

そう、遠目で観察する猶予があつた凜だからこそ、その事実がよく解る。本能で立ち回る。その印象の通り、今の蓮は意識を失った状態だということ。

正確には理性を手放したからこそ、回避運動がより反射と直結しているのだろう。運動速度は時間とともに上昇しているが、明らかにスベックを越えた動きは試運転もなく手綱を手繰れるものではない。寧ろ手放す事で状況が上手く型に嵌っていると見るべきだ。

「でもこのままじゃっ」

だけどそう。状況は三体一数の優勢を持つても覆しきれない。押



しているのは間違いないのだ。けれど、その中核である蓮との意思疎通が図れない以上、残る二人は必要以上のアプローチが制限される。数値で言えば圧倒的に有利であろうと、連携が取れないのなら烏合の衆と変わらない。

ならばこの状況を好転させるにはどうすればいいのか。

答えは二つ。

一つはどうかして蓮の意識を取り戻すこと。

ある種の暴走状態に近い未知の術の行使。放っておけばどうなるか、十中八九碌な事なら合いと断言できる。だから、優先順位はともかく、これも間違いなく解決しなければならぬ。

二つ目は虚をつき、当初の方針通りこの場を離脱すること。

そもそも難敵であるバーサーカー相手に虚をつくというのが無理難題。しかし優位に立てない以上、蓮の容態に経過を見る余裕があるかも不明な以上これも早急に手を打つ必要がある。その際はあえて蓮を気絶させてでも引っぱり出すつもりだ。

ここまでは考えつく。いや、正しくは二つとも選ばなくてはならない選択肢だ。順序が前後しようと思えば必要がある。が、現実問題として、今この状況を覆すには手が足りないというのが実状だ。

持ち歩いている「宝石」達の感触を確かめる。小さい頃からコツコツと魔力を蓄積させてきた彼女のとっておき。

その数十。

一つ一つが消耗品であるが故に、コレは本来使いどころを慎重に選ぶ必要がある。あるが——目の前で戦っている三人の姿を視界に収め、そんな打算は瞬時に捨てた。

手が足りない？

いいや違う。手ならここにある。

力が不足するのなら、補えばいい。足りないのなら余所から持つてくる。魔術師の常套手段だ。

狙うは中央の乱戦を飛び越え、その先にいる銀髪の少女に。それは蓮が先に取った手段だが、自分がああ混沌とした戦いの中に飛び込むより遙かに確率が高い。問題は、魔術師として、遠坂 凜がイリヤス

ファイルにどこまで迫れるということだが、それ以上の思考は無為な行為だ。

「5、——4」

カウントダウンと共に姿勢を低く、動かす視線は最低限に周囲を窺う。焦って回路を逸らせれば計画は水泡に帰す。慎重に、かつ瞬時に行動に移せるよう、徐々に徐々に魔力を注いでいく。

「2、——1っ」

さあ、次だと、絞りに絞った弦が悲鳴をあげるように、軋んだような音を幻聴し、利き足から踏み切ろうとした時だ。

一発の銃声が、混沌とした夜を切り裂くように辺りに響き渡った。

「っ、だれよこんな——」

銃声といえばアーチャーだが、確認した彼も周囲を確認している事から除外される。第一、その音は彼が持つ銃と比べて明らかに発砲音が異なる。

襲撃となればアサシンが該当するが、蓮から聞いた情報では今回のアサシンは女で武術使い。暗器はともかく銃撃という線は考えられない。

視線は上下左右、強化した視力を使い確認していく中、その先は前から背後、坂の下の方へと下っていく。

そして坂の下、こちらへとゆつくりと歩んでくる撚れたコートを羽織る男の姿を捉えた。

火のついた煙草をくわえ、右手に持った単発式の銃から空になった薬莢を取り出して投げ捨てる。

その姿があまりに自然で淀みなく、同時にこの場では誰よりも異質で、考えてみれば「彼」が此処に来ること自体は想定できたことの筈だった。

「———やあ、大きくなったね。イリヤ」

蓮の養父である、衛宮 切嗣の姿がそこにあった。

## 境界

### — Break of day —

目の前に広がる景色がこうも現実と乖離していると、人もそれに倣うように無になるのだと改めて実感した。

茫然自失放心、記憶に残る光景とあまりにかけ離れすぎて、虚脱しかける思いだった。

何が、と問われればそれは、

「どこだよ、どこ」

夕暮れに染まる水平線と砂浜。

自分の記憶が確かなら、と思い浮かんだのは巖のような漆黒の鎧に身を包んだ狂戦士。その理不尽な暴威の前に、自分は討たれたはず、だ。

だとしたら、ここは死後の世界なのかと問われれば、それは答えに窮する。つい最近似たような経験をした気もするが、ここは恐らく、多分違うと断言できた。これも何が、と問われれば答えに困るのだが、あえて言葉にするのなら、どこかここは「温かい」のだ。

例えば暮れていくはずの陽光。

打ち寄せる波と共に運ばれてくる潮風は、そこにいる者を害するのではなく、寧ろ包み込むように柔らかな風だ。

だから不思議と警戒感が持てなかったし、ここが何処だと慌てる気にもなれなかった。

そんな時だ。波音以外に風に乗ったその旋律は、微かであっても耳に届いたのは。

「——歌、声？　こんな所で」

不思議と鼓膜から脳へと響くように訴える音。だが、煩いだとかいう不快な音ではない。寧ろ心が引かれるように、己の足は意識を外れて知らず音の下へと歩きだしていた。

— s a n g , ■ ■ , s a n g , ■ ■ s a n g .

英語、ではないだろう。学生の身だが、これでも不真面目な成績だったわけではない。いや、文武両道品行方正を地でいく学友のように生真面目だったわけでもないが、それでもこの響きがそれらと違うくらいはわかる。だからか、余計に興味を引かれ、足は先程より少し早く進む。

— Pour guerir la secheresse  
e la lot .

透き通った声が耳に心地いい。

砂を踏む足の感触。そういえば裸足なのかと、ここにきて気付いたが、既にそんなことはどうでもよかった。ただこの声の持ち主がどんな人なのか、それだけが胸を占め——そこに、彼女はいた。

金髪の、白い肌。精巧に作られたフランス人形のように、けれども豪華なドレスに着飾った、という訳ではない。正反対にシンプルな白い一枚のドレスで、どこかちぐはぐな印象を受けた。

儂い、というには存在感が明確で。

確固たるというには浮世離れた姿。

一目見ただけで、というにはおかしな感覚だが、まるで「別の世界で生きている人」というのが、衛宮 蓮が彼女に抱いた第一印象だった。

どれくらい眺めていただろうか。

歌の内容は全く頭に入ってこないのに。

探した歌い手がそこにいるというのに。

この足は何故かまったく前に進まず、ただ放心したように立っている蓮に気付いた彼女が振り向くまで一步も動かなかった。

「あ、いやえつと。綺麗な歌、だな」

行った後で、自分の馬鹿さ加減に頭を叩きたくなかった。

初対面に口ごもるような性質でもないだろうとか、もつと普通に話せないのかと目の前で小首を傾げる彼女を見て言葉を探す。

「あー……違う。そう、だな。というか、言葉、わかるか？」

探す、そもそもこちらの言葉が通じるかも怪しいだろうと、当たり前の問題に直面した。

もしこれが夢の類だとして、なら何故会ったことも聞いたこともないような人と出会い話をしなくてはならないのか。夢というのは人の願望のようなものが形作るだとかなんとか、そんな話を聞いたことがあるが、はつきり言つて自分にそんな意味不明な願望があるなどと思いたくはない。

そして、こちらの言葉を理解したのか彼女が満面の笑みで、こちらを指さし口を開いた。

——と、——えた。

「は？ え？」

聞こえた。いや、断片的にとらえたその発音は先程まで流れていたイントネーションと異なり、聞きなれた、日本語のようなものだった。

思わず停止してしまうという間抜けな顔を晒した気がしたが、すぐさま再起動をはたす。言葉が通じるのなら面倒は減るし、夢と思われここで“どこか”などと問うのも馬鹿らしいかもしれないが、そうでなくとも君は誰かくらい聞くのは自然の流れだろう。

「——っ、——!!」

だが、次に言葉にしようとした声は、彼女に伝わる事はなかった。

口から洩れる音が掠れる。まるで出し方を忘れたかのように、もしくは過呼吸で喘ぐように、咽から出てくる音は形を成さない。

先程からこれが夢だろうとは思っている。つまり自覚しているのだ。なら何故こんなにも自分の意思と真逆をいくような出来事が次々と起るのか。

目の前の少女も、突然目の前の男が首を押さえて悶えて出したら困惑するはずだ。実際、こちらを覗きこんできた彼女は戸惑い一つも心配げな顔を————していなかった。

むしろ物珍しそうに、まるで初めてのモノを見るように興味深そうにこちらを覗きこんでいた。

こちらが苦しんでいる原因がどうやら“のど”によるものだと気が付いたのか、覗き込む為に屈んでいた姿勢からこちらに彼女が手を伸ばした。

そして、その白い腕が首へ伸ばされ、何故か、どういうわけか、自分の視界がゆっくりとずれていった。

「っ!？」

目が覚めた。

自分が先程まで夢を見ていたのだと、視線の先にある見慣れた天井にようやく実感を持った。いったい何時からと、多分見ていただろう。『悪夢』の類、その内容を思い出そうとして、脳裏に走るのは砂嵐が吹荒れているかのようにノイズで乱れた映像。

脳に血液が足りていないような気だるさを感じながら、左手が無意識に自分の首を撫でた。まるでそこが無事であることを確認するように。ゆっくりと、一度だけ。

「なにやってるんだか。あたりまえだろ」

夢から覚めてまた夢を見る。という経験は確かにある。が、コレは現実だ。なぜなら体が脳裏にうつたえる痛み、あの夜、アサシンに襲われバーサーカーに襲撃されて受けた痛みが幻ではないと証明しているのだから。

「つて、なんで生きてるんだよ」

狂戦士の拳は『絶死の一撃』、幕引きの一振りだ。触れた対象、それこそ無機有機とわず、実体のない魔術ですら『死』を与える。だから夢の夢の前、あの夜の最後の記憶。狂戦士を前にして立ちすくんだあの状態から、衛宮 蓮は生き残っている筈がない。

「おどろいた。ほんとに『なんとも』ないのね」

まるで理解不能だという風な言葉を投げつけたのは、襖から顔を覗かせた学友、遠坂 凜だ。

「とう、さかか?」

「おはよう、衛宮君」

理解の追いつかないこちらに対し、まるで気が付いていない、いやむしろ知っていながらあえて無視をしている様な態度。半開きの襖を開け放った遠坂はそのまま寝そべっていたこちらに近づいてくる。

「おはようって」

当たり前のように挨拶をしてくるが、ここは一応我が家の筈だ。あの夜どうやってかは知らないが、バーサーカーから逃げおおせて此処へ避難したというのならまだわかる。だが、だとしてもあの時の少女、イリヤが然程離れていなご家まで逃れるのを見逃すなどあるのだろうか。

そう考えて、思いつくのはもちろんノーだ。

黒い鎧を身に纏った狂戦士を従えていた少女、イリヤスフィールは明確な目的をもって蓮たちの前に現れた。彼女の言葉を信じるのなら、最初は殺す気はなかったのかもしれない。少なくとも、彼女の興味を引いてしまったあるときまでは。だから尚の事、今この状態で生きていくというのが不可解だった。

顔を横にめぐらせば障子の下の方へ日の光が当たっている。身に染みた感覚から感じ取った肌寒さから、今現在は早朝といったところだろう。となると、いよいよもってあの深夜から今へ至る空白がどう考えても繋がらない。そしてならば、その回答を知っているだろう凛に質問を投げるのは当然の成り行きで、寝ていて姿勢から起き上がるうとして、右腕が不自然に床へと引っ張られた。

「いったい何がどうなって……って、なんだよこれ」

正確には、右肘から指先にかけてが張り付いているかのように持ちあがらない。

上体を起こした為、肩までかかっていた掛布団が下へ落ち、肩口から黒い包帯のようなもので巻かれていた右腕が目に入った。それも畳の上に銀製と思われるU字杭で打ち付けられているというオマケ付きだ。

「ああ、それ、外れないから。というより外したらだめだから」

「はあ」

空いている左手で引き抜こうと格闘しているそれは、畳の上に打ち付けられているだろうにまるでびくともしない。呪術的なものかと「解析」しようとするれば、一定のラインで弾かれる。

「小父様の特別製、らしいわよ。少なくとも私の手におえるようなも

のじゃないし、昼までは大人しくしている事ね」

「おじ——つて、親父がいるのか!？」

彼女が「小父」と呼ぶ人間はそう多くない。というより、自分は一  
人しか知らない。

「いるのかつて、当たり前でしょ。私達はもともと衛宮の小父様に会  
うために出かけたんだし」

なら、自分たちはあの後、切嗣に助けられ難を逃れたということに  
なる、のだろうか。

確かに、自分の、そして時たまとはいえ凜も魔術において指導を受  
けていた。彼と自分達とでは魔道においても、「戦う」ということにお  
いても差は歴然だ。

「ま、今はここにいないけど、昼には戻ってくるはずだから」

しかし、仮にそうだとしても、一人の魔術師である事には変わりな  
い。だというのに、彼が介入しただけであの狂戦士が、あの少女を退  
けられるだろうか。

考えても答えなどでないのだろうが、いや、この場合は単に情報が  
足りないということが大きい。切嗣があまり自分について、殊更昔の  
事について話したがない性格だったということもあるが、養子とい  
う関係を抜きにしても、自分は親である彼を知らな過ぎなのは、と  
啞然としてしまう。

そこへ、

「レン！ 身体の具合は大丈夫ですかっ」

空けられたままの襖の向こう。廊下へけたたましい音を響かせて  
現れたのは、あの夜から自分を主として剣となると誓いを立てたセイ  
バーだった。

勢いそのままに膝をおった彼女は、申し訳ないと深々と首を垂れ  
る。

「あ、いや、頭をあげてくれセイバー。あれはむしろ俺の不注意だった  
し、こつちこそ、力になれなくてごめん」

今思えば思い上がりというか、単身戦場に挑む無謀に急に気恥ずか  
しさが湧く。彼女から散々マスターがサーヴァント同士による戦



いの中へ踏み入る危険性を説かれておきながら、だ。

いや俺が悪い、いやあの場合は私がなどと互いに謝りあう不毛な光景が続いた。

「はいはいそこまで。いつまでも堂々巡りなお芝居は取りあえず後にしなさい」

そこへ手を叩いてばっさりとその空気を切ったのは凜だった。いつの間そこにいたのか、愉快な表情を浮かべたアーチャーがクツクツと笑いながら実体化する。

「だわな。主従仲がいいのは結構だがよ、奴さんには話しておかなくちゃいけない事もある。聞きたい事も山ほどあるだろう？」

至極もつともな話だ。

剽軽者を絵に描いたようなこの男に言われると不思議と腹が立つが。

「そうね。衛宮君も……取りあえず問題はなさそうね」

腕を打ち付けられて固定されている状態を問題ないというのだろうか。傍目から見れば奇天烈極まりない絵図らなのだろうが、この場は無関係の人間がいる筈もない。また彼女がそこを考慮していない筈もなく、二組の主従が部屋に揃い、凜がああ夜の出来事を説明してくれた。

誰もその場で動く事が出来なかった。

猛威を振るっていた狂戦士も、人外の領域へと暴走していた彼の息子も。

絶好の好機だというのに、セイバーやアーチャーでさえ状況の把握に止まっていた。

なぜなら、

「やあ、大きくなったね。イリヤ」

突然乱入してきたこの男が、たった一つの銃弾で、蓮へと放たれていた狂戦士の一撃を弾き——続く二発目の弾丸が、あろう事か彼の息子である蓮を貫いたのだから。



銀色の髪を振り乱し、激昂に染まる紅い瞳も鋭く目の前の男を睨みつける少女。いつそ悲愴感すらただよわせ、彼女は感情にまかせて己の従者の名を叫ぶ。その名の通り、狂気すら感じさせる響きで。

「耳障りよ！早くその男を殺しなさい!!」

瞬間、虎兜の狂戦士が吠える。

その音はこれまでの雄叫びと比べるべくもない。ただの叫びが空気を裂き、周囲の電灯、壁、ありとあらゆる物へ亀裂を刻む。その様は加減も遊びもない、真実全霊の発露なのだとは証明していた。

「——分かっているさ。これも僕の」

離れていた凛に、その時切嗣が何を口にしたのかは聞き取れなかった。だが、猛進する狂戦士を前に、彼はその言葉を後に表情を変える。

昔、一度だけ見た事がある。

先程までイリヤと呼んでいた少女に向けていた目ではない。小さい頃、魔術の師として、父である時臣の友人として接していた時のそれではない。

固有時制御

『Time alter ——』

感情の存在しない機械のように、ソレが不要だと言うように■を切り捨てた——昔、父と二人だけで話していた時に見てしまった顔。

恐らく、これが「衛宮 切嗣」という魔術師本来の顔なのだ。

三倍速

『triple accel!!』

瞬間、搔き消える男の姿。

彼の息子である蓮のそれに酷似した——いや、アレは見るからに意識の欠如したモノ。所謂暴走状態で行使していたものだ。技と呼ぶにはあまりに稚拙。だが、男のそれはまるで違う別物、別次元の魔技だ。

「■■——■ッ!!」

弾き飛ばされる漆黒の鎧。それは破片程度のモノで、傷を負わせている訳ではない。だが、彼は間近で振るわれる「絶死」の拳、その悉くを避けつづけ、あまつさえその場に釘付けにしている。

「何をまわって遊んでいるのバーサーカー！ さっさとっ」

少女の苛立ちは分からなくもない。

彼女の身体に光浮かぶ刻印から、本気で切嗣を殺しに来ているだろう事は疑う余地はない。

この場では絶対の力を持っているだろう英霊の力を持って、まるで遊ばれているかのようにことが思い通りに運ばない。悪夢というのなら、彼女にとってコレはまさにそうなのだろう。

荒れ狂う暴風さながらに、加勢することも退く事も選べなかった凛の頭へ、直接語りかけるような音が響く。目の前で立ち回る切嗣のものだ。

『再会早々だけど、すまないがあまり長話している時間もない』

戦いながら、イリヤスフィールと此方とを窺いながらだというのに、彼の動きは陰ることなく、依然としてバーサーカーを抑え込んでいる。

彼が念話で続けて話してきたことはこうだ。

まず、切嗣が現れてから倒れていた蓮の状態が一刻の猶予もない事。

そして切嗣がこの場にいる限り、バーサーカーの狙いは彼に絞られるだろうということ。

蓮については事情の分からない凜たちにも、アレが良くない現象だということぐらい解る。だが、切嗣の言うそれはこの詳細を把握しているようであり、事態はより切迫しているという。

イリヤスフィールについては、この場で起きた言葉の応酬通り、過去の遺恨によるものだ。

「よそ見なんて、ずいぶんなよゆうじゃないっ」

「■■■■!!!」

だが彼が如何に魔術師離れた戦闘の腕を持つと、やはり念話を片手間に続けければそれは僅かといえど隙が産まれてしまう。一、三言なら兎も角、長々と話すのなら尚更にだ。

「時臣の所へ、彼に任せてある!!」

「父様のつて、ちよつと待ってください。そんなこといきなり言われ

ても！」

だから、これ以上はと念話を切つて短く伝えた彼はこちらを離脱させるため、バーサーカーを誘うように丘の上へと上がっていく。それは最初から上に陣取っていたイリヤスフィールの方へと向かうことで、当然バーサーカーは主の元へ向かわせるものかと追撃にかかった。

一方的な指示。

尚も高速で移動する彼は瞬く間にイリヤスフィールの下にたどり着き、驚き一瞬だけ固まった彼女の前で止まった彼は、そのまま跳躍してまた坂を駆けのぼる。彼が直前までいた場所、そこには虎兜の拳が着弾していた。

「ま、他に出来ることもないしなつと。なんだよ、意外と軽いなコイツ。ちゃんとメシ食つてるのかよ」

軽口を挟みつつ倒れていた蓮を抱えるアーチャーを横目で睨んだが、彼がそんな非難の目を気にするわけもなく、心底分からんと空いている手ですでていた仮面を持ち上げた。

「なんだよ？ 実際、あのデカブツの動きも凶悪だけどよ、あのオッサンが張りあえてるのも事実だ。あの嬢ちゃんがブチ切れるってなら、その矛先がこつち向く前にとんずら決めることのどこに問題がある」それは確かに彼の言う通りで、出来れば去っていった切嗣の下へ行って加勢したいというのは私の感情の問題だ。

何ができる。と言われればあの戦いに助力できるのかも怪しい。だからその言葉は正論だ。例え認めたくなくても、受け止めるべき言葉だ。

「……行くわよ」

終始固まっていたセイバーの腕を引き起こし、この日、私達は二度目の敗走を味わった。

公園——と呼ぶには少々人気のないそこを、一人の男が歩いてた。

時間にしてまだ早朝ではあるが、仮にも公園であり、冬木において有数の敷地を有する場所であるのなら、他に利用者の姿が見えてもいだろう。だがそう、冬木においてここ新都の中央公園が日く付きであるのなら、話は大きく変わる。

今から約十年前、冬木の街をある災害が襲った。

ガス爆発や爆弾テロ。

急速な開発に伴う地盤沈下、ソレに伴う弊害。

はたまた呪いだどこぞの誰々が予言したオカルト的なもの。

巷を騒がせた説は数あれど、原因が解明できないままであれば、人はもつともらしい理由を見繕っていくもの。不確かであろうと、何もわからない不安の方が恐ろしいからだ。

そして、十年も経てば人も街も落ち着きを見せる。当時付近に住んでいたものにとってはまだ癒えぬ傷跡ではあるが、それでも人々は見える傷を塞ごうと、立ち上がり、歩んでいこうと災害跡地である荒地を整え、広大な公園として再建させた。整地され、植樹された木々と芝以外には何も無い。申し訳程度にベンチが設置された、本当にただの広場であるが。

男はそんな何も目指す物のないはずの公園の中を、まっすぐと進む。

よれてくすんでいるコートを初冬の風に晒し、火のついた煙草をくわえた男。

その歩みが、公園の中ほどで止まる。

脇に抱えていた包みから小さな花を取り出す。白い菊の花に、淡い色の土耳其桔梗が二本添えられたそれを、何も無い——芝はおろか雑草も生えていない地面に置き、片膝をついていた彼はそのまま両の目蓋を閉じた。

そのまま数分も動かずにいたのは何を思っていたのか、男が一人ごちる。

「久しぶり、というのもおかしな話かな。遅れて、すまなかつた。なかなか、思うようにいなくてね」

その言葉を聞くものはここには誰もいない。だがそんな事は男にとって誰よりもよく知っている。災害跡地という、曰くを疎んで人があまり訪れないといった表向き理由ではなく、その真実を。

「そうだ、——に会ったよ。あのころと比べて、少し、大きくなっていた」

何かを思い懐かしむように細められた目は、まるで目の前に見えない何かがいるように遠くを見ていた。言葉には出さないが、その思い出は男にとって代え難く暖かなものなのだろう。少しばかり嬉しそうに、だが同時に悲しんでいるようにも見える複雑そうな顔は、生気の感じられなかった先ほどの機械や能面のように色のない顔が、人らしい暖かさを取り戻していた。

「やはり、間に合わなかつたよ」

だが次の言葉、彼の自分は無力だという呟きに、まるで急激に冷やされたかのように感情が抜け落ちた。

「彼女」は、マスターとしてこの戦いに参加していた。おそらく、いや、間違いなく「器」も持っているはずだ」

顔から表情が抜け落ちたように、その言葉にも、感情の暖かさというものが抜け落ちていく。

「君なら今の僕を見てどう言うんだらうって、何度も考えた。正直、告白するなら、ああして目の前にして今も迷っている」

目の前に広げた掌に、かつてこの腕に抱いたその重さを想起させる。

迷わないはずがないのだ。誰が、好き好んで自分の■を手にかけるというのだろうか。

止むに止まれぬ事情があるから？

ふざけるなど叫びたかつた。そんなことは知らないし、そんな理由で秤に乗せること自体言語断だ。

「……だからこそ、僕は迷うわけにはいかない」

だけど、男は鎖によって雁字搦めで、既に選ぶという選択を手に取りれないほど、その体は縛り付けられている。

それほどの多くの命を奪ってきた。

そうであることが正しいのだと信じてきた。

全てはかつてこの手にかけてきた命たちが散った意味を無にしな  
い為。例えそれが己を立たせるためだけの言い訳に過ぎないのだと  
しても、自分は歩み続けなくてはならないと男は十字架を背負い続け  
ている。

かつて冬の城に訪れるより前に呼ばれていた「魔術師殺し」異名。  
多くの血と怨鎖をその身に浴びてきたその頃より、遥かに血塗られた  
道の上で彼は今もなおがむしゃらに走り続けている。

そして、そうまでして走り続けることを科すことになったかつての  
遺恨が、この地にはある。その罪を、過ちを正すまで、もう迷うこと  
はできないと。その決別を表すように男は地面に手を当てた。

その姿は、まるで許しを請う罪人のようであり、神に懺悔を打明け  
る虜囚のようで。

「いずれ、そちらに行くことになると思う。だからその時は、どうか」  
笑顔で迎えてあげてほしい。

とても口に出して言えるはずのない言葉を飲み込み、もう一度だけ  
彼は黙祷をささげた。

目が覚めて目に入ったのは見覚えのある天井。

思考は正常。

次いで意識したのは体の不自由さ。取分け、右上半身が縫い付けら  
れているかのようにつかえる。

否。

若干重い首と開いた両目を右下へと動かすと、そこには黒い布でミ  
イラ男よろしく巻かれた腕がU字杭で縫い付けられている。

議論の余地もなく、現状は異常極まれた。



「夢、つてオチが普通だろあんなの」

誰が起きたらこんな有様だと予想できるだろうか。確かに、自分は記憶にある夜において、致命傷級の一撃をもらいはしたが。仮にその傷を癒すために絶対安静を強いられるとしても、魔術処理を施しているだろう杭でこれでもかと縫い付ける必要はないはずじゃないだろうか。

「なあ、セイバー」

「すいません、レンっ」

「まだ何も言っていないんだが」

今度は視線を右ではなく左側へ。

気配は静かだが、おそらく自分が寝てからもそこに居てくれたのだろう。実直且つ義理堅いだろう彼女の性格を表していると言える。言えるが、あの夜のことに関しては蓮の中では決着のついたものだと思うっている。彼女自身負い目は拭いがたいというのは分かる。しかし、だからといってこちらが何か言う前に自分は無力だと言葉を挟む前に謝るのはどうなのだろうかと思う。

「その施術に関してだとしたら、私は力になることはできないので」

「あ、いやま、うん。それはそうだろうけどさ」

察しがいい——訳でもない、か。窮屈そうな顔で窺うように声をかけられたのなら、余程の者でない限り予想は立つだろう。この状態で何の支障もなく、当たり前のように朝の挨拶から日常会話に移れる猛者がいるのだとしたら、蓮自身お目にかかりたいくらいだ。

「そういえば、遠坂は？」

「リンなら、キリツグを呼んでくると外へ行かれました。時間的にはもう間もなく戻ってくると思いますが」

「親父を？」

そういえば凜の話によれば、昨夜自分達を助けてくれたのは切嗣という話である。セイバー達ですら苦戦したあの虎兇を相手にどうすれば渡り合えるのか想像もつかない。実際にその場を見た遠坂からして要領を得なかったというのだから、ソレも含めて話を聞かなくてはいけないことの一つだろう。

だがともあれ、無事あの夜を生き延びたことは事実。死んでしまつては何も残せないし、成すこともできない。どうやら、あの白い少女に目をつけられたらしいことは目下頭を悩ませる種だが。

「ん？ そういえば、セイバーに親父のこと話したっけ」

聖杯に呼び出された英霊に与えられる知識は、あくまで日常に溶け込むために必要最低限の一般常識だ。言語やおおよその歴史等がそれに当たる。他ならないセイバーの口から説明されたことだ。

つまり、聖杯戦争にまつわる重要な固有名詞等ならともかく、高々一魔術師の名前など知るはずもない。

「そうですね。こうなつてしまつては隠しておくものでもないですし」

そう言つて居住まいを正したセイバーは一呼吸して口を開こうとし――襖の向こうから顔を覗かせた訪問者によつてその出鼻を挫かれた。

「やあ、元気そうだね蓮君」

「時臣さん？」

ただの見舞いに来ただけだというように襖を閉めると杖を壁に立てかけ、足に負担をかけないようゆっくりと腰を下ろした。一言失礼と詫びた時臣は蓮の右腕を拘束しているU字杭に手を当てた。

「……とりあえずは大人しくしているか」

「あの、時臣さん？」

「ああ、すまない。どうやら凜の説明不足立ったみたいだね。許してやつてほしい」

そう言つてU字杭の一つ一つに手を当てていくと、あれほどびくともしなかつた杭が彼の手によつて何でもない風に外されていく。

今受けた謝罪もそうだが、話の過程を大きく飛ばしている感じが酷くはないだろうか。彼の娘である凜にもそのきらいはあることから、あれはどうやら遺伝だったようである。単に親の癖がうつつたというだけかもしれないが。

「傷はほとんど塞がつているはずだ。治療の効率化のためとはいえ、君には窮屈な思いをさせてしまったね」

「いえ、そういうことなら俺は別に」

それほど長い時間拘束されていたわけではないが、一応同じ体勢を強制されていたのである。確認の意味も含めて上体を起こして軽くストレッチの要領で身体を解してみると、予想に反して不思議と軽い。

最後に、右腕に巻かれているままになっている黒い布を確認する。右腕殆ど覆っているとはいえ、それ程分厚く巻いているわけではないのか、腕を曲げ伸ばすのにそれほど支障はなかった。精々が動かし辛いといったところ。治療の為だという杭からも外され、傷の回復も良好だという。なら支障はないとはいえ、右腕丸々を包帯で覆っているというのは何かと目につく。できればこれも外しておきたいと時臣に確認を取ろうとすると、なぜか彼は少しあわてたように待ったをかけた。

「それは、まだ外さないでくれ」

「はあ……これも治療の？」

「仮にも英霊の一撃を受けたという話だからね。表面上の傷が塞がっているとはいえ、精神面や魂。より内面になにも影響がない、と考えるのは危険だろう」

つまりは呪い。呪術的なものや時間差や経過時間によって効力を発揮する類のものを警戒したモノ、ということだろう。昨日、正確に言えばその前のアサシンによる襲撃から、英霊が言葉通り人間離れた存在だということは肌で体感している。

「とはいえ、ここまで言っておいて申し訳ないが、正直なところその布に関しては門外漢でね。状態を“安定”させている。それ以上は私も把握しかねるといのが実状だ」

「時臣さん、でもですか」

蓮が知る限り、時臣という人物は魔術師として一流の人物だと認識している。本人は全盛期に比べればと不自由な身体を示して苦笑するが、人柄的にも尊敬できる人物だと思っている。その彼が専門外だという。昔、切嗣本人に聞いた話では、魔術に関しては全般的に時臣の方が優れていると聞いていたが、見た目に反して、この布というの

はかなり特殊な物なのだろうか。

「凜から聞いたかもしれないが、それは切嗣の特別製でね。彼の家の系譜による色が強い。だから私が下手に手を加えると、かえって悪影響を与えかねないんだ」

「まあ、そういうことなら」

「幸い、今は服装的にも隠せなくてもいいだろう。手に関しては、怪我を理由につければ手袋で十分誤魔化せる範囲だ」

学校に関してはこちらで話をつけておくという時臣は、そう言っただけに薄手の黒い手袋を手渡してくる。実際に受け取ってみると、薄手のように見えるが生地はしっかりしており、色も同色なことから包帯の色が透ける危険性のある白手等よりはマシなのだろう。マシなのだろうが。

「……………」

「? すまない、サイズが合わなかったか。一応、こちらの見立てでは問題なかったと思ったが」

「あ、いえ。サイズ問題ないですよゼンゼン」

サイズは問題ない。むしろ包帯同様にジャストフィット、関節の可動に支障が少くないという謎仕様のこの手袋。

なのだがしかし、ちよつと待つてほしい。

黒い包帯がまかれた腕。

その先の手を覆う黒い手袋。

実際に制服に袖を通してあるわけではないが、その姿を想像して頭痛がしてきた。

思わずその姿を想像して後悔していると、横にいる時臣も、セイバーもまるでそのことに気づいていないようだ。ああ、遠坂当たりなら腹を抱えて笑いそうだ。

「——痛すぎるだろ」

その後、切嗣の到着の遅れを知らせに舞弥が家を訪ねて来るまで酷く憂鬱とした気分を味わった蓮だったが、その言葉を受けた時臣が経過の為に通学を促され、さらに肩を落としたのはわずか数分後の話である。

静かに閉じられる戸を見送る男。

今しがた家を出た少年、というには立派になったと感慨深くもある。それだけ、時臣と衛宮 蓮が過ごしてきた時間というのは長く、色濃い。

友人である衛宮 切嗣が10年前の事件で引き取り手のいない生き残りを引き取るといった時は反対もした。が、過ぎれば十年。近しい間柄として、放任が過ぎる養父の元ではあれでまっすぐ育ててくれたと思うのは親馬鹿に似た心境なのだろうか。

娘である凜とはどういう出会い方をしたのか犬猿の仲であるが、実の娘だ。アレで曲げられないところがあるのは知っているし、我が子同然の時間を過ごした蓮がどういう性格を形成し、それが凜とどう反発するというのは大凡の察しが付く。親としては恋仲など言語道断だが、せめて友人である切嗣と自分のように信頼できる関係でいてもらいたいと思うのだ。なにせ、ただでさえ魔術師を取り巻く世界というのは閉鎖的だ。

「昔の私なら、こんな考えなど馬鹿げていると一蹴していただろうな」  
そう自嘲するくらいには、今の自分の変わりようを客観的に見ることもができる。

10年前のあの日、聖杯戦争の勝利を疑わず、己が足跡を過信し、根源そのものへ思考を放棄していた自分。そんな確かなものなどどこにもないのだと思い知らされた。だが、祖先たちが根源を目指した理念を否定するつもりは毛頭ない。こうしている今も、そこを目指すことに疑いなどない。

そしてだからこそ、この第五次の戦いを時代に託す己の不自由を呪わずにはいられないのだ。

思えば、今はこの身の無力さが恨めしいと拳を握る。あの頃から、決して手を尽くさなかつたわけではない。魔力回路に異常をきたし、下半身が思うように動かないのだとしても。

「まったく。これではあの時のお前とあべこべだな」

かつて、己の命に引き換えにしてもたった一つのモノを守ろうとした男がいた。

愚かだと思った。

一度魔道に背を向けた恥を知らずが、何を思つて舞い戻つてきたのかと。

時間はあつた。だから時臣なりに考えたし、想像もついた。しかし、仮にその想像どおりだとして、決して時臣は彼を理解したとは思わない。

きつと“何か”の為に戦つただらう彼の行動原理。

形にすればあまりに陳腐で、非常にシンプルな言葉。

だから口にするのは簡単だ。けれど、それを時臣がそうだと決めつけるのは、あの時愚かだと切つて捨てた己が断定するそれは、たった一人で戦つた男への侮辱でしかないだろう。

「——すまない。いつも君には面倒な役回りを頼んでばかりだな僕は」

そうして、少年との思い出から更に昔へと時臣が思いを伸ばしていると、玄関の外より蓮の養父である衛宮 切嗣が姿を現した。

今の今まで敷地内のどこかにはいたのだらう。大方、蓮と顔を合わせづらかつたというところか。口下手な彼らしくはあるが、仮にも父親だろうと時臣は小さくため息を吐きながら彼を迎える。

「……そう思うなら、少しは態度で示して欲しいところだ」

「言おうとは、思つていたんだけどね」  
そういつて押し黙る切嗣の気持ちは、時臣にも理解できなくはない。

情けない話だが彼は時臣よりも“人”の親としてできている。時臣自身、10年前と比べて幾分丸くなつたとは自分でも思うが、“底”知つた今でさえ、時臣が思うそれは“魔術師”としての視点だ。そんな自分でさえ、我が子は愛しいのだ。切嗣と蓮の関係が義理とはいへ、二人が過ごしてきた形は紛れもなく親子のそれだ。一般的には歪

に見えるかもしれないが、それは友人として時臣は保証する。

だからそう。そうであるというのに彼が伝えるべきことを躊躇うというのは、つまりその内容は――

「辛いな。あの時から、私達にできることは結局変わっていない」

「わかっていたことだよ。僕たちは「アレ」にかかわった時から、周囲に付きまとうのはいつだってこんなことばかりだ」

順番が、あるいはふとした違い。もしあるいは、朝いつものルーチンをわずかに変えるような違いといった些細なことで、結果は違ったかもしれない。今予測される未来が負にまみれていると思うのなら、彼らは俗世から身を引くべきなのだろう。

だが、それだけはできないと誓ったのだ。そして、あの時たった一人の被害者を見て見ぬふりはできないと手を伸ばしてしまったから。

「だから、今度もこの手で決着をつける。だけど今だけは――」  
わずかでいい。少しの間の平穏を。

彼が小さい頃、魔法使いだという戯言に純粹なまなざしを向けた少年。その彼が今も大切にする日々を。

コートから取り出した煙草に火をつける彼の仕草は、なぜかこの時、少したどたどしかつたように見えた。

人は学ぶ生き物である。

失敗に失敗を重ね。試行錯誤の果てに進化と隆盛を勝ち取った種族である。

遠い祖先、原初よりの進化。その過程には諸説あれど必ず諍いが起き、力ないし、知恵の優劣の先に繁栄と淘汰があった。

つまり、学び蓄積された経験の道に、人の歴史があるということは疑いようもないのだ。

であれば、ここに何を言いたいかというところ。

「やっべえ……さっぱりわかんねえよオイ」

衛宮 蓮。

ただいまノートと格闘中である。

「風邪で一日や二日休んだ程度ならともかく、衛宮の場合はほぼ一週間休学していたからな」

教室から場所を生徒会室に移し、優良生徒であらせられる生徒会長殿とマンツーマンでの授業中だ。

ここ数日の怒涛の如く押し寄せた異物たちによって、もろくも瓦解しかけている愛すべき日常。今まさにその愛し子に頬を殴られている現状なわけではあるが、

「あーうん。はい。感謝していますよ生徒会長殿」

こうして場所を提供してもらっている上に、休学中の授業、その全教科を見せてもらっている手前、さじを投げるわけにもいかない。

「真面に顔を出さずにテストだけ上を行く阿呆もいるとはいえ、ああいうのは単なる例外だ。手本にすらならん。が、衛宮とて決して頭が悪いというわけではないからな。どれ、昼休みが終わるまでは付き合うさ」

「ハハ……なんともありがたい友情だ事で」

向かいの席を拝借した一成が、ノートと格闘しているこちらに助け舟を出してくれる。もつとも、自他ともに厳しい彼らしく、その指導は教員顔負けに厳しいものだったのだが。

「む？ 茶が切れたか。待っている」

どの学校も常備しているのかは不明だが、この学校の生徒会室は質素な割にはいい茶葉を置いている。大体は一成の好みなのだろうが、教えてもらう手前、そこまでされては立つ瀬がないと断ろうとする。

「気にするな。茶の一つや二つ程度なら大差もあるまい。それより――お前は余所見せずノートと向き合っている」

そのまま目の前に置かれていた湯呑を取り上げ、慣れた手つきで給仕を始める生徒会長。仮にもこの生徒会室やの主なのだから、もつとどっしりしていればいだろうに。立場があべこべだろうと伸ばした手をむなしく握ったり開いたりしてみる。



「ほら。もうひと頑張りだ。あまり時間もないしな」

「へーへーい」

とん、と置かれた湯呑を受け取る。確かに、集中が乱れ気味かと喝を入れる意味で熱いお茶を一口口に入れ、姿勢を正す。声こそやる気の無い態だが、いくらなんでも友人の行為を前にだらけきる程怠惰に生きていくわけではないのだ。

——がしかし。

「な、なあ一成。こーこー」

「早い。もう少し問題と格闘しろ」

こちらに視線をやりつつも、自分は手元に教科書——別教科の物——を広げて目下復習中の模様。文武両道ということで勘違いする輩もいるが、一成は基本能力にかまけて努力をおろそかにするタイプではない。むろん、その言動に違わず、彼はその心身における出来もすこぶる高いというハイパーなスペックの持ち主という補足はつくが。「? どうした? まだ衛宮がそこまでつまずくようなところではないと思っただが」

「ああ、そうじゃない。ただ——」

ちよつと考え事をなと誤魔化すと、すぐさま戯けと喝が飛んでくる。真面目ゆえか、面倒見がいい彼は手を抜くことがない。たしかに、教わってばかりでは力にならないのは重々承知しているし、理由はともかく、蓮自身としても頭は働かせているつもりだ。そう、つもりだが——されとて理解が追いつくかはまた別問題だろう。

喝をもらいながらも改めて読み返すが、二度三度と視線を往復させては見たものの、てんで頭上の電球はうんともすんともいわなかった。

そして、自身の復習の傍ら、どこにそんな余裕があるのかという具合に、こちらの問いを解く手が止まると指摘がすぐさま飛んでくる。一人ではこうはいかなかっただろうと、一成に感謝しながら進める事十数分。そろそろ約束の昼休み終了が近づいてきたころ。

「しかし、今回はえらく不運が重なったな。なんだ、今度はどんな不祥事を起こしたんだ」

あらかた自分の分は終えたのか、机に広げた勉強道具を片付け始めながら問いかけてくる一成。不運、というのは彼流にいうのなら因果応報。何かしら負に見舞われるような行を重ねたのかということだろう。

「まるで俺がトラブルを引き起こしてるみたいなの言いは大変誤解を招くからやめてくれ」

「そうは言ってもだな。ここ最近衛宮の周りで起きるトラブルを思えば、そう思うのも無理は無かろう。アレか、類は友を呼ぶとでもいうやつなのか」

先ほどから遠回しでシンジを罵倒している生徒会長殿。聞けば自分が登校し、彼が屋上で姿を現したあの日からも学校には現れていないらしい。といっても、今向き合っても喧嘩腰にしかならないのは目に見えているので、そう言った面では気が楽だし助かってはいるが、あれと同類にされるのはどうにも飲み込みかねる。

「……その理屈だとお前もその『類』に含まれることになるぞ」

「なるほど。何事も例外はあるという実例だな」

「オイ」

湯呑を傾け、目をつむり納得したようにさも当然と受け流す一成。そこでさじ投げるのはどうなのかと突っ込めば、保護者の責任だろうと訳も分からないこれまたバツサリと。いや、確かにシンジの問題行動の收拾は事あるごとに、というより毎度巻き込まれて仕方なくそのポジションに立たされている現状。これに関しては甚だ遺憾である。むしろ自分は被害者側だと弁護するが、

「そろそろ昼休みも終わる。ノートは次の授業までで構わんから、自主勉強、大いに励めよ」

筆記用具も終い終えた鞆を椅子の上に置くと、彼はそのまま自分の湯飲みを手に取り、こちらの物も手に取って流しへ下げる。当たり前な自然の流れを前に、思わず感謝の言葉をこぼしてしまうぐらいに堂に入っている。つまりはまあ、完全に話の腰を折られた形だ。

「よし、忘れ物はないなっ」

時計を確認すればもう五限目が始まる五分前というところだ。教

室まで走るほどあわてるような時間ではないが、あまり悠長にしてられる時間でもない。

手早く荷物をまとめた蓮は入口で待っている一成に駆け寄って大丈夫だと手で返礼した。

「ところで」

戸締りを確認し、生徒会室から教室へと向かう途中、一成が思い出したかのように蓮へと視線を向けてくる。正確には蓮の右側へ。

「その手袋はなんだ、やはり外せない物なのか？」

「あ、ああ。ちよつとな」

やはりお前にも指摘されるのかと溜息をこぼしつつ、この日何度目になるかわからない言い訳を脳内からぴっぴりだしていた。

怪我人、それも連日立て続けにトラブルに見舞われた者というのはどうにも気を使われるのが常のようである。

表向きはトラック追突爆発事故。街内を騒がせている暴漢騒ぎに巻き込まれたなど。その聴取や手続き諸々は切嗣や時臣達が手配してくれたらしい。実際、学校に来てみれば教師陣はその理由で納得している。蓮個人としては、もう少し右手の黒手袋などに疑問を持たないものかと思っただが、詮索がないことは正直助かるのでそのままにしている。

いや、学校どころか診断書の作成や教師陣の説得など、どうやつたと若干の恐怖を感じもする。これ以上深く考えると少々背筋が冷たいどころでは済まなくなりそうなのでそれ以上の思考を放棄したともいえる。

何事も首を突っ込めばいいというわけではない。

君子危うき近づかず。

昔の偉い人の言葉らしいので、ここは今を生きる人間として素直に従うべきだと、そう結論付けたしだいだ。

部活は、去年故あつて辞めた身でもある。生徒会は一成との付き合いいで手伝いに顔を出すこともあるが——今この有様で顔を出して

も馬鹿者めといわれて追い返されるのが落ちだろう。

まあ、言ってしまうえば、本日の授業を終えれば特にすることなどないのである。

「いや、まあ……帰ったら帰ったで山積みなんだけどき。問題が」

ノートやプリント類で少々重くなつた鞆を肩に担ぎ、半壊した実家の修繕や、そもそも『聖杯戦争』自体に対する対策、結局姿を見せない親父についてを思い浮かべてみる。あげればきりがないほど積み重なっており、比例して頭痛の種が積み重なっていくだけというのは輪をかけて痛い。

DIYという論理が広まりつつある世の中とはいえ、蓮自身にそのようなスキルが都合よくあるはずもなく、手を尽くしても穴の開いた壁に板といった応急処置程度だ。専門の職人らに依頼しようにも、現状、物騒極まりない渦中になれば結局は元通りになるといいういやな未来が幻視できるというのも一役買っている。

鞆に入っている宿題の山といい。一成の言葉を肯定するのは遺憾ではあるが、最近ホント厄に見舞われている気がして肩が重い。

せめて一つづつ片付けられるよう、今日は平穩無事に一日が過ぎることを切に願うばかりだ。

「先輩！」

そんな校舎口へと向かうために歩き出した蓮を後ろから呼び止める声の一つ。

「お？ 桜か。どうし——」

振り返れば董色の髪を揺蕩せながら、間桐 桜が階段を駆け下りてきたところだった。あまり運動得意ではない彼女が駆けている姿も珍しいが、何よりもまず階段を駆け下りるのはどうだろうか。主に女性的に。何がと言葉にはしないが、少々はしたないのでとは思わなくもない。仮にも自分は先輩である。桜の事を思えばとさりげなく注意しようとして、こちらの言葉を遮るように語尾を荒げ気味に、彼女はこちらの右手をいきなり掴んできた。

「どうしたもこうしたありませんっ、この間から連絡の一つもなくて、舞弥さんは心配ありませんの一点張りだし——」

本当に心配したんですからと言葉を次々まくしたてる桜。個人的にはそれは単に必要以上の心配をかけたくなかったし、言えば巻き込みそうな気がしたという不安があったのだが、目尻にうっすらと涙を浮かべていた彼女の姿を見てその言葉を飲み込んだ。

蓮にとつては体感で二日前の出来事だが、アサシンの襲撃があったのはあの日桜を家に送り届けた夜の事だ。それから連日事件が起これり、学校はおろか友人にはまるで会っていないし連絡も取っていない。魔術に傾倒した事態を思えば言い訳は立つかもしれないが、桜はあくまで一般人だ。想像でしかないが、それなりの付き合いであるし、きつと自分に責任を感じたり過度に心配をさせてしまったのだろう。可愛い後輩を何泣かせてる現状、先輩失格だなど自嘲気味に、蓮は桜の小言を大人しく受け止めることにするのだった。

「そもそもからして——つて、聞いてますか先輩っ」  
「はいはい。しっかりと聞いてますよ」

返事は適当になってしまった気がするが、やはりここまでよく話し怒る桜というものも珍しく、どうしても微笑ましく思えてしまうのだから仕方ない。と、彼女に負い目を感じる手前、話は受け止めているがそれでも段々と気はそれていってしまう。

そうなれば、自然と意識は違う方向に流れていくもので——  
自然と。

本当に意識していたわけではない。  
だがこの時、自分は放課後独特の喧騒や、目の前で腰に手を当てて指を立てる後輩の微笑ましい姿よりも、

なぜか。  
本当になぜか。

その彼女の首元から目が離せないでいた。  
高学年になってから、片側の髪をサイドで結う事で露わになっているその白い肌に。

「？ 先輩？」

「……あ、いや。すまん」

あまりにも反応がなかった所為か。逆に心配をさせてしまったようだ。先ほどまで珍しく眉を吊り上げていた桜が一転して不安げにこちらをうかがってきていた。

「やつぱり、まだどこか無理してるんじゃないですか」

確認というよりも半ば確信しているかのような問いかけに、失敗したという後悔の念がわく。桜は基本的に自ら進んで矢面に立ったりするタイプではない。所謂自己主張の苦手な部類なのだが、これどうして、なかなか頑固な面がある。

「いや、今朝も確認してもらってお墨付きが出てるし、ホラ今さっきまで何もなかったんだしさ」

「いーえ！　こういう時に自己判断はダメですつ。さ、保健室にいきましょう」

どうやら今の彼女は、その頑固な面が前面に出ているようだ。保健室まで連行しようと大胆にも手を取って引つ張ろうとするなど普段の彼女からすれば考えられないのだが。

「なにも桜がそこまで——」

「でももなにもありません！　先輩は大人しく休んでいべきです」

そもそも放課後だといえ、衛宮のおじ様に迎えに来てもらおうと言いい切り。

今連絡がつかないといえ一昨日会ったばかりだという。

この通り、取りつく島もないとはこのことだろう。男女のという事から、蓮が桜の手を振りほどけないわけではない。それは単に女性である桜に対して力づくでという行為を、衛宮　蓮という人間は容認できないからというだけのくだらない理由なのだが。

「あーっもう、だな。とりあえず休めっていうのは分かったからっ」

蓮も運動部等に在籍しているわけではない。が、同年代の中ではこれでもそれなりに動けると自負している。魔術を使わない「素」の状態で、だ。無論、部のエース級の彼等には及ばないが。とりあえず放課後のこの人目の多い時間にこの絵図は勘弁してくれと何とか説得を試みるが――

「ちよつといいかしら」

その出先を、階段横を通り過ぎようとしたところを呼び止められた。

「遠坂、せんぱい」

皆と同じ学生服を身に纏いながら、一人違う風格を漂わせ階段をゆっくりと降りてくる彼女。

「なんだ、今ちよつと」

考えてみればこの状況で第三者は助け舟が普通なのだろうが、そこに居るのが遠坂 凛その人となると話はガラリと変わる。

「御門先生から直々の呼び出しよ。ちよつと資料室まで連れてきてほしいって言われたの」

要は助けなどでは断じてなく、厄介事が歩いてきたというだけの話なのだから。

上級生ーというのなら蓮も同じだがーである凛が現れたことで委縮したのか、桜が引き留めようとして挙げたと思われる手が空を泳いでいた。

「大丈夫だよ桜。御門先生ならそんな面倒な用事じゃないだろうし」  
個人的にはあの御門先生からの呼び出しというのが非常に気になる。いや、十中八九この場から蓮を連れ出すための口実なのだ予想はできる。問題は桜が強引についていくと言いつき出さないかという一点だった——どうやらその心配はないようだった。

「それに、だな。流石に俺も体の調子が本格的に悪かったら断るよ」  
つかみ損ねた手を胸元に持っていく姿に一安心する。

凛が連れて行くこうとする先はおそらく資料室などではないだろう。昨日今日、おそらく聖杯戦争関連の事で、関係者、それも敵対者である御門先生キャスターの元に妹分同然の桜が尋ねかねない可能性を選ぶとは思わない。口実として他の教師より厳しめと有名な彼の先生の名前にあやかるところか。いや、あの屋上での続きよろしくに三陣営による問答が幕あけるといふ可能性も無きにしも非ずではあるが。

「じゃ、そういうわけだから」

「あ……」

そうしているといい加減焦れてきたのか、凜が空気を両断するかのよう言葉で持って強引に引っ張りにかかった。

承諾した手前、またここ数日の空白の情報を埋めておくためにも、改めて彼女と話す機会には必要だったことだ。

心配してくれる後輩には悪いが、ここは凜の言葉に乗る形で左手で礼の形をり、先行く彼女の後を追う事にした。



職員室へ向かう——と見せかけて、廊下の角を曲がったところで中庭へ出るために通用口を使用する。校舎口に立ったままの後輩の視線を思えばこういうポーズも必要なわけで。少々心苦しいが、だからといって彼女を魔術コチラ側へ巻き込むつもりは欠片もない。

「——と、こんなところかしらね」

中庭へと上履きのまま歩き、建物の影がかかっているベンチに宝石——魔術処理が施されただろう物——を置いた凜が軽く周囲を確認するように視線を巡らせていた。

彼女に倣うように周囲を一別する。今は本日の授業過程を終えた放課後。部活に精を出している生徒らはそれぞれの青春さながらに汗を流していることだろうが、蓮も属している帰宅部の人間や、単に休憩に訪れたもの、ランニングの一環で通過するものなど、昼時のそれに比べれば多くはないが、それでも少なくともはない。

「わざわざあんな嘘ついていったい何のよ——」

問題はないようだなど一息つく。で何の用だと面倒に思える問答を口にしようとして、正面を向きなおした視界いっぱい、なぜか彼女の顔がそこにあつた。

周囲の目を気にする風でもなく、というよりは魔術で意図的に逸らしているからなのだろうが、それにしても無遠慮に至近距離でじろじろベタベタと観察されるのは落ち着かないものがある。

「んー……変化はないみたいね。やつぱり、どう術式組めばこうなるのかしら。悔しいけどさっぱりだわコレ」

「オイ」

だがしかし、断じて心拍数が上昇するといった青いイベントなど欠片もない。何しろ凜のそれは異性に対するというより、ガラス越しにマウスを眺める類のものである。

距離とか匂いとか角度などはこの際余所へ放っておくとして、認めるのは癩だが、ガラスの内にいるマウスがそんな観察者に心ときめくだろうか。

「ん？ ああごめんなさい。それにしても、衛宮のおじ様の魔術は相変わらず独創的よね」

「まあな。これでも、目指しちやいるけど」

目指す頂はなおも遠く高いところだろうか。凜ですらその紐を解くことすら出来ないというのだから、自分程度の半人前には無理難題なのかと蓮自身も思う。もともと、そう口にすればしたらで何当たり前のことを、と目の前の彼女は叱咤するのだろうか。

「それで、『口実』の御門先生はどうしてるんだ？」

見渡す中庭の風景は先のように放課後の一風景となっている。絵の題材にでもなりそうなほど穏やかな時間そのもので、それでいて一部どこか忙しない。一部の物には時は短し青春真つ盛りなのだろうから、それも仕方のない話である。

だが、この平穏な景色が、自分たちには酷く歪なモノに見えてしまうのだ。

「ご覧の通り、口実って分かってるなら、いるわけないでしょ」

「それはまあ——しかし、見事に『直る』もんだな」

「ええ、腹立たしいけど。流石は『魔術師』のサーヴァントといったところね」

今ここにいる場所が、つい最近廃墟同然に焼き払われていたなど、誰も信じないだろう。

蓮はライダー（シンジ）襲撃に会ってからまだ現場を目にしたわけではない。だが凜曰く、幻術で覆い隠していた細かな部分を除き、8割方は修復されていたようだ。魔術師として遠く及ばない、遥か上の存在だと見せつけられたようで酷く苛立たしいらしい。無論、蓮とてこの光景を目のあたりにすれば思うところはある。

「——ま、気持ちにはわからないでもないけどよ。そう眉間に皺寄せるなよ。後で後悔するぜ？ 具体的には15年くらい後で」

「アーチャー……勝手に出てきて、言いたいことはそれだけかしら？」  
「オーケーストップ落ち着け。こいつが不敬だし不快なのは全面的に同意するからとにかくその手を下げろ頼むからっ」

どうせ周りの目は逸れていくのだから問題ないだろと、口笛でも吹

きそうな気軽さで目の前の怒気を風に吹かれる柳のごとく逸らすアーチャー。ことあるごとに主すらをからかうその悪癖に、蓮は凜に同情する思いだ。

「てか、連れてきてるんだなそいつ」

確かに、今確認しているだけで学園内で敵勢力であるマスター、サーヴァント2陣営ある。片や交戦意志なしと主張し、片や何を考えられているのかも分からん馬鹿だが——こうして考えてみると、7騎いるサーヴァントの内、半数が学園に関係していることになる。どんな確率でこれだけそうなのかと頭を抱えたい気分であるし、それを思えば警戒して自分のサーヴァントを連れて歩くのはわかるが、これだけの危険地帯にそう交戦意欲ありありとしているのはどうだろう。藪をつついて蛇という言葉のとおり、下手に刺激すれば何が出てくるかわからないのが現状なのだから。

などと指摘すると、こいつ何言ってるんだと呆れた顔をした凜がため息交じりに指を突き付けてくる。

「それに関しては、単に衛宮君が危機感なさすぎるだけよ。いくら令呪があるといっても、間に合うかどうかは別問題。実際というか見ているとおり、彼らの力は私たちの常識なんて通用しないわ」

ことに備えない蓮のスタンスこそ異常なのだときっぱり指摘され、だからこちらはこの戦いに興味はないと反射的に出かかった言葉を飲み込んだ。

毎度毎度のことではあるし、気安い幼馴染ということでのつい反射で対応しそうになるが、今は怪我人なのだ。出来る限り面倒事は遠慮したい。なので、

「キャスターは？」

キャスター組とライダー組、その動向に関して話を切り替える。こちらが倒れていた期間、まさか彼女が何の行動もしていない、とは考えがたい。ついこの間互いに殺し合いかけた間柄で、この『聖杯戦争』というお題目の中では反目しあうのが普通なのだろうが。

「まだ信頼できる、というわけではないけど、一応言葉通り『不戦協定』を貫くみたいよ」

凜曰く、キャスターは宣言通り動きはないとのことだ。

ことの真偽はまだ判別しかねるが、戦闘に関しては徹底しているらしい。学校内では生徒から成否を集める、厳しくも腕の良い教師然とした姿で同僚である教師陣の信頼もある。

反面、学校外。彼女がどこに住んでいるかといった敷地外に関する情報は皆無だ。同僚や生徒、はてはアーチャーによる追跡も搔い潜られたらしい。

そうした経緯から、現状危険度は低い。が、放置していい問題でもない。ライダー、シンジやバーサーカーの問題もある。複数人によるバトルロイヤル。たった一人の勝者を決めるという儀式である以上、一つの陣営に時間をとられすぎるとも問題という面もある。

凜自身、キャスターと並行して他の陣営も調査していたようだが。

「ということとは現状問題なのは……」

「バーサーカーとライダー。どっちも、サーヴァントというよりマスターのほうが性格的に問題ありありなのが頭痛いわね」

もっか、彼女の頭を悩ますのは件の幼馴染その一人である。

一言でいうのなら無軌道、無計画。

バーサーカーなどはむしろ分かりやすいほうだろう。あれはマスターであるイリヤスフィールが切嗣という明確なターゲットを決めている。関係者という面で蓮自身は巻き込まれる可能性は高いが、幸か不幸か、あの夜に何かしらの負傷、あるいは消耗等で単に動けないのか。どちらにせよ沈黙したままである。また、他陣営と違って拠点を構えているのが大きい。

拠点という意味では御三家である「間桐 シンジ」も例外ではないのだが、彼はここ数日自宅に帰っていない。中学時代からフラツとどこかに行方も告げず消えることが増えてはいた。当時はよくあること、あいつならと何時からか放置してしまっていたが、いざ探すとなるとその行方ではんで知れない。冬木も開発が進んだとはいえ、そう複雑な土地ではないはずなのだから。彼の魔術によるものか、はたまたライダーの能力であるかは推察の域を出ないが。

ともあれ、蓮の考えとしては一つだ。

「当面、シンジに関しては放置でも問題ない、と思う」

「へー……ずいぶん信頼しているのね。ないかしら、オトモダチだから？」

茶化すなどニヤついた意地の悪い視線を切り捨て、改めてアレの行動パターンを思い浮かべようとして——諦めた。

「いや、あいつは別に何も考えてないよ。前回のも、この間行っただけで単に面白そうだからっただけだ」

あの日凜に言った言葉は変わらず、言ったとおりだろと言わんばかりのアーチャードや顔は癩に障るが、実際その通りだとしか言いようがない。

思い返すに、昔からああも無鉄砲だったわけではない。むしろその真逆で、物事には念密に計画立てる。やるからには徹底的に、それこそ善悪といったことに限らず、そつなくこなせてしまう。

成績もよく人当たりも良かったため、出会った頃は好印象であったが——ああ違う。思い返せば今に至るような性格をしていたなど、当時の悪行を思い出して頭痛が起きそうだ。

「まあ、この際貴方とアーチャーの意見を聞いたということにしておきましょう。実を言えば、私もこっちにはそこまで急ぐわけでもないと思っていたし」

情報を整理した凜が一つ咳払いをする。

状況的に、ここまで情報を提供されれば彼女に呼ばれた理由はさすがに察しが付く。わざわざ一呼吸置き、こちらの発言を待つような目を向けられるあたり、試されているのだろうかとも。

「バーサーカー……いやまずはキャスターの真意か」

小さく肯首されたことから、ひとまずは彼女の要求にはこたえられたいらしい。

現状、把握している三陣営はどれも曲者といっている。

乗り手と乗り物が独自に思考し行動する。それも単体それぞれが十分な戦闘能力を持つライダー。

これはライダーが最後に見せた宝具によるものと思われる破壊力も脅威だが、それよりもマスターの行動が読めないところが大きい。

次にバーサーカーだが、これは単純に力量さだ。

圧倒的なまでの破壊力。ただの腕の一振りでも万象を「殺す」異能。本来、「狂化」の能力により、スキルは軒並み失われるのが、バーサーカーというクラスの特徴であるはずが今回起きた例外。マスターであるイリヤスフィールのターゲットが、目下養父である切嗣に向けられているが、あの夜のようにこちらが巻き込まれない保証はない。むしろ他の陣営より確率が高いといえるだろう。

そして、キヤスター。

場所がわからない。対抗手段が浮かばない。

先のとおり、そもそも手段がない時点でバーサーカーとの対峙は論外。そもそも居場所がわからないシンジを追う手間を考えた時、これら二つの陣営より、キヤスター陣営に対する明確なもの。つまりは常日頃、いつもと変わらず教師を続けている点だ。

そう。すくなくとも、他の陣営に比べて接触の機会はある。無論、キヤスターの魔術師としての腕は比べようもなく高次元だとしてこうして文字通り目の前に突き付けられている。だが、それを差し引いて札を切れるのは、凜と蓮のサーヴァントが「対魔力」を保有している点だ。

英霊には生前彼らが成した偉業、逸話により固有の能力としてスキルという形で現れる。それとは別に現れるクラス固有のスキル、その一つが「対魔力」だ。先の屋上で戦いでアーチャーがライダーの呪術を動くことなく弾いた現象がまさにそれであり、この「対魔力」は一部の例外を除き、三騎士に現れるものである。そして、「剣の英霊」である蓮のサーヴァント、セイバーは傾向的に高い対魔力を有する。ランク分けされるそのスキルの中でもAともなれば現存する魔術をほぼ完全に無力することができ、素養にもよるが、神代の魔術すら掻き消せるレベルだという。無論、例外というのは何にでも存在するが、それでもこのアドヴァンテージは大きいだろう。

そしてここにはその三騎士、「剣の英霊」と「弓の英霊」のマスターである二人がそろっている。他の陣営と比較して、論ずるまでもない。

となれば、だ。

凜がこうして改めて呼び出された事、その用事。試すような物言いはつまり。

「まあ、オツケーでしよ。もちろん、衛宮君は『令呪』を放棄してこの聖杯戦争から降りるといふ選択肢もあるけど、あのバーサーカーのマスターからして戦う意思云々は望み薄だと思っけど」

夜には親父と連絡をつけられるだろう。あの夜、バーサーカーと戦ったとあるが、その後には会ったらしい時臣や凜の言葉、反応から無事ではあるらしい。依然として息子である蓮の前に姿を見せないのは不可解ではあるが。ともかく、ことは切嗣と話し合ってから判断してもいいだろう。ようはそれまでの自衛、厄介ごとにどう巻き込まれないかの対処を決めるということ。

「そういうことで、ここに提案させてもらうわ。興味がないといつても、身の安全ともなれば話は変わるでしょう？ 利害も一致する。バーサーカーの脅威がなくなるまでの共同戦線。悪い話ではないと思っけど？」

結論は出ている。というより順を追ったことで逃げ道をつぶされた感は否めない。無論現状がそうした状態であるのは認めるところなので論ずるも何もないのであるが。

どうしたものか。半ば答えは出ているが、一度セイバーと相談してからと凜の提案を煙に巻こうとして算段を立てようとした時だ。視界の端に、この季節では珍しいものが中庭の空を周回しながら降りてくる。

「鳥っ？」

「ああ、親父からの連絡だよ」

昔から見慣れた使い魔、というには妙な物を足にくくりつけられた鳥が近くの木にとまるのを眺め、一鳴きしたそれが嘴より落とした落下物をキャッチする。普段ならば近くにいたり鳥を通じて直接会話による会話となるのだが、物を投げた様子からどうやら連の親父は場所を指定したいらしい。

「どうせ、近くに來てるんだろ」

小さな筒状に収められた中から一枚の紙を取り出し中を確認しながら覗き見ようとしてきた凛に何でもないぞと特に抵抗を示すことなく内容を見せる。その中には、

—23 冬木中央公園—

あの夜指定したその場所へ再度呼び出す文章が短く綴られていた。



それはある男の話だ。

彼は決して多くを望んだわけではない。

たった一つの願い。それは一人の人間が願い渴望するものとしては広域で広大なものだったかもしれない。

男なら、幼い頃に願うこともあるだろう夢。

そうした意味で、彼の願いはともありふれていたかもしれない。

ただソレが他と一線を画していたとしたら、そうした願いを幼き頃より今も抱き続けていたという異常で。

本来成長とともに摩耗し、手放すはずのそれを絶やさなかったこと。

諸人が手放すということはそれ相応の理由がついて回る。

そうだと知って、打ちのめされて尚理想を抱き続けた男。

これはそんな男の物語である。

### 冬木自然公園。

十年前、公には大火災による全焼により、復興事業の一環として一部を公園として再開発した物。だが、実際は大きく違う。

冬木中央会館を中心に、『第四次聖杯戦争』における聖杯降誕の場とされた決戦の地。その激闘の最中、街は文字通りたった一瞬にしてかき消された。人どころか蟲も草木も何もかも、例外なくあの時生き残ったのはたった一人の少年で、同時に、それが当時『彼』が救い出せたたった一人の光。

その公園の一角、街頭の光も頼りない夜の帳の中、煙草を燻らせて男は待っていた。

思うところは大きい。何しろこの公園は彼にとって因縁深く、自身の傷を直視させられる場所なのだから。

嫌だから、忘れたいと投げ出せたらどんなに楽か。だが、男は自身の忌むべき過去をただ負の遺産として蓋をすることをよしとしない。

彼は昔から、そうした傷を捨てることなく抱え続けてきたのだから。「来たか」

新たに気配を感じた彼はコートの中から携帯灰皿を取出し、吸いかけの煙草を揉消しす。そうして待ち人を迎えようかとも思ったのだが、結局彼は新しい煙草を一本取り出して口にくわえた。

一時期は禁煙を決意したこともあったが、戦場に立っていた頃の癖か、気が付けばまた吸い始めていた。既に味などとうに感じない身で意味など無いように思うが、彼が求めるのはそうした面によるところではないのだから、問題はないのだろう。

「煙草、また吸い始めたんだな。いい加減体に悪いって、また舞弥さんに怒られるぞ」

邂逅一番に投げられた皮肉交じりのトスが懐かしくなり、思わず苦笑が漏れていた。

「まあ、な。実を言えば前からちよくちよく吸ってはいたんだが」

この問答は既に何度も交わしてきたことで、いくなれば『お約束』だ。彼、切嗣の待ち人であった養子である蓮も、この会話で何か生産的なことがあるとも思っていない。そう、彼らにとってはこの程度の皮肉や弁明や挨拶のようなもの。

「——でだ。呼んだからには話してくれるんだろ、いい加減」

「ああ、そうだな。長い話になるけど……」

さてどう話したものかと、切嗣は髪をかき上げる。

そう、とても長い話なのだ。とても小話で済ませられるものではないし、そうした意味でこの因縁深い場で話すと決めたのも彼なりの決意の表れだ。

さてと、あらかた今の今まで考えていた順序をまとめ、そこで彼が一人で来たのかと疑問にもち、視線で窺うように問うと、

「セイバーなら向こうで待ってくれてる。親父を心配してたよ」  
「やっぱり知り合いなのか、と問うてくる蓮に、それも含めての話だと短く返答する。」

そうだ。この話をする上で彼女の存在は欠かせない。

もしあの時、第四次聖杯戦争に呼ばれたセイバーが彼女でなかった

のなら、物語は大きく変わっていたはずだろうから。

「蓮。僕はね」

それは彼にとつて古傷を抉る行為同然。だが、こうして息子である蓮は自分の不始末によって渦中に巻き込まれている。二児の父として、ここで背を向ける無様はさせないから。

「魔術師として、過去の聖杯戦争、第四次の生き残りの一人だ」

衛宮 切嗣における負の歴史。

それを今ここに紐解こう。

ドイツ古城。

現代において、今だ城に住むという感覚は日本人においては馴染みも想像もつかない話だろう。実際、当時の切嗣からしても呆れたものであるからして。

「正義の味方になりたい」

他人を救いたいという子供染みた願いを抱き、だけど大人になるにつれて誰も彼も救うのは不可能だと現実をたたきつけられて。自分の手では限界があると悟り摩耗していた時だ。

一つの噂を聞いた。

「冬の城」に住む翁が、極東の地で「奇跡の器」を降誕させる儀式を行っていると。

「奇跡の器」、より広域的に呼ぶのなら「願望器」、  
「聖杯」。

あらゆる願いを叶える器。

それは概念的な話に留まらず、現象としても行使が可能であり。内包した膨大な魔力によるものだという。

「冬の城」の主である「アインツベルン」が極東の地、「冬木」で起こした儀式とはそういう意味で、正確には「万能の器」ではない。膨大な魔力を有したものの、つまりは用途を分けられていない途方もない程膨大な魔力を有する入れ物だ。

故に、その無色に願いたいという色を与えることで初めて「奇跡」は顕現する。そのため、願いたいという色を与えられる「魔術師」であるこ

と、もしくははその血筋にある者がマスターとしてサーヴァントの召喚する権利と、彼らへの絶対命令権、*「令呪」*を与えられる。

聖杯によって選ばれた七人のマスターによる、たった一つの所有権をめぐる殺し合い。それが聖杯戦争の概略だ。

そして皮肉なことに、*「人を救う行為」*を続ける内に *「人を殺す」*行為に最適化されていった男。

方や聖杯という器を手に入れるという願望を数百年にわたり願っている一族。

ここに両者の願いは交わっていた。

切嗣にとって、アインツベルン側が何を願おうと興味はなかった。重要なのは己の手での限界を、聖杯の奇跡をもってしてなら可能かもしれないということ。

だから誰よりも人らしい願いを抱き摩耗していた彼が、その戦いに臨むにあたってもう一度非情の仮面をかぶることに戸惑いはなかった。彼のこれまでの名声、*「魔術師殺し」*という忌み名はそうした意味で優秀なマスターを求めるアインツベルンからしても目にかなうものだった。

故に、そんな彼に誤算があったとしたら。

それはアインツベルンのホームクルスを、一人の女性として愛してしまつたことで。

『正直に言うなら、今すぐに君を連れて逃げ出したいっ』

男と女の間には、娘が産まれていた。

城に設けられた彼らの部屋で、初めて我が子を抱いた彼は、恥も外見もかなぐり捨ててその内を吐露した。

そんな彼を、彼の望みを誰よりも知っていた理解者である彼女は、諭すようにそんな彼の選択を諫めた。きつと後悔するし、貴方は逃げた自分を消して許さないよ。

そうして彼は冬木の地に降り立った。

聖杯を降誕させるために、その憑代である誰よりも愛した自分の妻を生贄に行う儀式の地へ。

戦場は当然のこと混沌としていた。

誰も彼も己の願いを叶えるために最強の英霊カードを用意してきたのだ。一人として半端なものはおらず、一人、一組、一つが脱落していくごとに、街には大きな爪痕が残った。

そして、迎えた最後の戦い。

切嗣が召喚した「最良の英霊」であるセイバー。

「始まりの御三家」の一つ、遠坂 時臣が引き寄せたアーチャーとの戦いは、激闘の末、セイバーの刃が上回る。

アーチャーの宝具の発動をかくぐり、次なる必殺の一撃を見舞おうとした時だ。

瞬間、空から魔王が降ってきた。

比喩でも誇張でもなく、事実その通りなのだから他に言い表しようがない。その手に握った「聖槍」の一振り、周囲一帯を灰塵と化した髑髏の軍勢を率いる破壊公。

すべての元凶である「影法師」を別として、それは文字通り人類の敵として地に降り立った。

サーヴァントのクラスを六つ並列するという異常にして異例の体現。本来召喚されるはずのない存在。

勝てる要素など、希望などどこにもなかった。

加えて時が経つにつれて膨れ上がるその力、セイバーが応戦している中、徐々にその被害は街を飲み込む。そして、「黄金の獣」がその秘奥たる宝具を解放しようと聖槍を構える。もはや猶予はなかった。

故に、切嗣とセイバーは、アイリスフィール聖杯の破壊を選んだ。

実力で捻じ伏せるなど論外で、偶然奇跡が起きるといったご都合主義などありはしない。残された手は、魔王を現世に繋いでいる「小聖杯」、アイリスフィールを破壊する他になかった。

セイバーの聖剣が切嗣の「令呪」による後押しを受け、極光の中、アイリスフィールは飲み込まれていった。

恨み言も、暴言も、ただ彼女が何を言えたとしても、聖杯の機能により、人としての機能を失っていた彼女が何か言葉を残せるはずもなく、切嗣は光に飲み込まれる彼女を仰ぎ見ていた。

聖剣の発動に限界まで魔力を振り絞ったセイバーも消えていた。

つまり、アイリスフィールは見事に破壊されたということで、彼らの目的は達成された。だけど、この結末を諸手を挙げて喜べるはずもなかった。

彼女との思い出は人を救うため、己は天秤であれと課していた切嗣に人らしさを取り戻せた日々だった。同時に、いつか失うものだという恐怖を孕んでいた。どれだけの覚悟を積み重ねても、その喪失の重さに崩れ落ちていた。

大きな消失を経て、第四次聖杯戦争の幕は下りたのだ。

切嗣の話す内容があまりに飛びすぎていて、いつそ荒唐無稽な作り話めいて聞こえる。だが、十年前の決戦の地、*“大災害”*と表向きに処理されたこの自然公園が、その舞台であったと言われると飲み込まざるおえなかった。何しろ自身がその*“大災害”* 唯一の生き残りだ。自然災害や単なる*“大火災”*と言われるよりも、魔術による人的災害と言われたほうがしつくりと収まる。

「じゃあ、親父が、第四次の勝者、ってことになるのか？」

「いや、第四次においては勝者はいないよ。時臣も生きていたし、そもそも勝者が得るはずの聖杯を破壊したんだ。その時点で第四次の儀式は頓挫している。だから、言ってみれば蓮の家族は、僕があの時選んだ選択の結果巻き込まれた犠牲者だ。どう責められようと弁明の余地はないし、償いきれるなんて思ってははいない」

まるで、いや、実際これは懺悔なのだろう。切嗣がいうのだから、彼が言う*“魔王”*とやらを止める為には*“小聖杯”*の破壊以外に手段はなかったのだろうし、そこで迷い続ければさらに被害が大きくなっていただろうと推察するのは容易い。

もつとも、本来衝撃的な告白を受けて自身があまりにも平然としていられたのは、単に失ったはずの家族に対しての記憶がないという要因が大きいのだろう。そうした意味で己も大概ろくでなしの類だ。

「それは、まあ、巻き込まれた人達がなんて言うのかはわからないけど。俺は少なくとも感謝してる。学校も魔術のことも」

だから今思えば、自分が魔術を習いたいといったときに切嗣が渋った気持ち少し分かる気がした。

過去に自身の選択で多くの犠牲を払い、そのたった一人の生き残りが今度は彼自身が忌とんでいるだろう魔道に興味を抱いた。自分が同じ立場だったら間違いなく反対しているだろう。だが、切嗣は幼かった自分の気持ちを酌んでくれたわけで、そこに感謝以外の気持ちがないが混ざることはない。

頭を下げ続ける切嗣に気疎く感じ、話題をそらす為にも話を元の方に戻す。単純に疑問もあるからだ。

「親父が聖杯を破壊したなら、儀式はもう無くなったんだろ？　そもそも五十年周期だって話だし、今回の五度目が十年ってのはどうなってるんだ？」

「五十年という周期は、聖杯が冬木の霊脈から魔力を集めるのに要する期間のことだよ。言ってみれば第四次の勝者不在、破壊される直前の聖杯はほぼ完成していたという事態から、今回の第五次は魔力を集めるのに五十年も必要なかった、というのが僕と時臣の見解だ」

「親父たちが壊した聖杯だけじゃ儀式がなくならないってことは、二つとも破壊しなければならなかったってことか？」

「聖杯には、アインツベルンが用意する『小聖杯』と、約500年前に造られた『大聖杯』の二つがある。10年前、僕とセイバーが破壊したのは『小聖杯』の方で、儀式そのものの核である大聖杯がある限り、このふざけた殺し合いはなくならない」

「じゃあ、親父と時臣さんは」

「ああ、あの魔王が聖杯の中身だと知った日から、僕と時臣の認識は一致している。僕たちの手で、今度こそ『聖杯』を破壊する」

十年前のその日、生き残ったマスターは切嗣と時臣。そして、決戦の地より離れていた時計塔の生徒の三人のみ。

切嗣たちと違い、彼にはもう聖杯に執着はなかったのか、聖杯戦争の事後処理後に接触を試みようとする時臣が訪れた時には、既に冬木を発った後だったらしい。その時臣も、決戦の場で魔術回路に障害を負い、付随して下半身の神経を負傷したらしい。

切嗣においては雇い主であるインツベルンとの契約を蹴った形になるのだから、当然報復措置があつたのかと思いきや、不思議とアインツベルン側からの接触はなかったらしい。その代り、再び「魔術師殺し」"として表舞台に立ったことにより、フリーランスの魔術師や聖堂教会から狙われることが増えたらしいが。

「時臣はあの状態だから、家督を譲った娘に令呪が宿ったみたいだ。いくらか、時臣も難色を示していたけどね。結局は折れたよ。もちろん、全面的にだとは思えないけど……まあ、そんなわけだけだ」

そしていよいよ話の本題に移るのかと、気持ち居住まいを正した切嗣に倣い、こちらも軽くおどけていた雰囲気正す。

切嗣も、単なる昔話に謝罪を重ねる為に今日、こんな場所に、こんな時に呼び出したわけではないだろう。あの「大災害」から今日まで、過去を語るだけならそれこそいくらでも機会はあつた。魔道云々を厭んでいたとしても、子である蓮自身は既に魔術を学び始めていたのだから。

「蓮、今回君を呼び出した本題はここからだ。セイバーの令呪を、僕に譲ってほしい」

故にその提案は、予測できた範囲のことではあつた。

切嗣が他人に任せるのを嫌うとかいうことではなく、この儀式にそれだけかける思いがあるということも、こうして目の前にするだけで伝わってくる。無論、それで娘にマスターになることを良しとした時臣を責めるつもりは蓮にはさらさらない。あの人がどういう人か、娘である凛には及ばないが、それでも上辺だけの付き合いよりは知っているつもりだ。

「冬木に戻る前のトラブルで、帰国が遅れたけど、もともとはそのつもりだった。前回の聖杯戦争でパートナーだった彼女となら、前以上に立ち回れる自負も自信もある。何より、もうこれ以上の犠牲者を出したくないんだ」

本来なら頷いていただろう切嗣の要求。事実、アサシンに襲撃されただばかりの蓮なら、何一つ考えることなく承諾していただろうが、どうしても脳裏に引つ掛かるものがあつた。



「二つだけ聞かせてくれ。アインツベルンのマスター……あの子と、どんな関係なんだ」

虎兜の凶戦士を引き連れ、圧倒的な力と異能でセイバーとアーチャー、二人のマスターをも圧倒した主従。何より彼女は終始「衛宮」の姓に拘り、取分け切嗣に対して尋常ならざる殺意に似た狂気を抱いていた。

自分がバーサーカーの一撃により、切嗣が戦闘に介入して何があつたかは知れないし、凜もセイバーもその事について肝心のことは語らなかつた。

切嗣が魔術師として腕が立つことは知っているし、蓮自身誇つてはいる。だが、それである銀髪の少女に対抗できるのかといわれると、答えに窮するのだ。

切嗣の要求を呑むつもりはある。だがその前に、こちらの疑問にも答えてくれと、言葉をつぐんでいた切嗣にこちらも無言で返答する。すると、とても短く目を閉じて軽く仰いだ切嗣が一言だけこぼした。

「娘だよ」

大方、切嗣がフリーランス時代、魔術師専門の殺し屋として暗躍していた頃の因縁なのかと思いきや——いや、そもそも彼がその「魔術師殺し」としての活動を止めたのは「聖杯」に願い、希望をもってアインツベルンと接触したため。その過程で妻となる人を得たということ、その娘が怨恨を抱いて冬木の地に送り出されたというのもうなずける話。何しろ、彼女から見れば実の母を実の父親に殺されたという境遇、その心中は察せられるなどというレベルの話ではない。ただ一つ、彼女が並々ならぬ憎しみを、切嗣に向けているということだけは確実に。

「じゃあ親父は、今度も「聖杯」を破壊するっていうのなら、必要ならあの子も殺すのか？ 実の娘だろ」

あの子の目的は切嗣であろうと、アインツベルンの目的は聖杯の降誕だったはずだ。なら当然彼女は小聖杯とやらの類する品をもこの地に持ち込んでいるはずで。それも品に限らず、第四次における彼女

の母親と同じく、自身を聖杯とする可能性もあるわけで、そうすれば当然。

「ああ、それこそ今更だ。『聖杯』を完成させ、その中身があふれれば、国一つは容易く飲み込まれるだろう。そうなつてからじゃ遅いんだ。例えばイヤを天秤に乗せても、僕にそちらは選べない」

切嗣はもう一度多くの人を救うために、肉親を切り捨てるということになる。自分ならどう考えたとき、蓮にはその回答がない。考えるだとか想像するのではなく、家族ぜんていがないのだから比べようもない。だから養父である切嗣の考えは理解できないし、なぜ『大切なもの』と『その他大勢』が互いに天秤に乗るのかも理解できない。そもそも価値の比重など人それぞれ違うはずであり、その単価が大小なく等価であるというのがまずもおかしい。

そういった意味でいうのなら、断固否だと蓮は主張する。

「だったらっ、さっきの質問の答えはノーだ」

切嗣の主観に照らし合わせるわけではなく、蓮個人の信条。特別なんでいらないし、代わり映えのする日常なんか望んでいない。

親父が魔術師だから？

そんなものは既に自分の日常の一部だし、そもそも切嗣と自分の出会いからして魔術がらみだ。

人を何人も殺した？

ああそれは罪深いよな。けど犯した罪は無くならない今生きている人間が背負い歩むべきもので、決して見捨てる理由なんかじゃない。見捨てていい関係でもない。

けど、その人がまた更に罪を犯すというのなら――

「親父にそんな選択をさせるかよ。イヤとかいうあの子にも、そんな親子で殺しあう真似なんかさせない。だったら俺が、セイバーと俺が二人で止める。絶対に」

どんな手段を用いても止めると、彼の前に立ちはだかるようにして叫んだ。

だが、切嗣はそんな蓮の主張を聞いていたのかいないのか。表情一つ動かさず、持っていた煙草をコートから取り出した携帯灰皿に入

れ、肺に吸い込んでいた煙を一息に吐き出す。

「……一つ、蓮に言いそびれたことがあった」

続いてこぼれた独白は、彼が味わった絶望の片りんだった。

「あの日、あの時、アイリを『見捨てた』あの時、僕は悪魔に契約を迫られた。拒否権なんかない強制。報酬は不死、死者蘇生の恩恵。対価は魂の隷属だ。ふざけてるだろ。一度死ねば、後は永遠と、この体は髑髏の軍勢の一員にされる」

つまりは蓮が切嗣と出会ったころから、彼の体はそうあったということ。望まぬ契約から、永遠に終わらない不死の奴隷とされる道。そして軍という単語、その主がどういう人物であるのか、その先にある未来が切嗣の望みと真逆を行くものであるということとは考えるまでもなかった。

「祝えよ、今こそ汝の悲願が成就する時だ……その祝福シロイの言葉の通り、抗っていたはずが、結果として多くの命を奪ってきた。昔と変わらぬ、たった一つの目的のためだけに」

戦場に行き、戦いをやめさせるためにその原因である主要人物を殺した。それで止まらなければ次を、それでだめなら更に。

いくつもの戦場、テロ、事故、いくつ歩き続けても、人の嘆きと叫びは無くならない。彼の天秤は常に傾き続ける。

そして彼が戦場に訪れるということは、等しく死の危険が付きまとうということ。彼に課せられた契約はあくまで死後におけるもの、現で何かを変えてくれるわけではない。

だが世界にはそうした紛争のほかに、魔術的な事件、冬木の聖杯に類するものも数あるわけで、そうしたものを目にした以上、今まで以上に捨て置けなかった。だからある日彼は決断した。

「そして、化け物の呪いに抗うためには、僕自身も化け物になるしかなかった。『聖遺物』、時臣と僕はそう呼んでる」

化け物と戦うため、彼もまた人の身を脱ぎ捨てることを。

同時に、その選択が例えようもないほど狂っていたことを、彼は身をもって味わったのだという。

「そして『聖遺物の使徒』となってから、副作用として慢性的な殺人

欲求が襲うようになってきた。慣れるまで、何人もの人をこの手にかけたよ。幸か不幸か、この世に争いが絶えた歴史はないからね。殺す人間を選んで魂を食らって……確かに、体は望んだ通り不死にも近い頑強さを得たさ」

「聖遺物」を宿した者は、原則聖遺物によった攻撃以外で傷を負わない。固い脆い、相性の問題ではなく、魂の強度が上がるのだ。精神的な意味だけでなく、肉体的な意味でも。

例えば、百人の敵を前にナイフ一本で一振りしたとしよう。

この場合、百人全員を倒せるか否か。

論ずるまでもないだろう。答えは否で、高々ナイフ一本で倒せる人数などたかが知れている。仮にこのナイフが伝説級の代物だったり炎や雷を起こせたとしても、そもそもナイフではなく拳銃だったとしても、結果は変わらない。人一つの形をした入れ物に、数十から数百の魂が収まっている。それらが霊的装甲となって周囲を覆う。今の切嗣には、例え眼前で弾丸を放たれたとしても、眼球の一つもつぶれやしないというでたらめ。

「けど、やがては感覚も感情も鈍化していった。いつの間にか、殺さないために人を殺していることに気が付かされたよ」

恩恵の代償。

身の丈以上のモノを望むのなら、対価を積まなければならぬのは道理だ。だけど切嗣の性格では刹那的に殺人に酔うこともできず、かといってその苦しみを投げ出して狂うこともできなかった。危ういバランスで、彼は罪の意識を積み上げて、同時に霊的に装甲を纏い、過去受けたという「祝福」に抗うために生きてきた。

それこそ己の信念を捻じ曲げて、これだけは為さねばならないと強迫観念に突き動かされてでもいるかのよう。

「っ、親父の過去がどれだけ重責になってるかなんて、俺なんか口が裂けてでもいえなことじゃないってもの十分承知だよ。けどそういうの理屈じゃないだろ。目の前で親が子供殺すなんてほざいてたらぶん殴ってでも俺は——」

「言っただろう。僕も、蓮にも時間がない。もともとこの件について

話し合いに来たわけじゃないんだ」

瞬間、目の前にいたはずの切嗣の声が正面から背後にスライドする。

「え？」

腕、肩、頭と連続して衝撃が走り、世界が目まぐるしく回転する。

いや、投げ落とされていた。

「許しを請う気はない。怒るのも当然だと思う。けど、これが最善策なんだ」

膝で踏みつけるようにうつ伏せに押し倒され、関節を決められていくのか激痛が走る中、切嗣のコートから鈍色に光る白刃が一振り取り出されるのが目に映った。

「や——」

終始、切嗣の目は笑っていないかった。

振り上げられた右腕が、躊躇いもなく振り下ろされる。

その時浮かんだ言葉はただただ「何故」という疑問。

なぜ自分が養父である切嗣に刃を向けられているのか。

なぜ自身は不用心にもセイバーを置いてきたのか。

なぜこうして刃を向けられているというのに体が無抵抗なのか。

だが疑問に耽る間はなく、体感にして失速していたはずの時間と思考の波長が合致する。

時は止まらない。無常だ。

コマ送りのように引き伸ばされていたナイフの一振りは現実の時の波に乗り、刃は「令呪」が刻まれている右手首へ向けて落とされ。

「——っ」

ついにその時は訪れなかった。

「!？」

なぜと再度思考の沼に嵌りかけた頭を振り、力任せに、全力で拘束を振りほどく。その際に無理な姿勢から力任せに地面をけり上げた反動か。切嗣から離れることには成功したが、体の方向まで考慮する余裕などなく、背中から近くの雑木林にボーリングの玉よろしくなだれ込んだ。

「っ……切れて、いや刺さってるのに。どうして——」

頭を強打しなかったことが奇跡的、且つ出鱈目な脱出劇だ。だが、脱つする直前に振り落されたナイフの行方が気になり、視線を恐る恐る右手に向けるとそこには切嗣が持っていたナイフが深々と右手首を切断しにかかっていた。

「見た目に反して、痛みはないだろうか？　麻酔や痛覚の遮断とは訳が違うからね」

不思議だろうと声をかけてきたのは、先ほどナイフを振るった本人で。

「ちよつと待てよ親父。なんだよコレ。いったい何を」

知っているんだと土埃の向こうからゆつくりと歩いてくる彼に問

い詰めようとして——だけど体は大きく後方へ吹き飛ぶ。

いや、吹き飛ばされていた。

「つ——あ、なん、で」

「『このくらい』なら痛むだろう。つまり、それだけ感覚に狂いが生じているのさ」

土煙がその衝撃と圧によって切裂かれる。

その向こうから、古めかしい銃を構えた男が立っていた。

単発銃と思われる中折れ式のそれから薬莖を取出し、懐から取り出した弾を手慣れた動作で込めていく。

「つ、くそ。なんだよコレ」

視線を切らないよう視界の端に切嗣を収めながら、痛みが走る腹部を確認すると、そこには小さな風穴が空いていた。

ありえない。

その一言に集約され、本来こんな傷を抱えれば痛むどころか声にもならない激痛が襲うはずだ。だというのに、切嗣がいうように、まるで感覚が麻痺したかのように、体が脳に訴えるのはただ痛いといった程度の信号。

「残念ながら、バーサーカー戦で負った傷の影響ではないし、こちらで行った治療による副作用でもない。純粹に、驚異的な速度で身体が組み替えられていつているんだよ」

浮かんだ要因を口に出す前に封じられる。

だが衛宮 蓮が習得し鍛錬してきた魔術は別段特別なものではない。ただ一つ、切嗣に憧れて極めようとしているものはあるが、それにしても未熟だ。だから間違いなく、あの時バーサーカーから一撃を受けて生還したのは自分以外の助けがあったはずでだ。

しかしならば、この鈍った痛覚はなんなんだと考えようにも、穴だらけの回答は己の腹部の風穴が否定する。

そんな時だ。

吸いかけの煙草を揉消し、もう一本を取り出した彼が新たに火をつけながら語りだしたのは。

「こんな話がある。一人目は、巷を騒がせていた強姦魔だった」

「何の話を」

今まさに殺されそうになっているこの場にそぐわない、まるで脈絡のない話だ。

そもそも今この場で殺されかけている蓮に対して誰かが殺された事件を告げて何になるというのか。

「二人、いやこれは二件目か。犠牲者は七人。新都のビル街でたむろしていた不良グループ。周辺住民からは煙たがられていたようだが」  
だが続く言葉がキーとなり、切嗣のいう話は何であるのか、その形が判明する。

連続する犠牲者、それも例外なく殺されている事件。三日前・・・から冬木を騒がせている、新都を中心に相次いで変死体が発見されている凶悪事件だ。

三件目は今朝の報道番組でも取り上げられていて、確か新都の外人グループが両方に合わせて十一名。現場の形跡から、何かの取引現場だったようだが両者に争った形跡はなく、そもそもそれらの死に方からして、専門家は非現実的だという。

「今も『頭部』が見つかってない猟奇殺人だろ。正直、そんな気味の悪い話がこれと何の関係があるっていうんだよ」

死体はどれも例外なく全員『首』がら上を切断されていた。

力が必要だとか、器具があれば体格性別の特定材料とはならないなど、ここ連日テレビで物議を醸している。

「その話にはまだ続きがある。表向きには公表されていないが、四件目の事件が存在していた。教会側の隠蔽によって揉消されてはいて、被害者はいたが死者はゼロ。一般関係者の記憶は改竄されているから知らないのは無理もないが」

犯行が行われ、その被害者の記憶を隠蔽しなければならぬ事態。裁定者である教会が出てくるということとは、この事件は『聖杯戦争』に起因する事件という可能性があるということ。そして何より隠蔽された事件を、立场上部外者である切嗣が知っているということはずまり。

「ああ、未然に事件は防がれた。その夜、僕と時臣は現場にいたから



ね」

弾倉に弾を込められた銃が、ゆつくりと蓮に向って向けられる。その銃口の先は、間違いなく蓮の頭に向けられていて。

「言っただろう僕も『蓮も』、二人とも時間がないと。だからこれに議論の余地はない。決定事項だ」

それは殺すという意味の明示。

先ほどナイフを令呪のある右腕に振り落したのとも、急所をそらして腹部を撃ったものとも違う。

「なんかの冗談、だよな。やめろよな」

令呪を奪うだけなら殺す必要などないはずだ。

だから今までの攻撃も致命傷を避けたもので、過去アイリや娘イリヤのことを話したことも含めて、それだけ切嗣が蓮をこの『聖杯戦争』から遠ざけたいだけの芝居程度に認識しようとしていたのに。

「親父、昔からそういうの似合って——」

「『聖遺物』を宿した者、使徒になった者には絶えず殺人衝動に駆られる。過去僕も経験してきたように、この衝動は『聖遺物』と契約を結んだ以上逃れる術はない。魂を燃料とするソレ等が、供物工サを寄せと宿主に吠え立てるからだ」

無関係であるはずのピースが少しずつ、まるで歯車の歯の様に噛み合っていく。

切嗣との出会い。

獣の祝福ノロイ。

空白の記憶。

連続殺人。

そして『聖遺物』。

『衛宮 蓮』という魔術師は、既にこのふざけた『聖杯戦争』コロシアイ』と無関係ではなく、当事者であったという——

「昨日の夜、蓮が目覚める前の晩だ。時臣と僕は『聖遺物』に動かされている君を見つけ、拘束した。今日一日観察して、その汚染具合が手遅れだということも、確認した」

その時彼は、自身の日常が崩れ去った音を聞いた気がした。

「だから今日ここで、僕は『使徒』であるキミを排除する」  
視界を焼きにかかるマズルフラツシユと轟音を耳にしながら、周囲が遠く感じる程の混乱の最中、銀に光った凶弾が放たれた。

「——っ、おお——おおお!!」

その行動は、まったくの反射から出た行動だといっていい。

眼前に迫る脅威に対して手をかざすという人という生物の反射行動。結果として、左手の肉を貫く痛みを受けつつも、蓮は頭部への一撃を寸でところで回避していた。

「なんの、つもりだクソ親父ッ」

切嗣に対して吐いた言葉に対して、それが形骸的なものだということとは蓮もわかっている。彼の言うとおり、議論の余地がないからの攻撃。だから蓮自身答えが返ってくるとは思っていないし、転がるようにして体制を整えた蓮はすぐさま距離を取るべくさらに後方へ飛ぶ。

そう、身体能力を魔術によって強化した水平の跳躍。距離にして数メートルを一息に稼ぐ行為は、物理法則をまるで無視した魔術師であればこそだ。

しかし、

「前より早い——が、遅いな」

「っ!」

上方からの強襲。その正体はただの踏み付けという魔術も技術もない子供の喧嘩じみた行動。

だが、その過程は互いに人体の許容を優に超えた速度の中で行われた出来事。

例えるなら、プロが投げた豪速球を点で貫くという行為。それも正面から迎え撃つでもなく通過していくそれを真上から。加え、投げられた球に対して追随するという運動力学に真正面から喧嘩を吹っ掛けるかのように、実行した切嗣の表情は相も変わらず徹底して醒めていた。

「この……重いんだよっ」

渾身の力で胸を踏んでいた右足を掴みにかかる、彼はあっさりと距離を開ける。

「ツ——は、あつ、冗談、じゃねえぞ」  
「……………」

体を後転の勢いに任せ、そのまま後ろに軽く飛ぶようにして体制を整える。先ほどの様に大きく距離を稼ごうというへまは選ばない。

蓮にとって、魔術の師は切嗣なのだ。今まで修練してきたそれは彼に習ったもの。また同じく「聖遺物」を宿しているという切嗣の言葉を信じるのなら、両者ともステータス的には底上げされているという事だ。

ならばこれは単純に練度の差の話である。

魔術から戦闘その行使に至る全て、彼我には絶望的なまでに開きがあるという明示。

「くそっ」

だから切嗣相手に切れるカードなど、実際はないに等しい。

せいぜいが虚をついての一撃離脱。この場を兎にも角にも仕切りなおす必要が蓮にはあり、破れかぶれの突進に見せ、直前ですれ違う逃走を狙った疾走。

全神経を接触の瞬間まで研ぎ澄ませた。

逃走を狙ったといっても、ただで逃げれると思っているわけではない。致命傷とまでいかなくとも一撃、少なくとも注意をそらせるだけの力を込めて。直前までは蓮自身本気で当てる……気だったのだ。

「残念だけど」

それを、擦れ違う一瞬、伸ばした腕を絡め捕られるようにして地面に打ち付けられた。

「起点が見え見えだ。初見の相手になら十分通っただろうが」

苦悶の声も出なかった。

それほどまでに綺麗に入ったということは当然こちらの狙いはお見通しだったということだ。

「だ、つたーらー」

悲鳴をあげる関節を無視して無理やり腕をねじることで拘束を振

り切る。

アサシンの遭遇戦でも使った痛覚の伝達を遅らせることによる疑似遮断。その行使はあの夜の様に、半人前とは思えない速度と冴えをもつて実行したというのに。

「言つただろう。これは決定事項だ」

起き上がろうとした起点、その掌を撃ち抜かれた。

「っあ、グ——ッ」

「これで、両手だ。理解しただろう。冗談でも、ましてや遊びやおふぎけなんかじゃないさ。恨んでくれても構わない。このくだらない戦いは結局止められない。だけど聖杯を破壊するためには儀式を起こさざるおえないという選択をした時点で、第五次における如何なる犠牲も背負う覚悟をしてきた」

また寸部違わぬ動きで次弾を装填する切嗣が、これまたゆつくりと距離を一步一步詰めてくる。

今度は外さないため。

『arrest——』

『time alter——』

加速と加速が、周囲の音を置き去りにする。

「くそ、ふりきれねえっ」

魔術の冴えは先ほどから過去最高域を更新し続けている。本来なら痛覚の受信から術式へノイズでも入りそうなものだが、切嗣の言葉通り手や腹に穴をあけられているというのに、脳が感じる痛みは既に小さくなっている。のみならず、今こうしている間にも傷は塞がっていく。

「なかなかの完成度だ。鍛錬を欠かさなかつたんだらう。それだけに」

認めたくはないが、これはやはり己の体が“人間”という枠から外れているということだ。魔術師という“異端”の括りをもつてしても説明するには不十分だ。

「できれば、もっと違う場で見てみたかったよ」

「——っ」

ゼロ距離で放たれた衝撃と轟音。

己の一部が欠けた感覚という未知。

高速移動中にかかる埒外の力に、体は制御を失って独楽のように土煙を上げながら投げ出された。

「これで、逃走は不能だ。いくら『使徒』とはいえ、成りたての君では新しく手足を生やすようなまねもできないだろう」

残った両手と左足、そのうち両手をバネに力の限り後方へ飛ぶ。膂力は蓮自身も驚く程で、即興のはずが5mは易々と距離をあける。が、この程度でどうにかなるほど現状は生易しくない。

続くはずの着地の一瞬。左手が地面と接する瞬間をピンポイントで撃ち抜かれ、掴み損ねた地面へ左を庇うように反対の肩から落ちた。

無言のまま向けられる銃口。

無慈悲に放たれる追撃は完全にこちらの足を止めるもので。だからこそ体勢を崩された状態で出来ることなど何もない。それこそできたのは精々無事な腕を強化の魔術で硬化し庇うくらいで。

なぜか。

本当になぜかその時、撃ち込まれたはずの凶弾が、背後の木の二本へ風穴を開けていた。

「え？ いや今」

訳が分からないし、切嗣がここにきて決心を鈍らせる類でないことなど息子であり、魔道の弟子である連が誰よりも知っている。

「『活動』……となれば」

呆けているこちらをお構いなしに、掬い上げられるように仰向けに倒された連の喉元に、先ほど右手を切りつけたナイフが振られる。そう、全力の、初めの勢いそのまま——首には、鮮血どころか傷すら入らない。甲高い、まるで金属同士がぶつかる様な音が鳴り響く。「さつき連が僕の撃った弾を『切った』ように、体がより聖遺物に同調してきている証拠だよ。もう、こんなおもちゃじゃ文字通り刃が立たないというわけさ」

そういいながら、銃口は額ではなく右腕に移される。マウントを取

られ、片足を失った状態で抵抗しようにも、切嗣の言葉を信じるのなら彼も「聖遺物」を宿しているということになる。単純な力で振りほどけるはずもなく、今度はナイフではなく銃を向けているあたり、それはまだ「使徒」に成りたての蓮へ有効なのだろう。

「令呪」は持ち主が死亡すれば自動的に消失する。残るのではなく、その場に痕跡を残さないという意味で、切嗣の目的を思えば当然だ。

よって、絶体絶命は揺らぎようもなく。連がこの状況を打破するには、先ほど起こした想定外の要素をもって打倒するしかない。だが、先ほどの「斬撃」すら無意識、つまりは奇跡のようなもの。

奇跡は人の意図とは外れた現象。起こりえない可能性であり、そう易々と実らないからこそその奇跡。

今をもつて魔術も半人前どまりの蓮に、現状から絞り出せる筈もない

「……残念だよ」

諦めない。

ただその一念から意思を通さない全身に気をめぐらせ——だが引き金が絞られる銃の前に、体はピクリとも動きはしない。

その蓮と魔弾との距離が限りなく零に埋まる刹那。

『■■■■■■』

とても澄んだ、聞き覚えのある声をどこからか耳にする。

それはまさに息をつく間もない刹那の出来事で、だからこそそれは現実味のない錯覚であるはずなのに。

時よ止まれ——おまえは美しい。

知らず言葉を、時の概念さえも否定してここに唱えていた。